

(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第29集

船 橋 遺 跡

-建設省河川事業進入路建設及び府営美陵住宅建替に伴う調査報告書-

1998年2月

(財) 大阪府文化財調査研究センター

船 橋 遺 跡

-建設省河川事業進入路建設及び府営美陵住宅建替に伴う調査報告書-

1998年2月

(財) 大阪府文化財調査研究センター

序 文

奈良盆地から大阪平野に流れ出たばかりの大和川と河内の台地を下刻して北流してきた石川との合流点の下流、現大和川の河川敷とその両岸に広がる船橋遺跡は、大和川の河床や河岸が浸食される度に土器や石器などの優品が露出し、コレクター垂涎の遺跡であった。大和川は、宝永元（1704）年に大阪湾に直接注ぐ流路が開削されたが、それまでは石川との合流点から北ないし北西流していた。そのため、船橋遺跡は、本来大和川の左岸、通称国府台地と呼ばれる洪積段丘の段丘崖から扇状地性低地に立地していた。それが、新流路により遺跡の中心部が分断され、河川内に取り込まれてしまったものである。

船橋遺跡周辺は、大和へ入る主要交通路が集中する地域であり、交通の要衝として府下でも屈指の重要な地点である。古代の文献に登場する古道だけでも、具体的な道筋比定には異説はあるものの、和泉と南河内の台地上を東西に走る大津道、丹比道、茅渟道、生駒西麓を南下する南海道、上町台地先端部から河内低地を南東に斜行してくる渋川道がある。これらの道路は、古代に官道として整備されたものであろうが、穴虫峠、竹内峠、竜田越などの各ルートを経て大和へと通じている。古代以降も、後に奈良街道、長尾街道、竹内街道などと呼称されるように、主要交通路として利用されている。

さらに、この地域は、大和川を運上してきた舟運の終点でもあった。それは、近世においても、上流にある北の生駒山地と南の金剛・葛城山地を分断する亀ノ瀬峡谷の急流を舟が通行できず、剣先船や柏原船も一旦荷を下ろし、陸路を使って現奈良県王子町藤井まで荷を運んだ事でも証明される。近世より以前においても、この地が物資の集散場として高い役割を果たしていた事は間違いない。

このような立地条件のため、船橋遺跡周辺には、歴史的に重要な遺跡が密集している。特に、古墳時代や古代の遺跡の稠密度は特筆に値するが、ここでは本文第Ⅱ章を参照願いたい。

船橋遺跡は、非常に著名な割りには発掘調査例が少ない。遺跡発見者の山本博氏の昭和20年代の調査で遺跡の重要性が認識された後、昭和31～35年の大和川遺跡調査会による河床に露出する遺構面を対象にした発掘調査で、質量ともに卓越した遺構、遺物が検出されて注目を集めた。その後、高水敷の整備に先立って当センターが昭和50年度に試掘調査を実施し、土坑内より弥生時代から古墳時代への移行期の一括遺物を検出している。平成に入っても、大阪府教育委員会や柏原市教育委員会の手で幾つかの発掘調査が実施されているが、遺跡の広さの割りにはあまりにも小面積であり、船橋遺跡の全容が明らかになったとは到底言いかたい。

今回の発掘調査は、大和川高規格堤防建設に先立って行われたもので、当センターとしては20年振りの船橋遺跡の調査となった。今回の調査では、96-1・2地区の中心部が、平安時代の河川により削除されていたために遺構としては残りが悪かった。それでも河川内からは通常集落では出土しない銅製帶金具未製品、石製鎧帶などが出土しており、本来遺跡の持つ歴史的内容の豊かさをうかがう成果を得ている。

これも、ひとえに大阪府教育委員会、建設省大和川工事事務所をはじめとする関係各位のご指導、ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへのご支援を賜るよう切に希望する。

平成9年2月

財團法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足

例　　言

1. 本書は大阪府藤井寺市大井5丁目に所在する船橋遺跡の調査報告書である。
2. 調査は大和川高規格堤防工事・府営美陵住宅建替に伴うもので、建設省近畿地方建設局大和川工事事務所・大阪府建築部住宅建設課の委託を受け、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査は調査部長井藤徹、参事兼調整課長中西靖人、南部調査事務所所長藤田憲司の指示のもと、調整係長福田英人の協力を得て、現地調査は係長寺川史郎、技師亀井聰・奈加智美・河端智・遺物写真撮影・焼き付けは南部調査事務所調査第1係主任技師立花正治が担当者として実施した。
4. 現地調査は1996（平成8）年3月から開始し、1997（平成9）年2月に終了した。整理作業並びに本書の作成は寺川が指揮し、調査と平行して行った。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会・藤井寺市教育委員会・柏原市教育委員会、建設省大和川工事事務所・大阪府建築部住宅建設課などの関係諸機関からご指導・助言・協力を賜った。
6. 本書の作成にあたっては、寺川（第I章、第III章遺構）・技師若林邦彦（第III章第1節遺物）・仲原知之（第II章、第III章第2節遺物）が行った。
7. 本調査に関わる遺物、写真、カラースライド、実測図などの各種記録類は、財団法人大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

- ・遺構実測図の基準高については全て東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。
- ・平面図は国土座標にのっとった平面直角座標系、第VI座標系に準拠し、挿図における座標の記載は全てメートル単位で表す。また方位の矢印が示す方向は座標北を示す。
- ・土色に関しては小山正忠・竹原秀夫編 1995「新版標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色彩監修に準拠した。
- ・遺構番号は調査時に付与した通し番号で設定している。

目 次

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 第1節 調査に至る経緯と経過.....	1
第2節 調査の方法.....	2
第Ⅱ章 位置と環境.....	4
第Ⅲ章 調査の成果.....	8
第1節 96-1-1~5トレンチ.....	8
第2節 96-2-1~3トレンチ	93
第Ⅳ章 まとめにかえて	103

挿図図版目次

図1 調査位置図 (1 : 25,000)	図20 96-1-1-2-3トレンチ 第4面ベース 遺構12(1~4)・97(5.6)・99・103平・断面図、出土遺物
図2 調査区位置図	図21 96-1-1-2-3トレンチ 第5面 平面図
図3 調査区地区割図	図22 96-1-4-5トレンチ 第5~1面 平面図
図4 遺跡分布図	図23 96-1-4-5トレンチ 第5~2面 平面図
図5 96-1-1-2-3トレンチ 断面図	図24 96-1-1-3トレンチ 第5面 遺構114出土遺物
図6 96-1-5トレンチ 断面図	図25 96-1-1トレンチ 第5面 遺構142出土遺物
図7 96-1-1-2-3トレンチ 第1面 平面図	図26 96-1-5トレンチ 第5~1面 ピット190~195、197、201~203、204
図8 96-1-4-5トレンチ 第1面 平面図	図27 96-1-1トレンチ 第5面 遺構125平・断面図、出土遺物
図9 96-1-1-2-3トレンチ 第2面 平面図	図28 96-1-1トレンチ 第5面 遺構219平面図、出土遺物
図10 96-1-4-5トレンチ 第2面 平面図	図29 96-1-1トレンチ 第5面 遺構122平・断面図
図11 96-1-1-2-3トレンチ 第3面 平面図	図30 96-1-1トレンチ 第5面 遺構123平・断面図
図12 96-1-4-5トレンチ 第3面 平面図	図31 96-1-5トレンチ 第5~2面 遺構185平・断面図
図13 96-1-5トレンチ 第3面 遺構172平・断面図	図32 96-1-5トレンチ 第5~2面 遺構186遺物出土状況図1
図14 96-1-1-2トレンチ 第3面 出土遺物	図33 96-1-5トレンチ 第5~2面 遺構186遺物出土状況図2
図15 96-1-5トレンチ 第3面 遺構172 出土遺物	
図16 96-1-1-2-3トレンチ 第4面 平面図	
図17 96-1-4-5トレンチ 第4面 平面図	
図18 96-1-1-2-3トレンチ 第4面ベース 平面図	
図19 96-1-1-5トレンチ 第4面 遺構1 (1~13)・5 (14~23) 出土遺物	

図34 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構206平・断面 図、出土遺物	図61 96-1-5トレンチ	第6面 遺構210平・断面図
図35 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構207平・断面 図	図62 96-1-1トレンチ	第6面ベース 遺構129出土遺物
図36 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構207平面図	図63 96-1-5トレンチ	第6面 遺構209(1.3)・210-21 1(2.4)平面図、出土遺物
図37 96-1-1トレンチ	第5面 遺構122出土遺物1	図64 96-1-1トレンチ	第6面ベース 土器151~158、 160~162出土状況
図38 96-1-1トレンチ	第5面 遺構122出土遺物2	図65 96-1-1トレンチ	第6面ベース 土器151・152・ 154-1・154-2・155・157- 1・157-3・160・161・162
図39 96-1-1トレンチ	第5面 遺構122出土遺物3	図66 96-1-1トレンチ	第6面ベース 土器153(4)・1 56(1)・157-2(3)・158(2)・ 6層 土器279(5)・6面ベース (6~17)出土遺物
図40 96-1-1トレンチ	第5面 遺構122出土遺物4	図67 96-1-1トレンチ	第6面ベース 遺構126出土土器
図41 96-1-1トレンチ	第5面 遺構122出土遺物5	図68 96-1-1・2・3トレンチ	第7面ベース 平面図
図42 96-1-1トレンチ	第5面 遺構122出土遺物6	図69 96-1-5トレンチ	第7面ベース 平面図・7b 層出土遺物
図43 96-1-1トレンチ	第5面 遺構122出土遺物7	図70 96-1-1・2・3トレンチ	第8面 平面図
図44 96-1-1トレンチ	第5面 遺構123出土遺物1	図71 96-1-1・2・3トレンチ	第8面ベース 平面図
図45 96-1-1トレンチ	第5面 遺構123出土遺物2	図72 96-1-5トレンチ	第8面ベース 平面図
図46 96-1-1トレンチ	第5面 遺構123出土遺物3	図73 96-1-1・2・3トレンチ	第9面 平面図
図47 96-1-1トレンチ	第5面 遺構123出土遺物4	図74 96-1-1・2・3トレンチ	第9面ベース 平面図
図48 96-1-1トレンチ	第5面 遺構123出土遺物5	図75 96-1-5トレンチ	第9面ベース 平面図
図49 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構185出土遺物1	図76 96-1-5トレンチ	第10面 平面図
図50 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構185出土遺物2	図77 96-1-5トレンチ	第11面 平面図
図51 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構185出土遺物3	図78 96-2-1-2・3トレンチ	断面図
図52 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構186出土遺物	図79 96-2-1-2・3トレンチ	第1面 平面図
図53 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構207(1)・20 8(2)出土遺物	図80 96-2-1-2・3トレンチ	第2面 平面図
図54 96-1-5トレンチ	第5-2面 遺構207出土遺物	図81 96-2-1-2・3トレンチ	第6面 平面図
図55 96-1-5トレンチ	第6面 平面図	図82 96-2-1-2・3トレンチ	第7面 平面図
図56 96-1-1・2・3トレンチ	第6面ベース 平面図	図83 96-2-1-2・3トレンチ	第8面 平面図
図57 96-1-1トレンチ	第6面ベース 遺構141 平・ 断面図	図84 96-2-1-2・3トレンチ	出土遺物
図58 96-1-1トレンチ	第6面ベース 遺構141 出土 遺物	図85 96-2-1-2・3トレンチ	第8面 遺物出土状況
図59 96-1-1トレンチ	第6面ベース 遺構129・130 平・断面図		
図60 96-1-5トレンチ	第6面 遺構209平・断面図		

写真図版目次

図版1	96-1-5トレンチ1面	南西から	96-1-1トレンチ6面ベース	
	96-1-5トレンチ1面	東から	遺構126 石礫出土状況 東から	
図版2	96-1-5トレンチ1面	南から	図版16 96-1-1トレンチ6面ベース 遺物出土状況	
	96-1-4トレンチ2面	西から	96-1-1トレンチ6面ベース 土器152 南から	
図版3	96-1-5トレンチ2面	南から	図版17 96-1-5トレンチ6層 土器279 南から	
	96-1-5トレンチ3面 遺構172瓦積井戸枠西から		96-1-1トレンチ7面 南から	
図版4	96-1-5トレンチ3面 遺構172曲げ物	西から	図版18 96-1-1トレンチ8面 南から	
	96-1-5トレンチ3面 遺構172曲げ物内	西から	96-1-1トレンチ 遺構1 東壁断面 南西から	
図版5	96-1-1トレンチ4面 遺構1東壁	西から	図版19 96-1-5トレンチ7~9層 北壁 南西から	
	96-1-1トレンチ4面 遺構5肩部断面	西から	96-1-1トレンチ8面 8面~下層北壁 南東から	
図版6	96-1-5トレンチ4面 遺構5	東から	図版20 96-2-1トレンチ1面 南から	
	96-1-1トレンチ4面ベース	南から	96-2-3トレンチ1面 東半 南東から	
図版7	96-1-1トレンチ4面ベース 遺構99	東から	図版21 96-2-2トレンチ2面 西半 南から	
	96-1-5トレンチ5面	南から	96-2-3トレンチ2面 中央 南から	
図版8	96-1-1トレンチ5面	南から	図版22 96-2-1トレンチ6面 全景 南から	
	96-1-1トレンチ5面 遺構122	東から	96-2-2トレンチ6面 東半 南から	
図版9	96-1-1トレンチ5面 遺構122	南から	図版23 96-2-2トレンチ6面 溝断面 南から	
	96-1-1トレンチ5面 遺構123	南から	96-2-2トレンチ7面 全景 南から	
図版10	96-1-5トレンチ5面 遺構185北壁面内	南西から	図版24 96-2-2トレンチ7面 溝断面 南から	
	96-1-5トレンチ5面 遺構185	南西から	96-2-1トレンチ河床検出状況 南から	
図版11	96-1-5トレンチ5面 遺構185	南西から	図版25 96-2-2トレンチ河床 全景 南から	
	96-1-5トレンチ5面 遺構185	南から	96-2-1トレンチ河床 足跡 南から	
図版12	96-1-5トレンチ5面 遺構207	南東から	図版26 96-2-3トレンチ河床検出状況 南東から	
	96-1-5トレンチ5面 遺構207断面	南東から	96-2-3トレンチ河床 遺物出土状況 南東から	
図版13	96-1-5トレンチ6面	西から	図版27 96-1-1トレンチ6面ベース 遺構129出土遺物	
	96-1-5トレンチ6面	南東から	96-1-1トレンチ6面ベース 出土遺物	
図版14	96-1-1トレンチ6面ベース 遺物出土状況	南から	図版28 96-1-1トレンチ6面ベース 出土遺物	
	96-1-1トレンチ6面ベース 遺構141	西から	96-1-1トレンチ7b層 出土遺物	
図版15	96-1-1トレンチ6面ベース 遺構129	北西から	図版29 96-1-1~5トレンチ遺構5 出土遺物	
			96-2-3トレンチ洪水砂層 出土遺物	

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経過

船橋遺跡は大和川と石川の合流点の西側に位置する。かつて合流点付近から北流していた大和川は下流域で度重なる洪水に見舞われていた。それを解消するために、1704（宝永元）年に現在の位置に付け替えられたため河床となった。さらに1954（昭和29）年に堰が作られると下流側は侵食を受け各種の造構・造物が人々の目に触れるところとなった。

今回の調査は大和川左岸堤防南側で大阪府建築部住宅建設課が計画している府営美陵住宅の老朽化に伴う建て替えと、建設省近畿地方建設局大和川工事事務所が計画している大和川河川事業に伴う工事用進入路部分の調査である。

上記工事に先立ち大阪府教育委員会文化財保護課は1995（平成7）年に府営美陵住宅内で6ヶ所の試掘調査を実施した。その結果中世の造構面及び包含層、平安時代後期に起きたと考えられる洪水堆積層が認められ、洪水砂層には黒色土器から弥生時代中期までの土器が多量に含まれていたこと、試掘調査の掘削深度以下に弥生時代の造構面が存在することが推測されたため本調査を実施することとなった。

発掘調査は（財）大阪府文化財調査研究センターが大阪府教育委員会の指導の下、建設省近畿地方建設局大和川工事事務所・大阪府建築部住宅建設課の委託を受けて実施した。

現地調査は1996（平成8）年2月に開始し、1997（平成9）年3月に終了した。

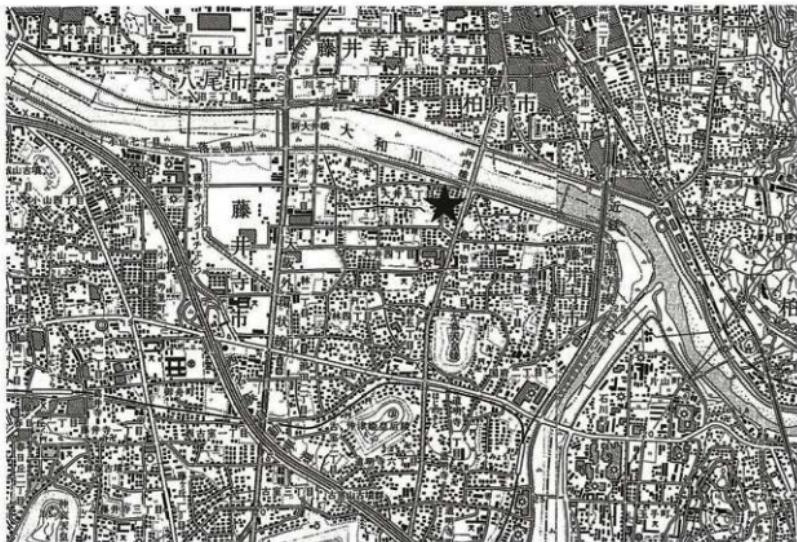


図1 調査位置図（1:25,000）

第2節 調査の方法

調査区は大きく2ヶ所に分けた。府営美陵住宅内を南北に走る道路から東側を調査年度の西暦の下二桁を冠し96-1調査区、道路を挟んで西側に位置する調査区は、96-2調査区とした。96-1調査区の河川事業工事用進入路を96-1-1トレンチ、府営住宅集会所を96-1-2トレンチ、電気室を96-1-3トレンチ、防火水槽を96-1-4トレンチ、住棟(B棟)を96-1-5トレンチとし、また96-2調査区は防火水槽を96-2-1トレンチ、住棟(A棟)西半を96-2-2トレンチ、住棟(A棟)東半を96-2-3トレンチとした。

調査面積は96-1調査区で3,434m²、96-2調査区は1,271m²、掘削予定深度は両調査区ともに現地表マイナス4.5mであるため鋼矢板を打設し、調査の途中には鋼矢板倒壊防止のため切妻腹起こしを設置した。調査は盛土・旧表土・近代砂層をバックホーで除去し、以下は全て人力で行った。

遺構の平面実測はヘリコプターによる航空写真測量図化と平板測量を行った。また必要に応じて遺構平面図・断面図・遺物出土状況図を適宜作成した。

地区割りの方法については、(財)大阪文化財センター「遺跡調査基本マニュアル」1988に準拠し、遺物の取り上げや遺構図作成の基準とした。これは国土座標系第VI座標系を使用したものであり、同一基準を使用することにより絶対的な遺構の位置・遺物の出土地点を示すことができる。

地区割りの方法は第I区画では1万分の1地形図をそのまま使用する、東西8km、南北6kmの範囲で南西端を基点とする。第II区画は2,500分の1地形図を使用し、第I区画を縦、横各4分割し計16区画東西2km、南北1.5kmの範囲を示す。第III区画は第II区画を100m単位で区画する、縦15、横20区画となる北東端を基点とする。第IV区画は第III区画を10m単位で区画する、縦15、横各10区画となる北東端を基点とする。

遺構番号は遺構の種別に関わらず検出もしくは掘削した順に通し番号を付与したが、1~3面の鑄溝のほか遺物が出土しなかった遺構についてはそのかぎりではない。

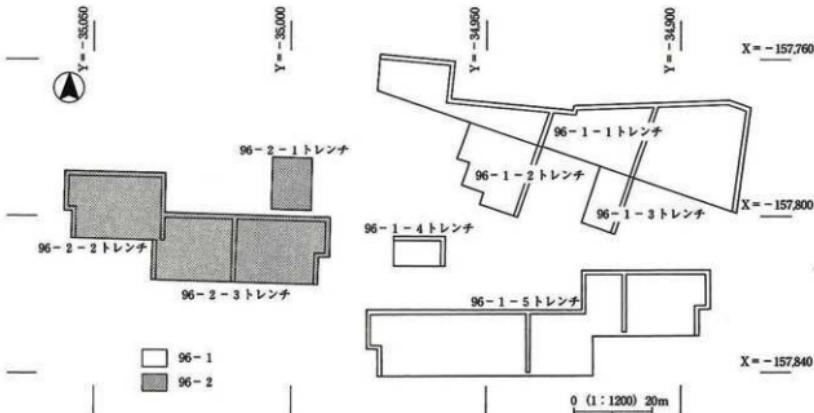
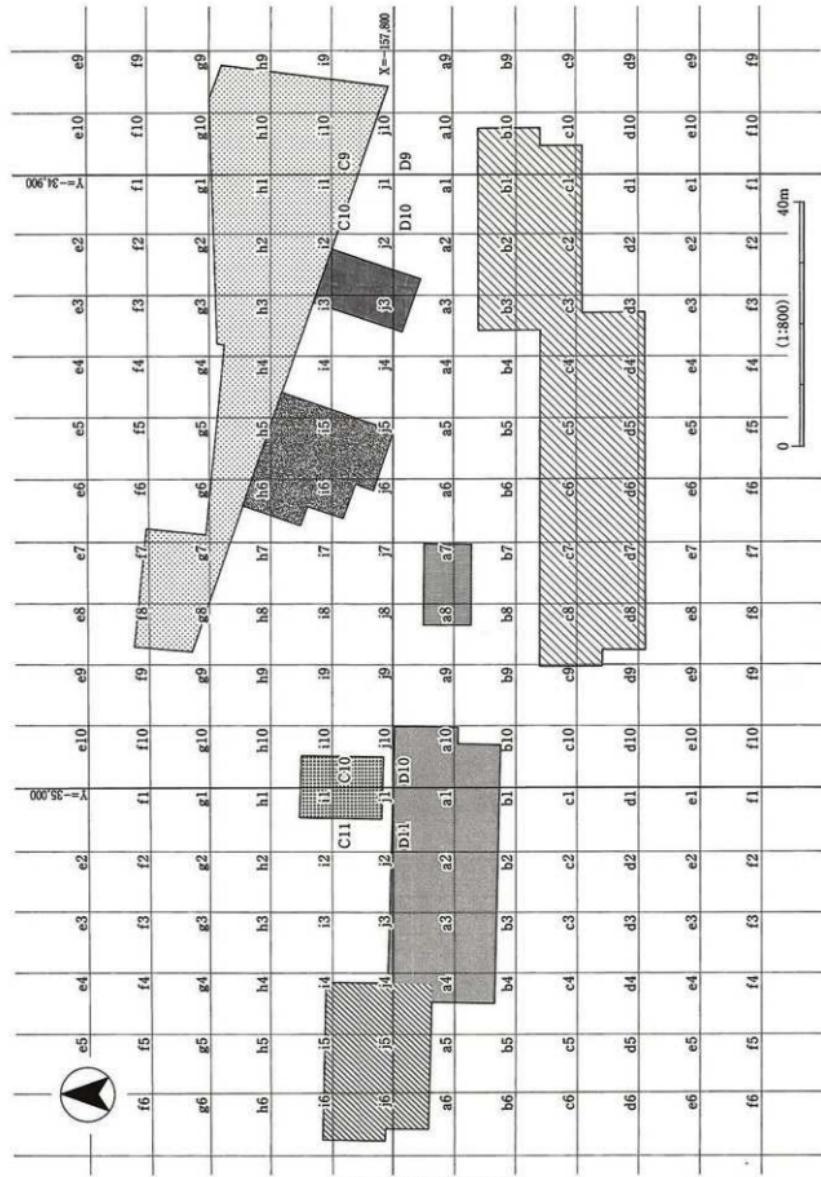


図2 調査区位置図



第Ⅱ章 位置と環境

1. 自然環境

船橋遺跡は現在の大和川と石川の合流地点のやや西側に位置し、1704（宝永元）年に付け替えられた大和川が遺跡のほぼ中央を西流している。船橋遺跡一帯には大和川や石川によってつくられた氾濫原や沖積低地が広がっている。石川は南河内地域を南から北へと流れしており、右岸には玉手山丘陵が、左岸には羽曳野丘陵が石川に沿ってほぼ南北に連なっている。これらの丘陵と石川との間には低位段丘や中位段丘の発達した地形がみられ、弥生時代以降多くの集落が営まれるようになる。旧大和川は玉手山丘陵とその北側に大きく連なる生駒山地の間を奈良県から流れこみ、船橋遺跡の西側で石川と合流して北側に流れを大きく変えていた。そして旧大和川下流には広大な沖積平野が形成され、歴史上多くの遺跡が立地してきた。羽曳野丘陵北端には国府台地と呼ばれる洪積段丘が広がり、古くから人々の居住域として利用してきた。船橋遺跡はこの国府台地の北側縁辺に接した氾濫原～自然堤防上に立地している。

船橋遺跡周辺は古くから重要な交通路が発達してきた地域である。大和川を遙れば比較的簡単に奈良県に抜けられることから、古代以降奈良・長尾街道（大津道）と呼ばれる交通路が整備された。この街道は船橋遺跡の南端部分を東西に通っている。また飛鳥川を通りて二上山南端を奈良県側に抜ける交通路として竹内街道（丹比道）も古くから存在している。

玉手山丘陵の東側にある二上山周辺に産出する石材は歴史上頻繁に利用されている。二上山の周囲には火山活動を示す火山岩の堆積が認められ、そのうち安山岩の一種であるサスカイトと呼称される板状に剥離しやすい石材は、旧石器～弥生時代の石器石材として利用された。船橋遺跡周辺でも各遺跡よりサスカイト製の石器が多量に出土し、その利用頻度の高さがうかがえる。同じく二上山周辺で産出する凝灰岩は、石棺や横穴式石室、寺院基壇、五輪塔など各時代を通じて様々な用途に利用してきた。ざくろ石も二上山周辺で採掘され、金剛砂と呼ばれる研磨材として使われてきた。

2. 歴史的環境

船橋遺跡が位置する南河内地域は、旧石器時代～現代に至るまでの遺跡が数多く分布する地域である。特に現在の大和川と石川が合流する船橋遺跡周辺一帯は遺跡が集中してみられる。ここでは船橋遺跡一帯を中心にして、周辺の遺跡のうち著名なものを時代順に概観していく。

旧石器時代の遺跡としては、「国府型」ナイフ形石器の標識遺跡である国府遺跡、住居跡が発見されたはざみ山遺跡、良好なユニットが確認された翠鳥園、西大井遺跡などがあげられる。このほかに林、土師の里遺跡など遺構の検出はないが旧石器時代の石器が出土する遺跡は増えている。

船橋遺跡一帯では縄文時代の遺跡も多く確認されている。国府遺跡では前期の土器をともなって多量の埋葬人骨などの遺構が発掘されている。後期には土師の里遺跡では土器棺墓や住居跡、林遺跡では住居跡や埋葬などが調査されている。船橋遺跡では晩期突尖土器が出土し、「船橋式」の標識遺跡となっている。国府遺跡で検出された埋葬人骨には晩期のものも認められる。

船橋遺跡の北西側に位置する田井中遺跡では弥生時代前期中段階に遡る集落が想定されている。船橋遺跡周辺では、国府遺跡で中段階の可能性のある土器がわずかに出土しているが遺構とともにものではなく、明確に遺構が確認されるのは新段階以降である。国府遺跡では前期～後期に至る土器が出土し、前期の土器棺などの遺構が検出されている。船橋遺跡や土師の里遺跡でも前期～後期の遺物が出土して

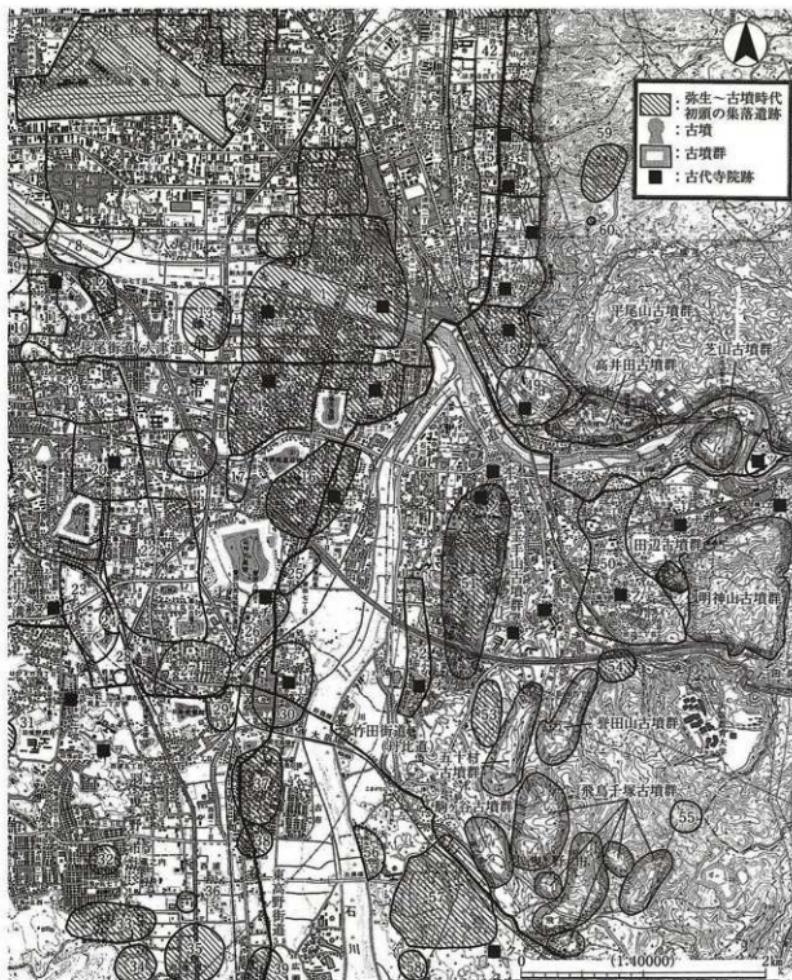


図4 遺跡分布図

1. 船橋
2. 川北
3. 本郷
4. 志紀
5. 田井中
6. 木の本
7. 太田
8. 大正橋
9. 津堂
10. 小山
11. 小山城
12. 小山平坂
13. 西大井
14. 林
15. 国府
16. 土師の里
17. 古室
18. 西古室
19. 北岡
20. 葛井寺
21. 高霧
22. はざみ山
23. 野々上
24. 下田池瓦窯
25. 茶山
26. 上堂
27. 稲田白鳥
28. 軽原
29. 柴町
30. 吉市
31. 石曳
32. 藏の内
33. 馬谷
34. 尺度
- (高地性)
35. 尺度
36. 西浦銅錫出土
37. 高麗城跡
38. 城山
39. 東阪田
40. 弓削
41. 恩智
42. 待宮寺
43. 大県郡条里
44. 平野
45. 大県
46. 大県南
47. 太平寺
48. 安堂
49. 高井田
50. 田辺
51. 玉手山
52. 円明
53. 五十村
54. 奥山
55. 守山
56. 大黒
57. 穷ヶ谷
58. お旅山
59. 高尾山
60. 多經細文鏡出土地
- (遺跡は略)
- イ. 船橋廬寺跡
- ロ. 大井魔寺跡
- ハ. 祥應魔寺跡
- 二. 衣麿魔寺跡
- ホ. 土師寺跡
- ヘ. 津堂魔寺(善光寺)
- ト. 葛井寺跡
- チ. 誓願寺跡
- リ. 太田寺跡
- ス. 西大寺跡
- ヌ. 國府寺跡
- ル. 善正寺跡
- ヲ. 稲田白鳥寺跡
- ワ. 平野魔寺(三宅寺)
- カ. 大縣魔寺(大里寺)
- 日. 大縣南魔寺(山下寺)
- タ. 太平寺魔寺(智誠寺)
- レ. 安堂魔寺(家原寺)
- ソ. 高井田魔寺(鳥坂寺)
- フ. 青谷魔寺(竹原井離宮)
- メ. 東条魔寺(河内国分寺)
- ナ. 河内国分尼寺
- ラ. 田辺魔寺
- ム. 原山魔寺
- ウ. 五十村魔寺
- キ. 片山魔寺
- ノ. 玉手山魔寺
- オ. 円明魔寺
- ク. 飛鳥魔寺(河内國分寺)
- 内飛島寺

いるが、遺構などの実態はあまり明らかになっていない。このように国府・船橋遺跡周辺で前期から集落が形成されていた可能性はあるが詳細は不明である。

弥生時代中期には石川左岸を中心に集落が営まれ、喜志、中野、城山遺跡のような多量のサヌカイト製石器製作をおこなった集落が成立する。石川右岸の二上山周辺ではサヌカイトが産出し、奥山遺跡では弥生時代のサヌカイト石材採掘坑や石器製作途中品が確認されている。船橋遺跡周辺では、国府、安堂、船橋、林、土師の里、川北遺跡などで中期の遺構や遺物が認められる。

弥生時代後期になるとこれまで石川左岸の低位～中位段丘に多くみられた集落が衰退し、石川右岸を中心としていわゆる高地性集落が丘陵上に出現する。中期に盛期を迎えた喜志、中野遺跡は後期に継続せず消滅する。船橋遺跡周辺では川北遺跡で後期の方形周溝墓や土器棺墓が検出され、船橋遺跡でも比較的多くの遺物が出土するが、これまで継続してきた国府、土師の里遺跡は衰退していく。石川右岸の丘陵上の集落である玉手山、駒ヶ谷遺跡では住居が検出され、高尾山、五十村遺跡でも当該期の遺物が出土している。石川左岸にも石曳、尺度遺跡などの丘陵上の集落が認められる。

古墳時代初頭には駒ヶ谷遺跡では集落が継続するが、多くの丘陵上の集落は衰退し、再び石川左岸の低位～中位段丘上の集落が増加する。船橋遺跡では住居跡や井戸などが検出され、これらの遺構は古墳時代前期（布留式期）まで継続する。船橋遺跡では吉備系の土器が認められる。西大井遺跡では竪穴住居や方形周溝墓が検出されている。古墳時代前期には国府、川北遺跡でも住居跡が認められようになる。

古墳時代前期には石川右岸の玉手山丘陵で前方後円墳を中心とした玉手山古墳群が営まれる。松岳山古墳群も前期に造営されている。その後玉手山古墳群が衰退する中期には津堂城山古墳から始まる古市古墳群の築造が開始される。古市古墳群では大王墓とみられる大型前方後円墳とその周囲の陪塚が継続して数多く築造される。この他土師の里遺跡一帯では古市古墳群に供給した埴輪を焼成した窯跡やその埴輪製作集団の集落、埴輪墓群が検出された。譽田白鳥、野々上遺跡でも埴輪焼成窯跡が確認されている。土師の里遺跡をはじめ、林、小山遺跡、はざみ山遺跡などでは集落が認められる。古市大溝は古市古墳群の間に掘削され、古墳群との関係から5世紀成立説もあったが、耕地開発にともなう7世紀代の水路とする説が有力になりつつある。

古墳時代後期には平尾山古墳群、飛鳥千塚古墳群などの横穴式石室を主体とする群集墳、高井田横穴群、玉手山横穴群などの横穴群が活発に造営され、古墳時代終末期には飛鳥千塚古墳群C支群（オウコ古墳群）などの横口式石槨を主体とする古墳群も出現する。

7世紀になると大和川と石川の流域を中心に古代寺院が密集して造営される。南河内地域だけでも30以上の古代寺院が想定され、そのほとんどが古代の交通路沿いに立地している。船橋遺跡内でも大和川河床に礎石をともなう遺構が確認され、船橋廃寺と呼称されている。この船橋廃寺に対する研究史・諸説については松尾氏（柏原市教育委員会 1994）が詳述しているのでここでは簡単に触れるが、これまでに多量の古代の土器類や瓦、皇朝銭、墨書き土器などが出土し、河内国府説や河内銅鏡司説、寺院（玉井寺・井上寺など）説、餌香市説などの諸説が提示されている。7世紀前半代以降に石川左岸では、野中寺や西琳寺、衣縫廃寺、土師寺、押志廃寺、大井廃寺、葛井寺、善正寺、津堂廃寺などが造営され、生駒山地南西麓では平野廃寺（三宅寺）や大県廃寺（大里寺）、大県南廃寺（山下寺）、太平寺廃寺（智識寺）、安堂廃寺（家原寺）、高井田廃寺（鳥坂寺）が後の東高野街道沿いに並んでいた。石川右岸にも片山廃寺や田辺廃寺、原山廃寺、五十村廃寺、円明廃寺など多数の古代寺院が造営され、河内国分寺や竹原井離宮と推定される青谷廃寺も所在している。これらの古代寺院造営に渡来系氏族が関与した可能性

が考えられている。寺院以外では北岡、はざみ山遺跡で大型掘立柱建物群が検出され、官衙的施設が想定される。国府、林、土師の里、葛井寺、小山、津堂、西古室、駒ヶ谷遺跡でも掘立柱建物群が検出された。土師の里、国府遺跡では土馬が多く出土することも注目できる。河内国府については諸説があつてはざみ山、船橋、国府遺跡などが候補にあげられているが結論をみていない。

西大井遺跡では平安時代の条里水田が検出されている。はざみ山遺跡や葛井寺遺跡では平安時代にも集落が継続している。中世でははざみ山遺跡で瓦器碗が多量に出土し、船橋遺跡でも瓦器碗をはじめとする中世の遺物が確認されているが前時代に比べて顕著な遺構は減少する傾向にある。この他土師の里、津堂、葛井寺、国府、西古室遺跡などで遺構・遺物が確認されている。

《引用・参考文献》

- 池田次郎 1988 「河内・国府遺跡の人」『権原考古学研究所論集』 10 (吉川弘文館)
- 上田睦 1997 「古代寺院と集落」『第1回 摂河泉古代寺院フォーラム 摂河泉の古代寺院とその周辺』(摂河泉文庫)
- 大阪府教育委員会 1980 「船橋遺跡発掘調査概要」
- 大阪府教育委員会 1981 「国府遺跡発掘調査概要・XI」
- 大阪府教育委員会 1985 「船橋遺跡発掘調査概要」
- 大阪府教育委員会 1994 「寂屋川南部流域下水道事業に伴う 本郷・船橋・太平寺遺跡発掘調査概要」
- (財) 大阪府文化財センター 1976 「和大川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書」
- (財) 大阪府文化財センター 1976 「和大川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書II」
- (財) 大阪府文化財調査研究センター 1995 「西大井遺跡」
- 柏原市教育委員会 1994 「柏原市所在遺跡発掘調査概報」(柏原市文化財概報 1993-V)
- 柏原市教育委員会 1994 「船橋遺跡」(柏原市文化財概報 1993-VI)
- 柏原市教育委員会 1995 「柏原市遺跡群発掘調査概報 1994年度」(柏原市文化財概報 1994-IV)
- 柏原市教育委員会 1998 「奥山遺跡発掘調査概報」(柏原市文化財概報 1997-IV)
- 柏原市史編纂委員会編 1973 『柏原市史』 第2巻本編 (I)
- 柏原市史編纂委員会編 1975 『柏原市史』 第4巻史料編 (I)
- 古代を考える会 1976 『古代を考える7 玉手山遺跡の検討－推定河内国安宿戸郡都街遺跡－』
- 古代を考える会 1977 『古代を考える10 河内国府と国分寺址の検討』
- 古代を考える会 1979 『古代を考える18 河内土師の里遺跡の検討』
- 鍋島隆宏 2000 「南河内・石川流域における弥生後期集落の動向」『古代文化』 52-7 ((財)古代学協会)
- 羽曳野市史編纂委員会編 1994 『羽曳野市史』 第3巻史料編 1
- 藤井寺市史編さん委員会編 1986 『藤井寺市史』 第3巻史料編
- 平安学園考古クラブ 1972 『船橋』(I・II合冊)
- 埋蔵文化財研究会 1997 「第42回埋蔵文化財研究集会 古代寺院の出現とその背景第2分冊資料 (西日本編)」

第Ⅲ章 調査成果

第1節 96-1-1~5トレンチ

第1面（図7.8 写真図版1.2）

機械掘削により府営住宅建設時の盛土、旧耕土、洪水砂層を除去した面である。全面に耕作の痕跡が見られる。

極細砂混じりシルトを作土とする。耕作痕は96-1-1トレンチ西端に位置する畦から西と、96-1-1トレンチと96-1-2トレンチ境から南は東西方向、96-1-1トレンチの大部分は南北方向、中央部では一部南東から北西方向地割りとなる。96-1-4トレンチは東西方向、96-1-5トレンチでは南北方向となり、土地利用の一端を窺うことができる。

96-1-1トレンチ西端の南北方向の畦両脇部は鋤先によるものか垂直になっている。畦を挟んで西は一段低く、比高差は約20cmを測る。西側では土坑を検出した。深さは15cm程度である。土坑の壁には鋤の痕跡が認められる。中央部以西は鋤痕跡が平行して走る。鋤痕跡は幅約20cm、深さ5cm程度で先端部の痕跡が残る。以東は長方形の浅い土坑が整然と並ぶ。規模は幅1m前後、長さは5m前後と、8m以上のものがある。深さは5cm前後である。

96-1-1トレンチ南東、96-1-3トレンチは畝溝状で、溝幅は約30cm程度である。北側の土坑群との境は鋤で垂直に切られている。96-1-4トレンチでは畦畔と溝1条を検出した。畦畔は幅約1m、高さは20cmを測る。

96-1-5トレンチ東半は幅10cmの溝、西半は1~2m間隔で溝が平行する。

当面の標高は南東で高く、北西に低い傾向にある。南東ではT.P.15.8m、低いところではT.P.15.4mを測る。

第2面（図9.10 写真図版2.3）

96-1-1-3トレンチ、96-1-4・96-1-5トレンチ北半は東西方向のほかは、南北方向の耕作痕を検出した。

細砂混じりシルトを作土とする。当面の標高は1面と同じく南東が高く北西が低い傾向にある。5トレンチ東端でT.P.15.5m、1トレンチ西端ではT.P.15.2m前後を測る。

第3面（図11~13 写真図版3.4）

96-1-1トレンチ東半、96-1-2トレンチ、96-1-5トレンチ東半では東西方向の溝群、96-1-1トレンチ西半・96-1-2トレンチでは東西・南北方向の溝群を検出した。南北溝は幅1~3m、深さ20~30cm、東西溝は幅2~5m、深さ30~40cmを測る。溝内からは瓦器椀・羽釜等が出土した。

96-1-5トレンチ東半で遺構172（井戸）を1基検出した。当面で検出した東西溝を切っている。平面形はほぼ正円で径約1.1m、深さ1.45mを測る。上部は平瓦積みでうち2点は軒平瓦を利用している。下部は曲げ物を2段積んでそれぞれ井筒としている。曲げ物内からは拳大の石数点と瓦器椀1点が出土した。

96-1-1トレンチ中央部・西半、96-1-5トレンチ西半では遺構を明らかにできなかった。96-

1-5トレンチの北壁断面をみると、調査区中央部で3層が途切れ砂層となっている。3層が遺存している東半では3層の上・下層が砂層であることから、本来は西半3面検出時に2面ベース砂層と3面ベース砂層を区別して調査するべきであった。さらに96-1-1トレンチ北壁断面をみると同じように3層が途切れ砂層となっている。これも96-1-5トレンチと同様である。調査時に認識できなかったことから推定の域をでないが、第3面を覆った砂層が3層を流失させたか、第3面に流路が存在していたと想定しておきたい。

96-1-1,2トレンチ第3面出土遺物（図14）

96-1-1,2トレンチ第3面からは、主に中世前半期の遺物が出土しているが、その主要なものを図14に掲載している。14-1~3,7,14はすべて土器器である。14-1~3は小型の、14-7は中型の土器器皿である。14-1は口縁部が平坦面をもって屈曲する「て」字形態で11~12世紀前半の所産、14-2,3,7は外面に1段ナデによる面取りを行う形態で12~13世紀に帰属する。14-14は羽釜の胴部上半~口縁部である。強く内彎する胴上半部形態や明確に屈曲して外反し端部につまみあげを行わない口縁部形態から、12世紀の所産と考えられる。

14-4は瓦器皿、14-5,6,8~12は瓦器椀であり、いずれも内外面に密なヘラミガキ調整が行われている。外面の下地の器面調整にはヘラケズリ調整が行われているようである。瓦器椀はいずれも比較的深い器形のものであり、口縁端部は外反気味で丸く納める形態である。うち底部が残存しているものについては、高さ6~7mm程度の高台が粘土帯貼付によって作り出されている。これらの特徴から、14-5,6,8~12はいずれも12世紀前半の和泉型瓦器椀と考えられる。

14-13は、硬く焼きしまった明灰色の生地の椀で、外面には轆轤使用による稜線が幾重にも形成され、底部には明確な高台がつくりだされている。いわゆる山茶椀とよばれるものであり、東海地方で製作されたものと考えられる。この山茶碗の所属時期も11~12世紀で捉えられる。

以上、各土器の帰属年代は概ね11~13世紀であり、96-1-1,2トレンチ第3面の帰属年代は、これらの出土遺物から中世前半期と推定される。

96-1-5トレンチ第3面遺構172出土遺物（図15）

遺構172に関連する出土遺物として、図15に5点の遺物を掲載した。15-3は井戸枠内埋土中から出土した瓦器皿で、ヘラミガキ調整が内面にわずかに残存する特徴から13~14世紀の所産と推定され、これが当遺構の埋没時期に相当すると考えられる。また、15-4,5は井戸枠の下部に設営された曲げ物で、残存状態は良好であった。4は径約45cm・高さ約30cm、5は径約42cm・高さ約24cmの大きさである。

遺構上半の井戸枠の瓦積み部を形成する平瓦の中には、15-1,2に示す軒瓦がある。いずれも、外縁に珠文を配する唐草文様が施され、奈良時代の所産である。井戸枠上部には古代瓦が転用されたものと考えられる。

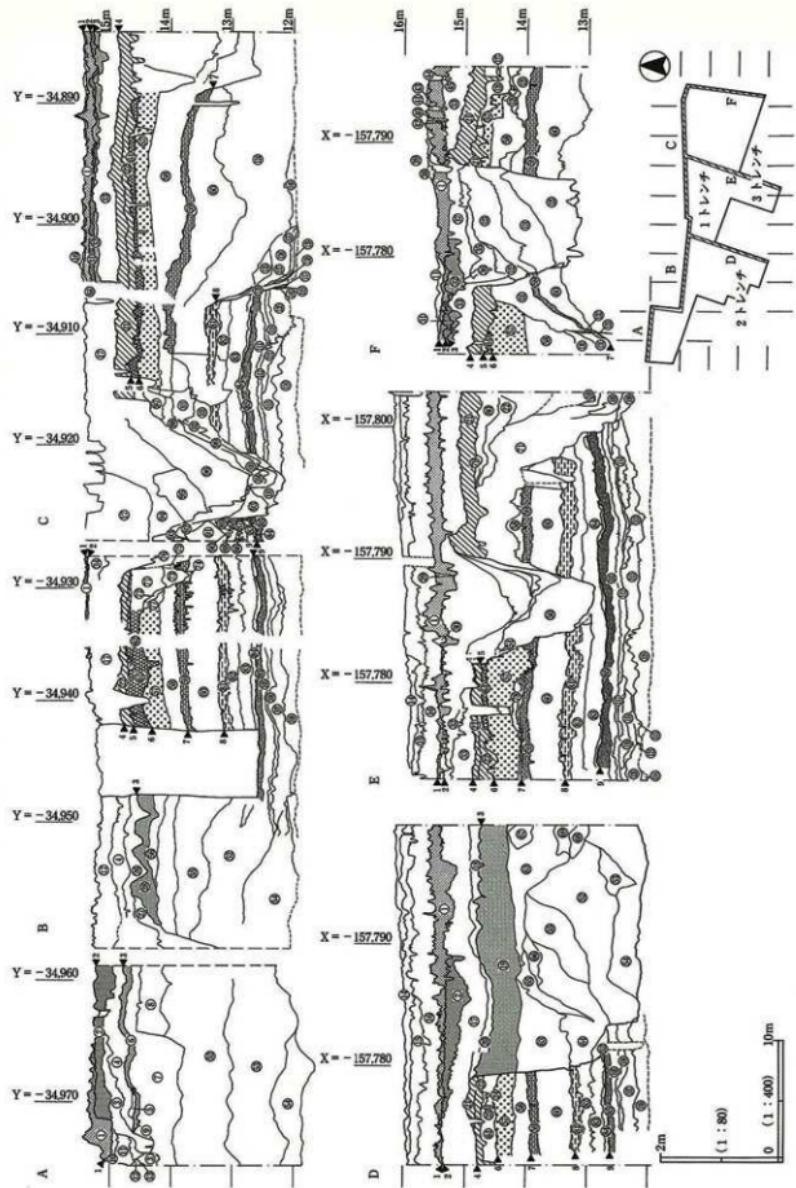


図5 96-1-1・2・3トレンチ 断面図

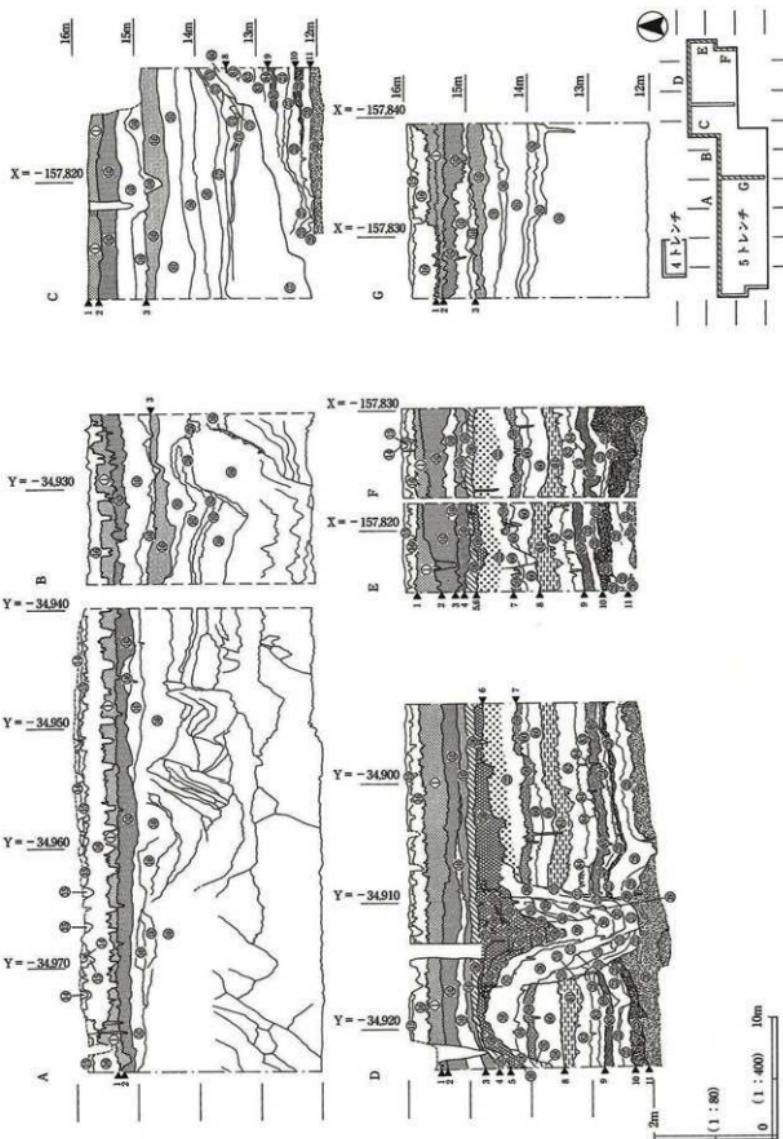


図6 96-1-5 トレンチ 断面図

1	2.5Y6/4	にぶい黄褐色細粒混シルト 稲多量に含む=紺土。1層
2	5Y7/1	灰白褐色紺シルト=紺土 2層
3	2.5Y7/4	浅黄褐色 細シラナ有り
4	2.5Y6/4	3~5 cmの大粒の礫含む ラミナ有り 来へ行くほど細砂へと変化し一部土壤化が見られる 上層からの影響か
5	2.5Y6/4	にぶい黄褐色 細シラナ有り
6	SYS/3	灰オリーブ紺シルト 3層
7	7.5Y5/2	灰オリーブ紺シルト 2.5Y5/4 黄褐色紺シルト・2.5Y7/6 明黄褐色中砂の互層 水平堆積 ラミナ有り
8	7.5Y5/2	暗褐色細粒混シルト 1層
9	7.5Y5/2	灰褐色細粒の互層
10	2.5Y7/3	灰オリーブ紺シルト 一部層にラミナ残る細粒砂有り 土壤化層か?
11	10Y6/2	オリーブ紺シルト 下層には中等度細粒 細砂の互層 ラミナ有り 土壤化層?
12	2.5Y7/3	浅黄褐色・細砂・シラナの互層 ラミナ有り
13	2.5Y7/3	灰褐色細粒の互層
14	SYS/3	灰オリーブ細粒混シルト 2~3 cmの大粒の礫含む
15	2.5Y6/4	にぶい黄褐色細粒シルト 2~5 mmの大粒の礫含む=旧紺土
16	7.5Y8/1	灰白無機砂 2~30 mmの大粒の礫含む ラミナ有り 破壊堆植物かブロック土亂じる
17	5Y6/4	オリーブ黄褐色細粒混シルト 細砂・中砂含む
18	7.5Y8/1	灰褐色細粒の互層 ラミナ有り
19	5G5/1	鐵灰紺土質シルト・粗砂含む 3層
20	10G5/1	鐵灰紺土質シルト・粗砂含む 10~20 mmの大粒の礫含む
21	2.5Y5/3	黃褐色シルト層 5 mmの大粒の礫含む 灰化物含む 土壤化層 4層
22	10Y6/3	にぶい黄褐色細粒混シルト 細砂の互層 灰化物を多く含む 土砂・白色絆合 4層
23	5Y5/3	灰褐色細粒紺シルト 細砂含む 土砂層 4層
24	5Y4/1	灰褐色粗砂含む 25のブロック入る
25	2.5Y6/4	にぶい黄褐色 細砂含む
26	10G4/1	鐵灰紺土質シルト・粗砂含む 3層
27	2.5Y6/4	鐵灰紺土質シルト・粗砂含む 5 mmの大粒の礫含む
28	5G4/1	淡黄褐色細粒 7.5Y5/3オリーブシルト ラミナ有り
29	10G5/3	铁灰シルト 5~7 mmの大粒の礫含む
30	7.5Y8/3	にぶい黄褐色 2層
31	2.5Y7/6	黄褐色細粒 2~3 mの大粒の礫含む 3層
32	5Y6/3	ナメル層 17.同じ
33	5Y7/4	明黄褐色粗砂 細砂 中砂 上へ行くほど細かくなる
34	10Y6/8	灰オリーブシルトペース 下にはほどなくなりふつつく 径0.5 cm以下のブロック含む
35	7.5Y7/4	灰褐色細粒 細砂の互層 布地は細粒で、土砂層は粗粒で、木片・本木・板根細・粗粒砂含む
36	10Y4/2	オリーブ細粒ペース 径5.5 mm以下の小粒含む 砂片も多く含む
37	7.5Y5/2	灰褐色細粒ペースベース 7.5Y5/2灰白無機細粒のものとマーブル状に層堆 下へ行くほど細粒砂の量が多くなる
38	7.5Y4/2	灰オリーブ細粒紺ベースベース 7.5Y5/2灰白無機細粒のものとマーブル状に層堆 下へ行くほど細粒砂の量が多くなる
39	7.5Y5/2	灰褐色細粒の互層 10Y4/2オリーブ細粒の互層の豆層
40	7.5Y7/3	鐵灰紺土質シルト 46の粗粒砂含む
41	10Y4/4	鐵灰紺土質シルト粗砂 5 mmの大粒の礫含む
42	10Y4/6	鐵灰紺土質シルトのベース 細砂含む 径10 cm以上の粗粒含む
43	7.5Y5/2	灰オリーブ細粒ペース 細砂を含む 土砂がゼララした状態 2層の土と良く似ているがややベース粗く緑まりが悪い
44	10Y4/4	鐵灰紺土質シルトのベース 細砂を含む 土砂片を一部含む 細砂含む
45	7.5Y5/2	灰褐色細粒の互層 1 cm以上の大粒の礫含む
46	7.5Y4/1	鐵灰紺土質シルト 1.5 cmの大粒の礫含む
47	7.5Y5/2	灰褐色細粒の互層 1.5 cmの大粒の礫含む
48	10Y4/2	灰褐色細粒土質シルト 2.5Y7/4明黄褐色中砂・細砂ラミナ・植物遺体含む
49	7.5Y5/2	灰褐色細粒土質シルト 5 mmの大粒の礫含む
50	5Y6/2	灰褐色細粒 0.5~1.5 cmの大粒より2~3 cmの大粒の礫含む ラミナ有り
51	5Y6/2	淡黄褐色細粒 ラミナ有り
52	7.5Y8/3	明黄褐色細粒 0.5~1.5 cmの大粒より2~3 cmの大粒の礫含む ラミナ有り
53	5G7/1	灰オリーブ灰砂 細砂含む
54	SYS/4	浅黄褐色細粒 1~3 cmの大粒の礫含む ラミナ有り
55	7.5Y5/3	灰褐色細粒 0.5~1.5 cmの大粒より2~3 cmの大粒の礫含む 5G7/1明オリーブ灰中砂の互層
56	5.5Y7/4	灰褐色細粒 細砂含む ラミナ有り
57	7.5Y5/2	灰オリーブ細粒紺含むらちらシルト77層 になるほど部にりがよくなる
58	2.5Y7/4	オリーブ褐色細粒砂にちららシルト77層 になるほど部にりがよくなる
59	7.5Y7/4	オーリー褐色細粒土質シルト 5G7/1明黄褐色中砂の互層 ハンパンド7層
60	6.5Y5/2	灰褐色細粒 5G7/1明黄褐色中砂の互層 5G7/1明黄褐色中砂の互層
61	7.5Y5/3	灰オリーブ褐色細粒砂 10Y5/1褐色シルトブロック含む 5層
62	7.5Y5/2	灰オリーブ褐色細粒砂 0.5 cm以上の小粒含む (上層) 細粒含む
63	10Y5/1	オーリー褐色細粒砂 7.5Y5/3オリーブ細砂ペース ラミナ有り
64	7.5Y5/2	灰褐色細粒砂 5G7/1明黄褐色中砂の互層 細粒含む
65	5G7/1	明黄褐色細粒砂 木片含む ラミナ有り
66	7.5Y8/4	にぶい黄褐色 10Y8/1灰白無機 細砂 ラミナ有り 0.5 cm以上の小粒含む
67	2.5Y6/4	にぶい黄褐色 細砂 細粒含む ラミナ有り
68	2.5Y7/3	黒褐色シルト 5G7/1明黄褐色中砂の互層の細粒砂の層 2層
69	10Y5/4	鐵灰紺土質シルト 0.5 cm以上の小粒含む 細粒含む
70	7.5Y4/3	暗褐色細粒紺シルト 2.5Y5/4 黄褐色細粒の互層 共に径0.5 cm以上の小粒を多く含む
71	7.5Y3/2	オリーブ黒褐色 細粒含む
72	5Y3/2	オリーブ黒褐色 細粒含む 0.5 cm以上の小粒含む
73	10Y5/2	オリーブ黒褐色細粒 細粒含む 径0.5 cm以上の小粒含む 59のブロック多く含む
74	7.5Y5/2	灰褐色細粒 0.5 cm以上の小粒含む 59のブロック多く含む
75	10Y4/2	オリーブ黒褐色 (活性的) 細粒含む
76	10Y5/2	オリーブ黒褐色 のあるシルト 0.5 cm程度の小粒・粗粒含む
77	7.5Y5/2	灰オリーブ細砂 細砂 1 cm以上の大粒の礫含む 細粒含む
78	10Y4/2	オリーブ灰中砂 SY8/1灰褐色の互層 SY8/1シルトブロック含む 細粒砂・径0.5 cm以上の小粒多く含む
79	7.5Y5/2	鐵灰紺土質シルト 0.5 cm以上の小粒含む 細粒含む
80	10Y5/4	鐵灰紺土質シルトのラグ層 2.5Y5/4 黄褐色細粒・中砂
81	7.5Y7/4	灰オリーブ細粒紺シルト 8層
82	2.5GY5/1	オリーブ灰褐色細粒 8層からのみこみ少し
83	10G5/4	オリーブ灰褐色細粒紺シルト 土質シルト
84	10Y5/2	ナメル層
85	10Y3/1	オリーブ黒褐色紺混 9層
86	2.5GY6/2	暗オリーブ灰褐色細粒砂 7.5Y6/2灰オリーブ細粒紺混 黑化物化風
87	2.5GY6/2	オリーブ灰褐色細粒砂 (上層) 5G5/1鐵灰紺土質シルト
88	2.5GY6/2	オリーブ灰褐色細粒砂 (下層) 5G5/1鐵灰紺土質シルト・粗砂 (5 mm)
89	5G5/2	5G5/1鐵灰紺土質シルト (上層) 5G5/1鐵灰紺土質シルト (下層) 5G5/1鐵灰紺土質シルト・粗砂 (5 mm)
90	5G4/1	鐵灰紺土質シルトのラグ層 2.5Y5/4 黄褐色細粒・中砂
91	10G5/1	鐵灰紺土質シルト (下層) 5G5/1 青褐色紺
92	5G5/1	暗褐色細粒シルト・粗砂 (2~3 mm)
93	5G5/1	オリーブ青褐色細粒砂 5G5/1 青褐色紺
94	7.5Y6/3	オリーブ青褐色 細砂 5G4/1黄褐色紺シルト
95	5Y8/4	淡黄褐色細粒 1~5 cmの大粒の礫含む ラミナ有り
96	5Y8/4	淡黄褐色細粒 1~5 cmの大粒の礫含む 来へ行くほど細かくなる (中・粗砂) ラミナ有り
97	5Y7/4	ナメル層 (粗砂風) 5Y4/1灰褐色シルト ラミナ有り
98	5Y7/4	灰白無機 (粗砂風) ラミナ有り
99	10Y3/2	灰白無機 (粗砂風) ラミナ有り
100	10Y4/1	鐵灰紺土質シルトブロック ラミナ有り
101	7.5Y7/4	鐵灰紺土質シルト ラミナ有り
102	10Y5/2	鐵灰紺土質シルト ラミナ有り
103	10Y8/2	灰白無機 ラミナ有り
104	7.5Y5/3	灰オリーブ細砂 (0.5~2 cm)
105	10Y5/2	オリーブ灰シルト
106	5G5/1	鐵灰紺土質シルト種類混
107	10Y5/2	鐵灰紺土質シルト
108	10G5/1	鐵灰紺シルト
109	10Y5/1	オリーブ黒褐色細粒砂 10Y4/1灰褐色の互層 細粒砂 0.2~0.8 cmの大粒の粗粒・細粒層
110	2.5GY5/1	オリーブ灰褐色細粒砂 2.5GY3/1暗オリーブ灰シルトの互層 下部 2.5GY6/1ナメル灰褐色細粒 0.2~1 cmの大粒の粗粒 4 cmの大粒の小石混 ラミナ有り

- 111 10Y5/2 オリーブ灰細粒砂混シルト
 112 7.5GY4/1 緑暗灰粘土質シルト（底部分的に根糸含む） 水化物含む
 113 10GY4/1 緑暗灰粘土質シルト
 114 10GY4/1 緑暗灰粘土質シルト・粗糸・細糸粒砂含む
 115 10GY4/1 緑暗灰粘土質シルト
 116 10Y3/1 オリーブ灰中砂透シルト
 117 2.5GY4/1 緑暗灰粘土質シルト・粗糸粒砂・3~7 mmの大の小融合む
 118 7.5Y5/2 オリーブ灰中砂透シルト・粗糸粒砂と3~8 mmの大の小融合む
 119 5GY5/1 オリーブ灰粗粒砂透粘土質シルト
 120 5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透
 121 5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透混合シルト・2.5GY3/1灰暗細粒砂のプロック土・粗糸砂・0.5~5.5 cmの大の粗混
 122 5Y3/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 123 10Y5/1 鉄自然色・0.5~4.5 cmの大の小融合む・5Y3/1オリーブ灰粗粒砂混シルトのプロック風
 124 5GY8/1 白灰暗細粒砂・0.5~10.0 cmの大の粗融合む・ラミナ有り
 125 7.5Y5/2 白灰暗細粒砂・0.5~10.0 cmの大の粗融合む・ラミナ有り
 126 5Y3/2 オリーブ灰粗粒砂透混合シルト
 127 5Y5/2 オリーブ灰粗粒砂透
 128 7.5Y5/3 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 129 7.5GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト（根糸と0.2~0.3 cmの大の小融合む） 粗糸・粗粒砂
 130 2.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透混合シルト・中砂・0.5~1.5 cmの大の小融合む
 131 2.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透（根糸）
 132 5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透・60°のプロック風
 133 5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂混シルト
 134 7.5GY4/1 オリーブ灰中砂透・粗糸粒砂 ラミナ有り
 135 5GY5/1 オリーブ灰中砂透・面透・下に行ける差沙粗糸からくる
 136 5Y3/1 オリーブ灰粗粒砂透・らかいシルト・粗糸砂 ラミナ有り
 137 2.5GY4/1 電離子プロックシルト・粗糸砂 ラミナ有り
 138 5GY4/1 白灰暗細粒砂透シルト・3Y5/1灰暗粗粒の互層 ラミナ有り
 139 5GY4/1 白灰暗細粒砂透混合シルト
 140 2.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透 ラミナ有り
 141 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・粗糸含む
 142 10Y5/2/1 に、黄褐色細粒砂透シルト・0.5~3 cm程度の小層・粗糸砂含む 鉄分・マンガンの沈着有り 2層
 143 10Y5/2/1 黄褐色細粒砂透シルト・0.5~1 cmの大の小融合む
 144 10Y5/6/2 黄褐色細粒砂透シルト・0.5~3 cmの大の小融合む ところによりグライ化して青苔色を呈す
 145 7.5GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・中砂プロック含む 3層
 146 2.5Y5/4 145の粒子の大きさが小さ化したのと見えて同一層と見えてもよい
 147 2.5Y5/6 2.5Y5/4の上部・0.5~1 cmの大の小融合む 鉄分・マンガンの沈着 2層の絆とと考えられる 4トレンチでも確認
 148 2.5Y5/3 2.5Y5/6の上部・0.5~2 cmの大の小融合む
 149 2.5Y5/3 2.5Y5/3の上部・0.5~2 cmの大の小融合む ラミナ有り 5トレンチ北西斜面へ向かって柱が直くなる
 150 7.5Y4/2 底よりアーブ灰中砂透シルト（ライ化部分） 極細粒砂混シルトに粗糸の小ブロック（1 cm未満）全体に散らばるよう混じる
 151 2.5GY5/1 オリーブ灰中砂透シルト 1~2 mm大の融合む 5層
 152 5GY5/1 オリーブ灰中砂透シルト
 153 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 154 10GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・粗糸含む
 155 10GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・粗糸含む
 156 10GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 157 10GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 158 10GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 159 10GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 160 10GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 161 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 162 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 163 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 164 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・50G/1灰暗細粒砂のラミナ水平
 165 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 166 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 167 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・2.5GY3/1オリーブ灰粗粒砂透混合シルト貯
 168 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・2.5GY3/1オリーブ灰粗粒砂透混合シルト貯
 169 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・2.5GY3/1オリーブ灰粗粒砂透混合シルト貯
 170 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・2.5GY3/1オリーブ灰粗粒砂透混合シルト貯
 171 2.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 172 2.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 173 2.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 174 2.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 175 2.5GY7/2 白灰暗細粒砂・粗糸砂 ラミナ有り
 176 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 177 7.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 178 7.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 179 7.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 180 7.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 181 7.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 182 7.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 183 7.5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 184 10Y3/2 底よりアーブ灰中砂透シルト・0.2~0.7 cmの大の小融合む 底化物混
 185 10Y5/1 底よりアーブ灰中砂透シルト
 186 2.5GY4/1 底よりアーブ灰中砂透シルト
 187 2.5GY4/1 底よりアーブ灰中砂透シルト
 188 7.5GY4/1 底よりアーブ灰中砂透シルト
 189 2.5GY4/1 底よりアーブ灰中砂透シルト
 190 10Y4/1 緑暗灰粗粒砂透
 191 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透
 192 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 193 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 194 7.5GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 195 7.5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 196 5GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 197 2.5GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・0.5~1 cmの大の融合む
 198 2.5GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト・0.5~1 cmの大の融合む
 199 10Y4/2 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 200 5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透
 201 10Y4/2 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 202 2.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 203 10Y4/2 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 204 10Y4/2 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 205 10Y4/2 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 206 10Y4/2 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 207 2.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 208 2.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 209 2.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 210 5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 211 7.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 212 10GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 213 7.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 214 7.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 215 2.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 216 7.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 217 7.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 218 2.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 219 2.5GY4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 220 10Y3/1 オリーブ灰粗粒砂透混合土
 221 7.5Y5/2 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 222 10Y4/1 底よりアーブ灰粗粒砂透シルト
 223 5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 224 5GY4/1 オリーブ灰粗粒砂透シルト
 225 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透
 226 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透
 227 5GY5/1 緑暗灰粗粒砂透
 228 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透
 229 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透
 230 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透
 231 5GY6/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 232 10GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 233 7.5GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト
 234 7.5GY4/1 緑暗灰粗粒砂透シルト

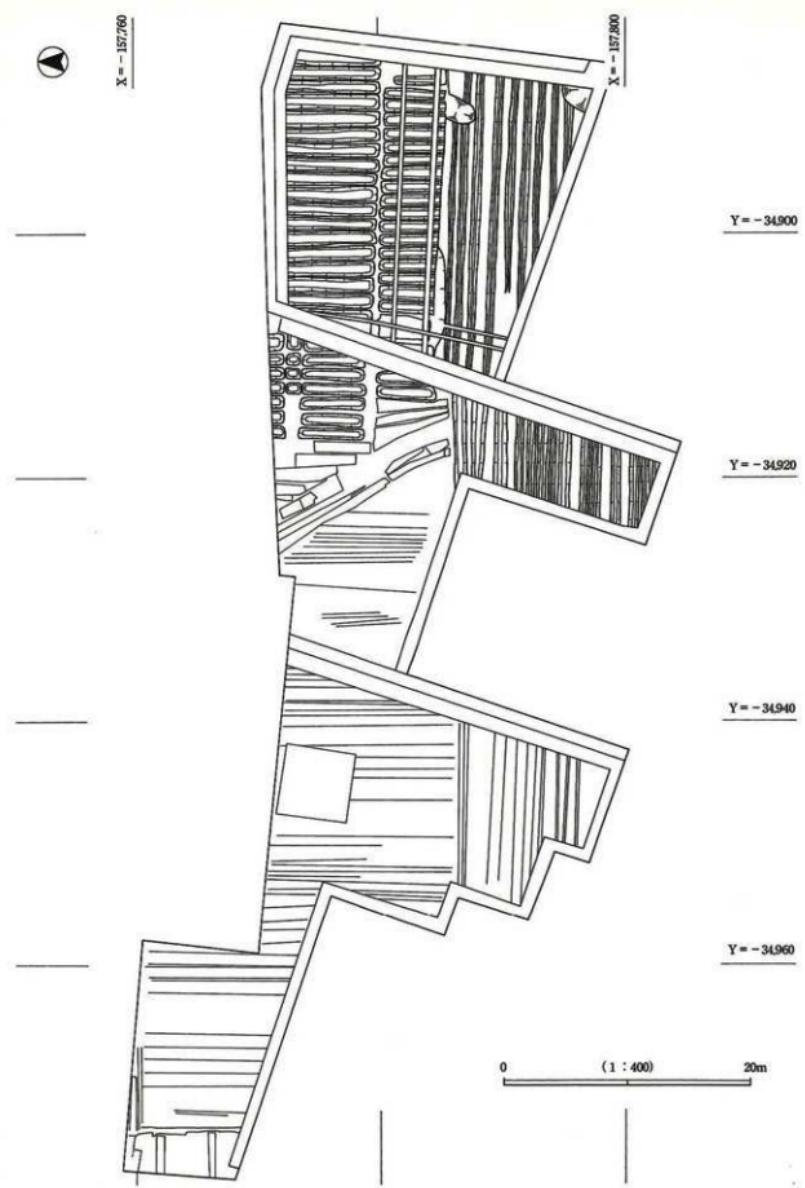


図7 96-1-1・2・3 トレンチ 第1面 平面図

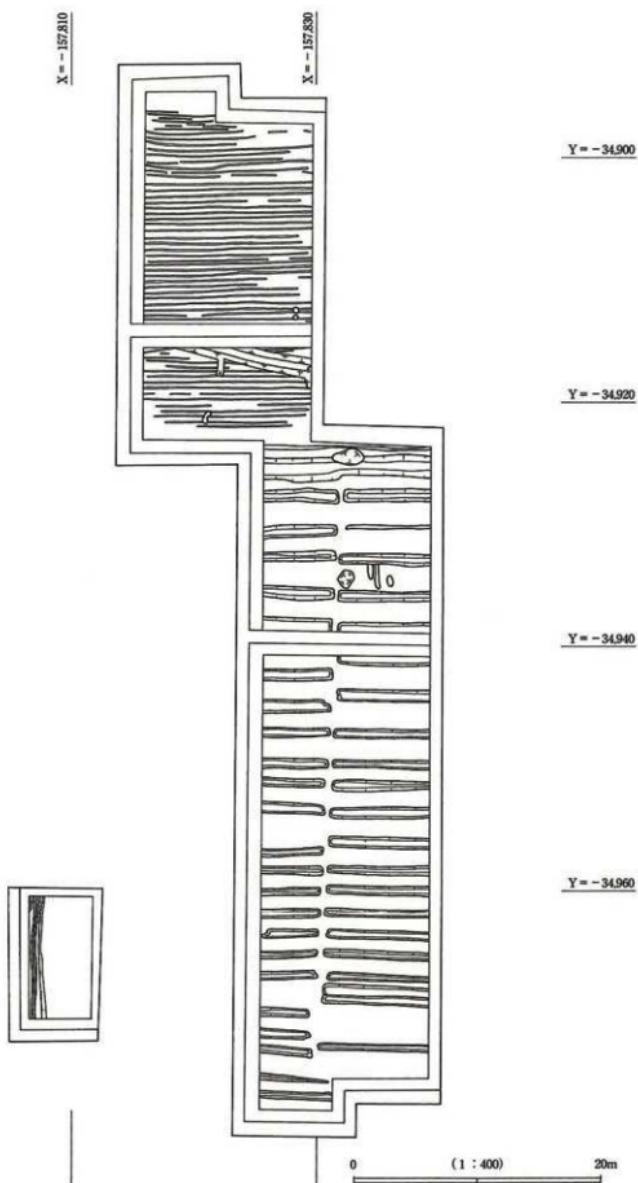


図8 96-1-4・5 トレンチ 第1面 平面図

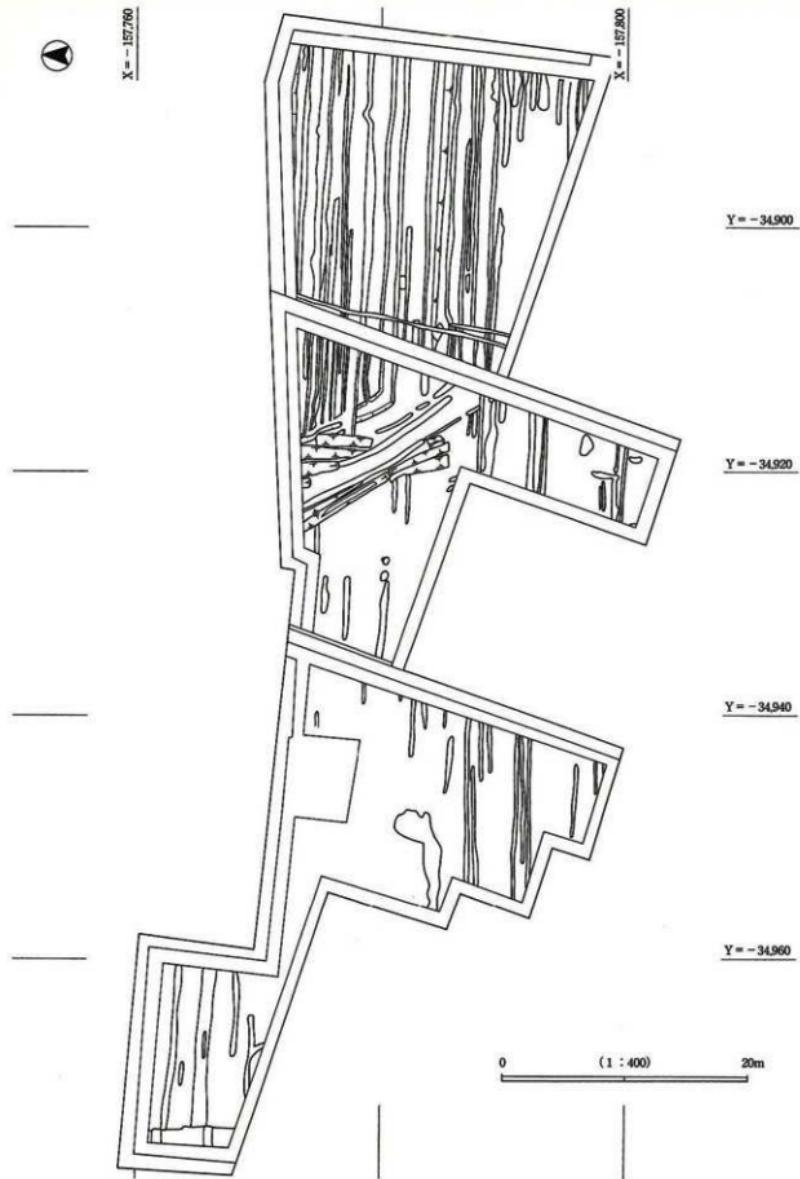


図9 96-1-1・2・3 トレンチ 第2面 平面図

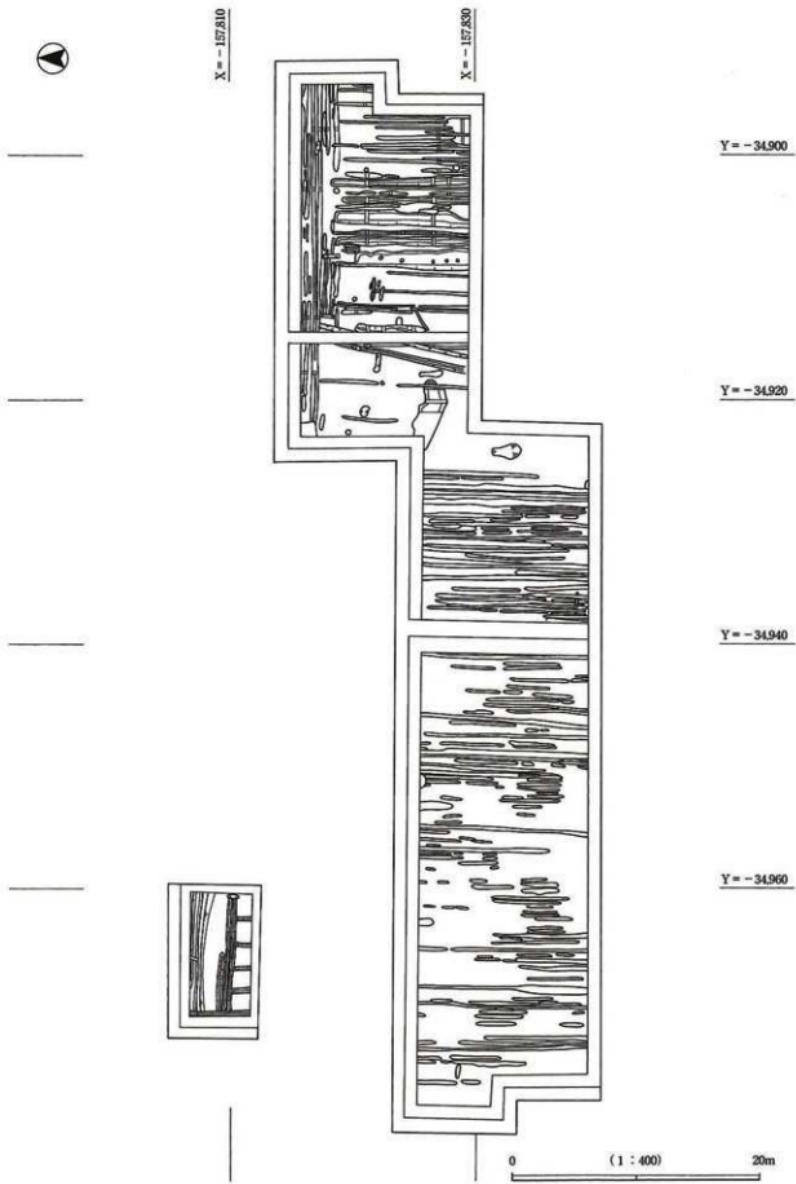


图10 96-1-4・5 トレンチ 第2面 平面図

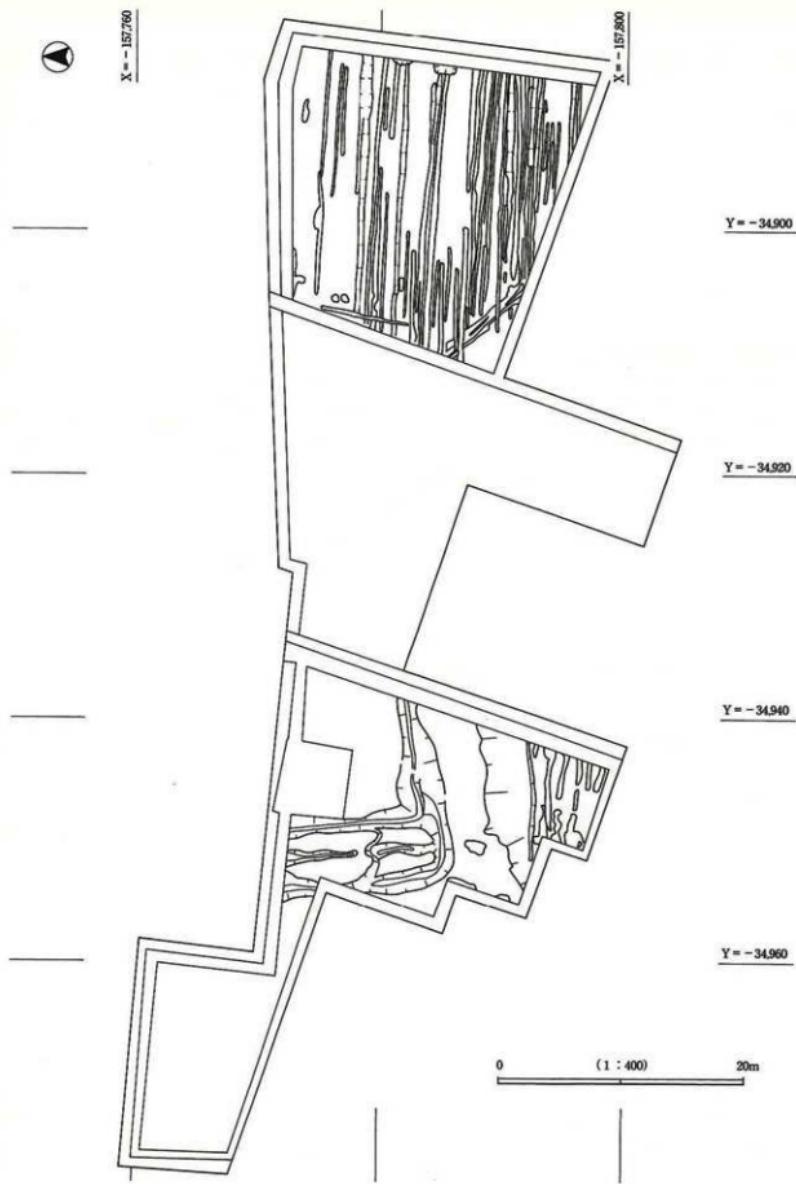


図11 96-1-1・2・3 トレンチ 第3面 平面図

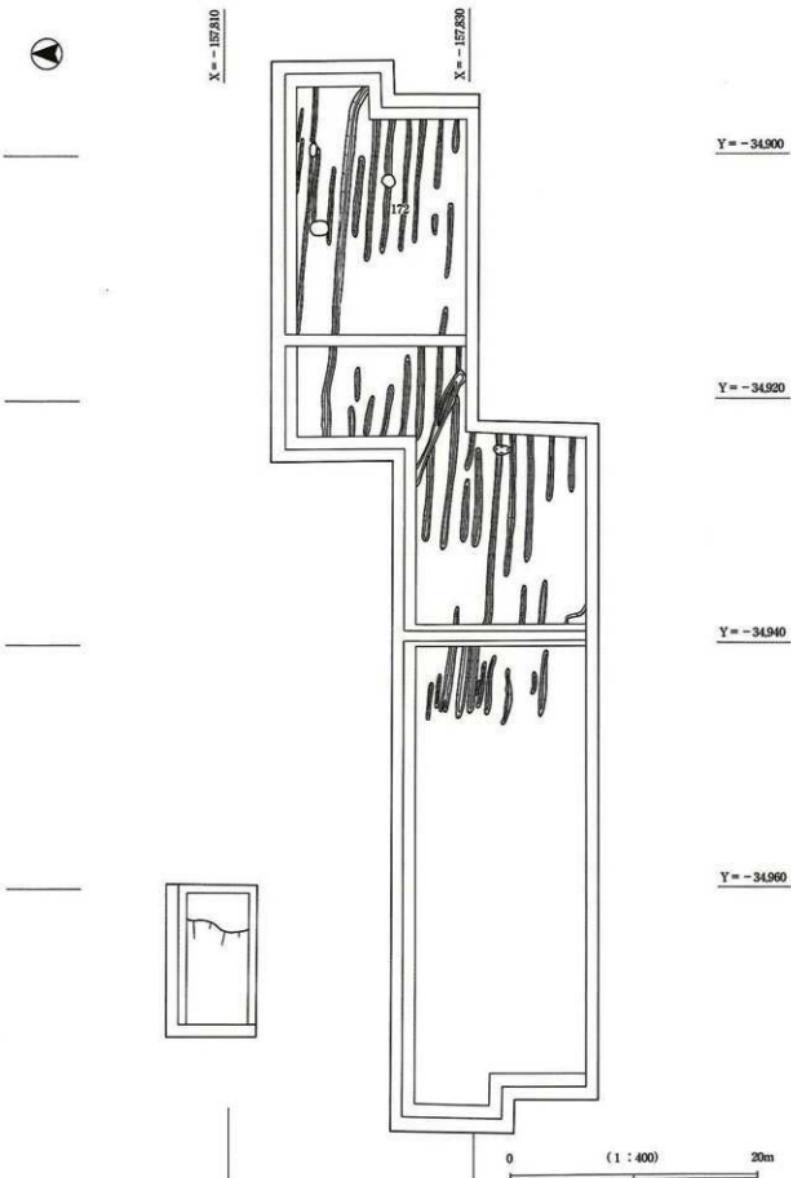


図12 96-1-4・5 トレンチ 第3面 平面図

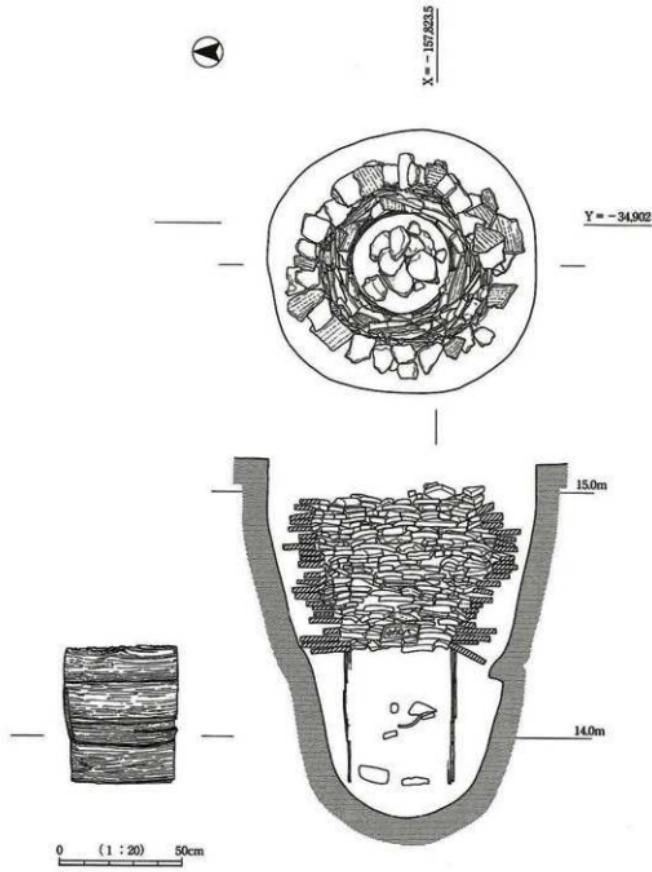


図13 96-1-5 トレンチ 第3面 遺構172平・断面図

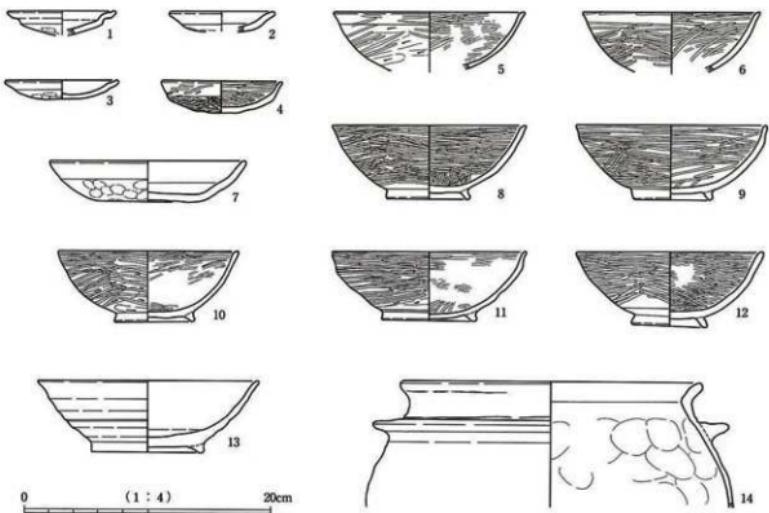


図14 96-1-1・2トレンチ 第3面 出土遺物

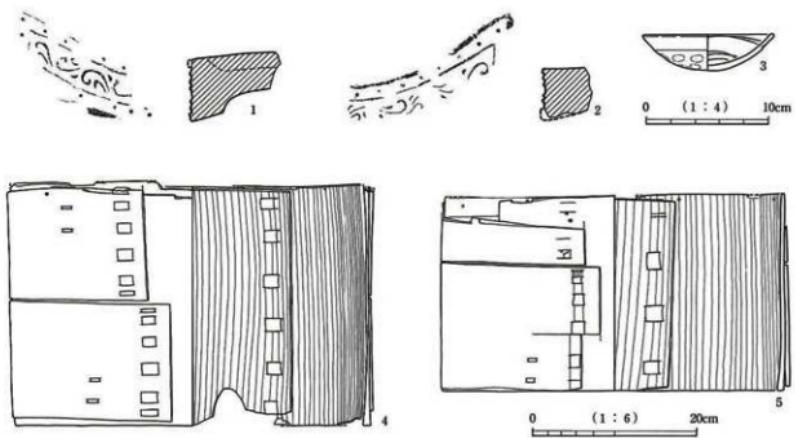


図15 96-1-5トレンチ 第3面 遺構172 出土遺物

第4面(図16、17 写真図版5、6)

96-1-1トレンチ東端から蛇行しながら西流し、調査区中央で北へ抜ける遺構1(流路)と、96-1-3トレンチから96-1-1トレンチ中央、96-1-5トレンチ東半では遺構5(流路)の右岸部を検出した。それより南西は流路部である。

流路に切られていない面で遺構2(溝)・遺構3・4(窪み)を検出した。

遺構1(流路)は幅約10~13m、深さは約2~3m、流路底はT.P.12mを測る。埋土は大きく上層シルトと下層粗砂~極粗砂層に分層できる。96-1-1トレンチ中央、左岸肩部寄りの上層シルト層上面近くで流路の窪みから多量の遺物が出土した。瓦器碗等完形土器も多く含まれていることから流路が埋没した後に廃棄されたものと見られる。

下層砂砾層からは磨滅した遺物が大量に出土した。

遺構5(流路)は左岸が未検出であるため幅は明らかではない。深さは約3mで流路底でT.P.12mを測る。河床には水流による窪みが南東から北西方向に認められる。遺物は両遺構で弥生土器・土師器・須恵器・軒丸瓦・軒平瓦・子持ち勾玉等各種出土した。遺構1・5合わせてコンテナ130箱出土した。

96-1-1~5トレンチ第4面遺構1・5(流路)出土遺物(図19)

遺構1からの出土品には、弥生時代~中世までの幅広い時期のものがみられる。弥生時代の遺物としては19-11,12がある。19-11は口縁内面に円形浮文、口縁端面と頸部に櫛描簾状文を施す広口壺で、文様構成・形態から弥生中期後半の所産と考えられる。19-12は受け口状の口縁形態を取る大型壺である。口縁部が強く内湾する特徴は、一般的な近畿地方の中期中~後葉の受口状口縁壺とは異なっており、搬入品・外来系の模倣品の可能性がある。北部九州の同時期の壺に類似した形態のものがあり、関連を考慮する必要があろう。

古墳時代初頭の古式土師器としては、19-6~10,13がある。19-6は、小型の丸底鉢で底部外面をヘラケグリ調整で仕上げている。口縁部が強いナデ調整によって仕上げられ、外面に段が形成されている。定型化以前の小型精製器種の一つと考えられ、庄内式期から布留式初頭の所産と推定できる。19-13は斜め上方に拡張した口縁部外面に円形浮文を貼付した広口壺であり、二重口縁壺との中間形態ともいえよう。庄内式~布留式初頭の所産と考えられる。19-8,9,10は小型丸底土器で、粘土に細かな砂粒だけを混和した精良な胎土で作られている。19-8,9は内外面ともナデ調整、19-10は横方向の細密なヘラミガキ調整で仕上げられ、いずれも庄内式~布留式初頭の所産と考えられる。19-7は明確に屈曲して裾部が広がる形態の高杯で、柱状部外面は縱方向にナデ調整が行われている。布留式中~後葉の所産と考えられる。

中世の遺物としては、19-1~5の瓦器碗がある。いずれも比較的深い器形のものであり、口縁端部は外反気味で丸く納める形態である。このうち底部が残存しているものについては、高さ6~7mm程度の高台が粘土帶貼付によって作り出されている。内外面には比較的密に斜めもしくは横方向のヘラミガキ調整が行われている。これらの特徴から、19-1~5はいずれも12世紀前半の所産と考えられる。なかでも、19-4,5は底部の外面の高台内側に「大」と墨書きされているのは注目される。遺跡・遺構の性格を類推する上で参考となろう。

遺構5からは、古代を中心とした時期の遺物が出土している。須恵器としては、19-16の壊身、19-17の須恵器壊蓋がある。前者はいわゆる壊Hとされる器形や小型という特徴から7世紀前半、後者は扁平な摘み部の形態や口径が大型という特徴から7世紀後半の所産と考えられる。土師器では、

19-14の大型の浅い形態の土師器皿がある。口縁端部がつまみあげ気味形態をとり、内面に放射状と螺旋状の暗文を施す特徴から奈良時代の所産と考えられる。また、19-15は、「て」字形態口縁の土師器皿で、11世紀の所産と考えられる。

瓦では、19-18の重圓文軒丸瓦、19-19の重圓文軒平瓦、19-20, 21の珠文・山形文を外縁にめぐらせた複弁形式軒丸瓦など奈良時代のものが出土している。

その他に、祭祀関連の遺物も出土している。19-22は滑石製の子持勾玉で、背部・側面に付属する勾玉部は著しく退化した単なる突起状の形態である。形態からは子持勾玉の最末期のものと考えられ、7世紀にまで使用年代が下る可能性がある。19-23は土馬の頸～頭部片である。頸～頭部だけで長さ約15cmにも及ぶ大型品であること、長く延びた頸部形態、前方を向いた両目、粘土帯によって写実的に面筋が表現されるなどの特徴は、奈良時代に通有な定型化した土馬とは異なっている。定型化以前の土馬と推定され、7世紀に使用された可能性も想定できよう。

第4面ベース（図18・20、写真図版6・7）

4層シルトを除去して検出した。4層は部分的に分層可能であったが、一括して掘削した。5層との境に自然堆積層がなく、土壤化層が連続しているので第4面ベース=5面となる。

96-1-1 トレンチで東西・南北方向の溝群と、ピットを検出した。溝群は平行もしくは直交するもので、耕作に伴う遺構と思われる。ピットは北半で集中して検出した。遺構12（ピット）は掘方中位から遺物がまとまって出土した。埋土は1層で10Y4/1灰色極細砂、遺物は重なった状態で下から土師皿2点、黒色土器1点、土師皿1点・羽釜1点である。各遺物間には炭化物が遺存していた。遺構97（ピット）は平面楕円形で埋土は1層、底よりやや浮いた状態で土師皿2点が口縁を下にした状態で重なって出土した。遺構99（ピット）の埋土は3層に分層でき2層から土師皿が出土した。遺構103（ピット）は底近くから10～20cm大の砾が出土した。

多数のピットを検出した中で、柱痕跡が確認できたのは遺構81・91・98・102・107・109（ピット）、砾が出土したのは遺構82・85・86・90・103（ピット）で、掘方底部から出土したのは遺構90・103で、他は掘方中位からの出土である。柱痕跡を確認した遺構（ピット）が6基と掘立柱建物の存在をうかがわせるが、調査区内で建物を復元するには至らなかった。第4面遺構1（流路）で削られたピット群南側と、調査区外である北側にその可能性を考えておきたい。

96-1-1・2・3 トレンチ第4面ベース遺構12・97・99・103出土遺物（図20）

上記遺構のうち、遺構12・97から出土した土器は図20に掲載している。20-1～4は遺構12から出土した土器である。20-1, 3, 4は、土師器皿である。このうち20-1は、口縁端部をつまみあげた形態の「て」字状口縁形態であり、11世紀の所産と考えられる。20-2は黒色土器B類で、口縁内面に段をもつ深い形態である。底部外面には粘土帶貼付によって断面台形の高台が作り出されている。内外面はきわめて密なヘラミガキ調整で仕上げられている。20-5, 6は遺構97から出土した土師器皿である。底面に指押さえ痕がみられ、形態から12～13世紀のものと考えられる。

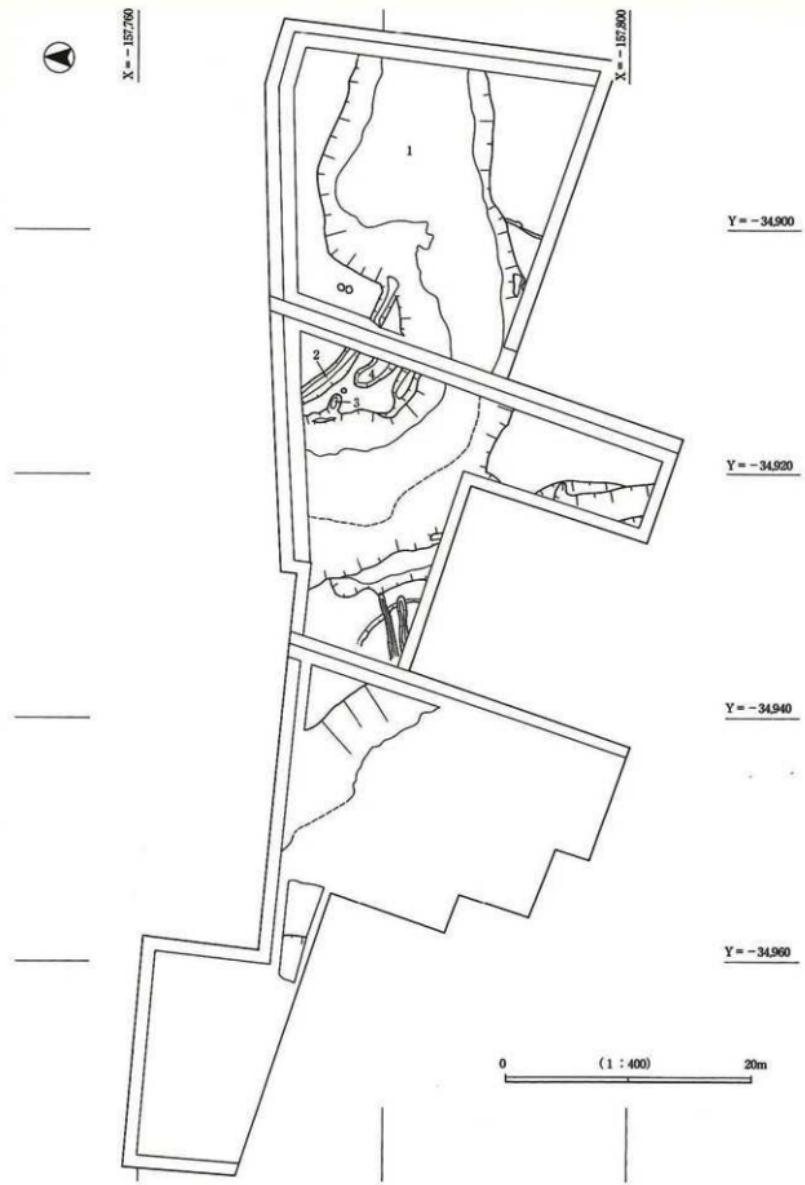


図16 96-1-1・2・3トレンチ 第4面 平面図

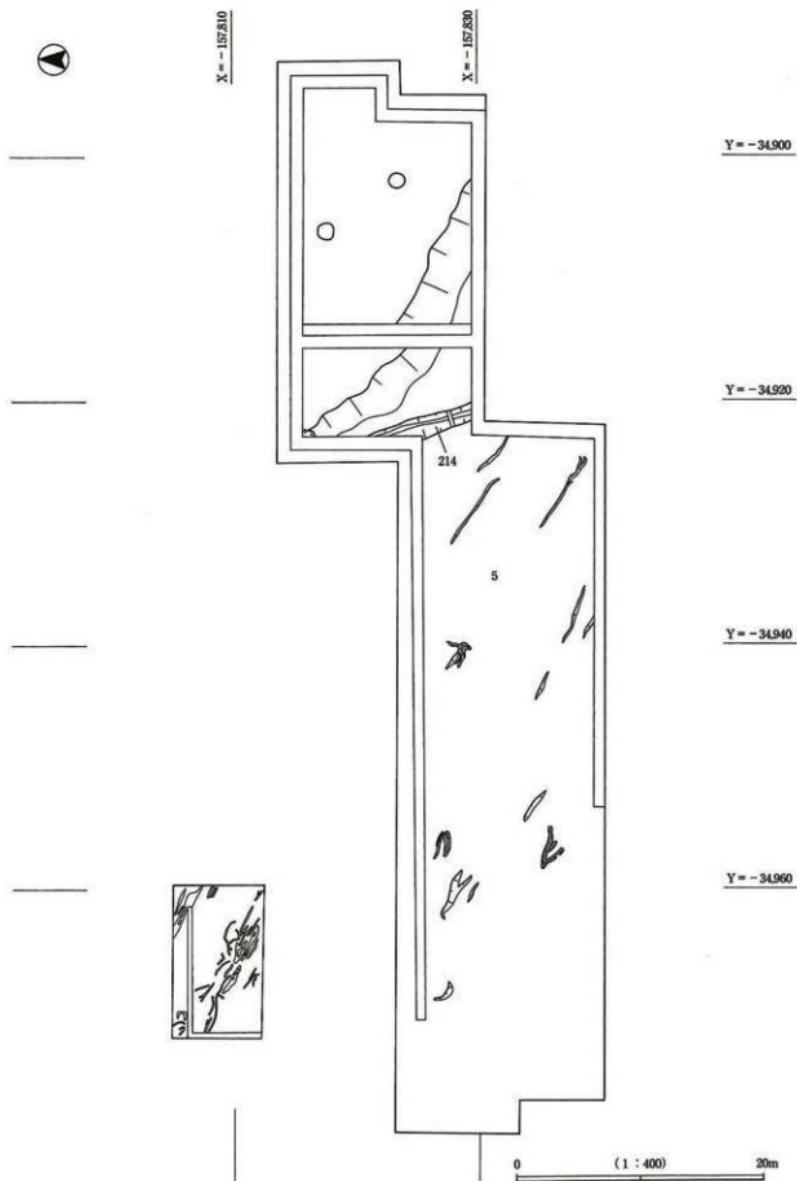


図17 96-1-4・5 トレンチ 第4面 平面図

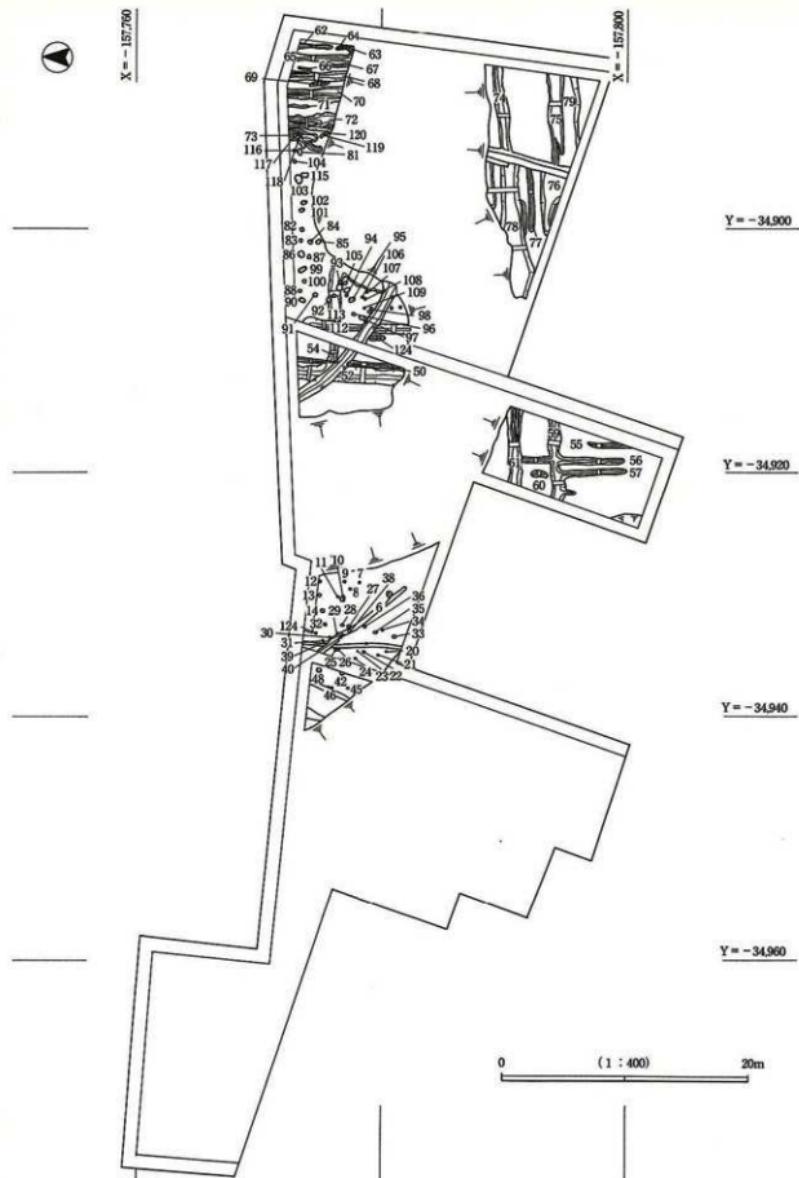


図18 96-1-1・2・3 トレンチ 第4面ベース 平面図

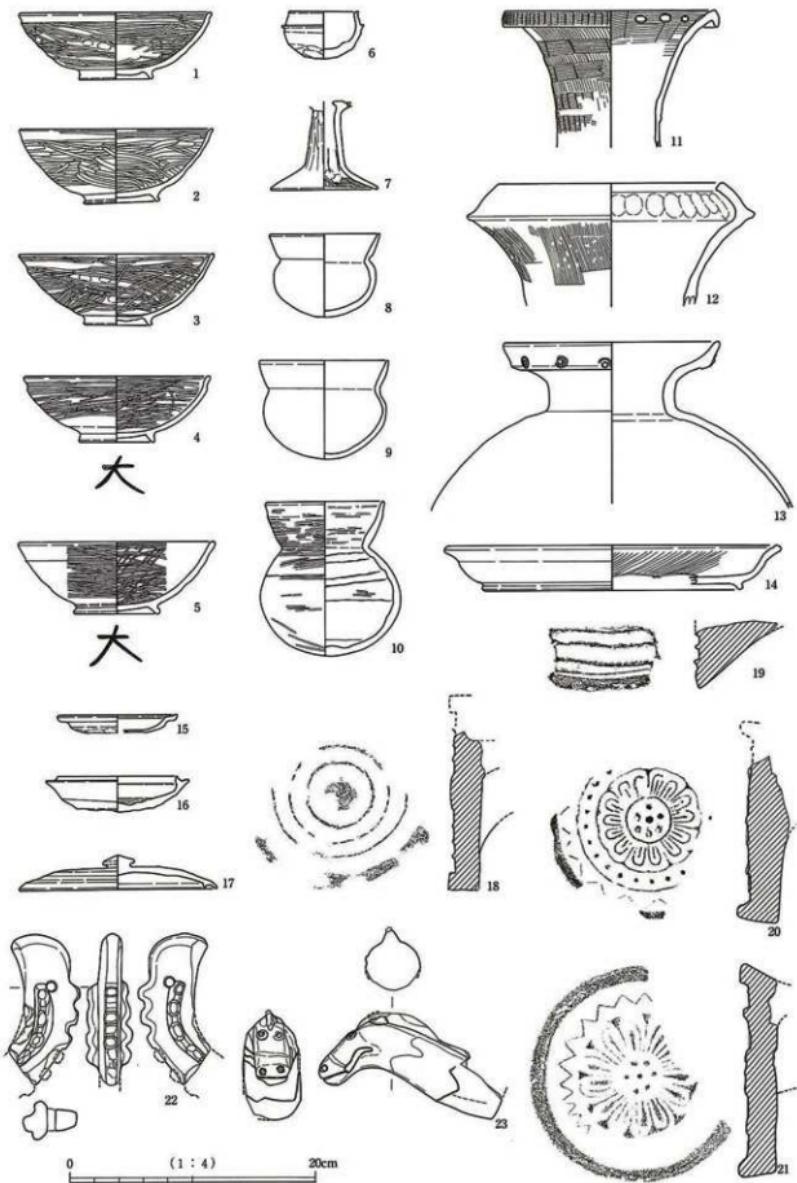


図19 96-1-1~5 トレンチ 第4面 遺構1(1~13)・5 (14~23)出土遺物

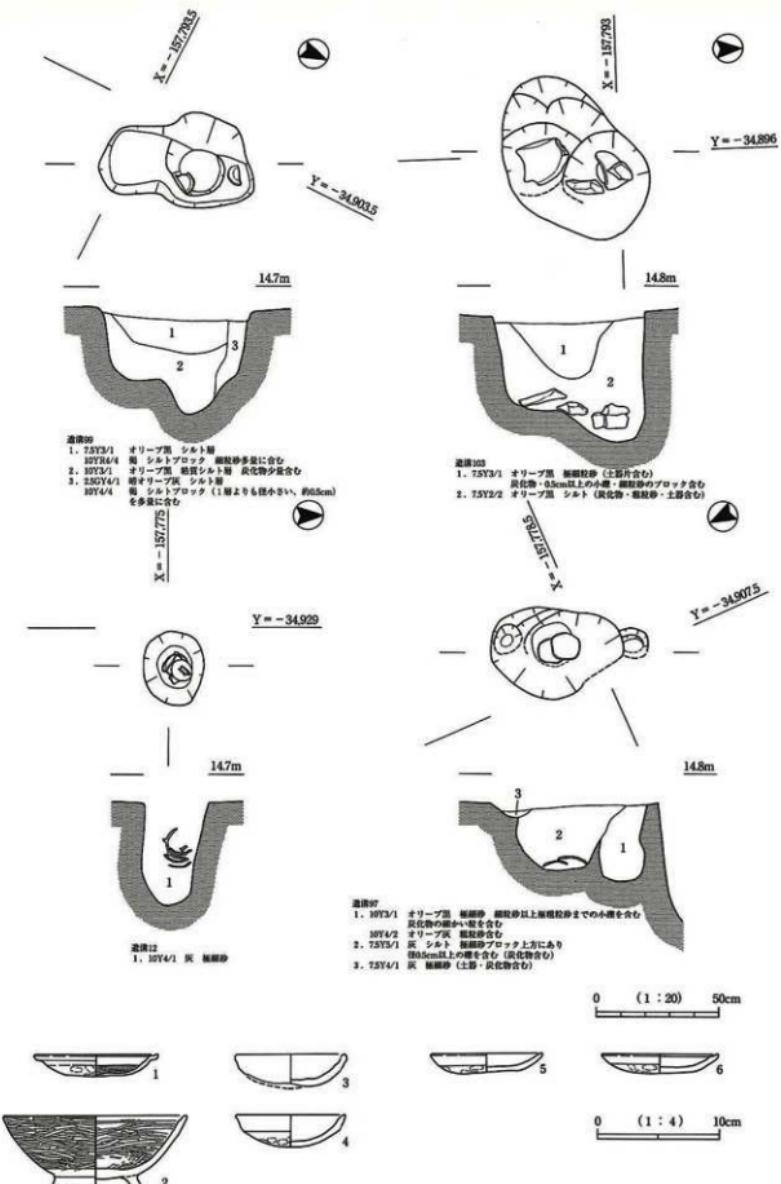


図20 96-1-1-1・2・3 トレンチ 第4面ベース 造構12 (1~4)・97(5.6)・99・103平・断面図、出土遺物

第5面（図21～23・26～36、写真図版7～12）

第4面との間に自然堆積層がないため、遺構面の検出・認識・帰属に混乱があった。96-1-1・2・3トレンチ第5面と96-1-5トレンチ第5-2面が対応する古墳時代前期面である。

全体平面図で便宜的に5-1面とした96-1-5トレンチでは南北方向の溝群と掘立柱建物1棟を検出したが、遺構埋土、溝群・建物の方向から本来4面あるいは4面ベースに帰属すべき遺構である。

96-1-1トレンチで遺構114・122・125・219（溝）、遺構123・142（土坑）を検出した。

96-1-5トレンチ（第5-2面）では遺構185・186・207（溝）と遺構207掘削中に須恵器が出土した遺構206（ピット）を検出した。遺構207は位置関係から96-1-1・3トレンチの遺構114と同一の溝と考えられる。

遺構114・207（溝）南側は第4面遺構5（流路）に、北側では東肩部を遺構1（流路）に切られている。幅は南側で広く6m、北へ行くほど狭くなり3m、深さは遺構114で1.4m、遺構207では2.5mを測る。埋土はラミナが顯著に認められる砂層が主体で下層からは木片、種実が出土した。

遺物は主に96-1-5トレンチ遺構207（溝）から東肩部に並行して6層より上層から出土した。平面図に図示した遺物のうち、土器262・263・264・265・268は肩部東からの出土で後述する遺構186（溝）に帰属する可能性が高い。体部下半に穿孔が見られるのは土器262・264・265・268である。遺物出土レベルはいずれもT.P.14.5mである。

遺構122（溝）は平面逆L字形で、幅はコーナー部がもっとも広く約2m、西端は狭く0.7m、深さは30cmを測る。西は第4面遺構1（流路）に切られ南は調査区外となる。

溝コーナー北肩部掘削中に北方向に約1.2mまで土器が続いているのを確認した。遺構検出時に掘方は確認できなかつたが、浅い溝であった可能性がある。

遺構125（溝）は弧を描きながら北は調査区外となる。幅40～60cm、深さ15cmを測る。溝内から土師器壺1点が出土した。

遺構219（溝）は検出長2.1m、幅30cm、深さ6～7cmを測る。溝が収束する北東では3cmと浅い。南西側は第4面遺構5（流路）に切られている。遺物は肩部からも出土したことから、本来の掘方は少し上方であったと考えられる。

遺構123（土坑）は平面不整円形で、径2.6m、深さ1.8mを測る。埋土は9層に分層できたが、遺物の大部分は主に3層から上層で出土したほか、6～8層からも少量ながら出土した。4・6～9層はブロック土が顯著で埋め戻されたと考えられる。南側は第4面遺構1（流路）に切られている。

遺構142（土坑）は調査区北端で土層観察用アゼを掘削中に検出した。平面は不整梢円形で長辺約1m、短辺0.7mを測る。遺物は25-1壺が下層T.P.13.2m～13.5mで、その他はT.P.14m～14.2mで出土した。

遺構185（溝）は調査区東端で南東から北西に走る。幅は北端で0.7m、南端では2.5m、深さは約35cm～40cmを測る。遺物の出土レベルはT.P.14.7m～14.8m前後の範囲に収まる。溝の幅が広くなる南東肩部で遺物は出土しなかつた。図示した遺物のうち体部下半に穿孔が見られるものが2点ある。

遺構186（溝）はほぼ直角に曲がり、東は遺構185と西は遺構207と切りあつてある。溝の幅は0.7m～1.3m、深さは20cmを測る。遺物の出土レベルはT.P.14.4m～14.8mの範囲である。図示した遺物のうち体部下半に穿孔が見られるもの3点、遺構207の記述の中で当遺構に属する可能性のあるとした遺物のうち4点（土器262・264・265・268）にも穿孔が見られる。

遺構 185 と遺構 186 西辺がほぼ平行していること、遺構 185 で南東部で溝幅が広くなる東肩部を掘りすぎた可能性があること、遺構 185 で遺構 186 南辺と接する部分から南側で遺物が出土しないことから、コの字に巡る溝であった可能性がある。さらにこれらに接して検出した遺構 185・186・207（溝）から出土した土器のうち 9 点に穿孔が見られること、遺物に大きな時期差がないこと、遺構 186 西辺東肩から遺構 185 西肩間の距離が約 9 m、北側は調査区外で明らかではないが、一辺 9 m 程度で溝が方形に巡ることが想定されることなどから墓（方形周溝墓）である可能性が考えられる。

遺構 206（ピット）は遺構 207（溝）西斜面で検出した。平面不整円形で、残存径 40 cm、深さ 10 cm を測る。須恵器坏身 2 点が底からや上位で、南側の坏身は正置、北側は横位に近い状態で出土した。

遺構の底近くで径が 40 cm と、ピットとするにはやや大きいと思われる。本来の面は 5 面もしくはそれより上位であったと考えられる。遺構 206 底のレベルは T.P. 14.0 m、遺構 207 の肩のレベルが T.P. 14.7 m で、浅くても約 70 cm 程度の深さを有していた土坑の可能性がある。

96-1-5 トレンチ第 5 面遺構 114 出土遺物（図24）

遺構 114 出土遺物のなかで図化可能な個体は 5 点 24-1～5 であった。24-1 は口縁部が緩やかに外反し、内外面がヘラミガキ調整で仕上げられる大型鉢である。24-2 は、半球形の受け部をもつ小型器台で、細密な砂粒を混和させた精良胎土によりつくられている。外面は横方向の、内面は横方向後放射状のヘラミガキ調整で仕上げられている。庄内式～布留式初頭の所産であろう。24-3 は小型の壺で、器面荒れのため調整手法などは不明である。

24-4 は、球形胴部に小型で突出する底部をもつ器形で、庄内式～布留式初頭の広口壺あるいは二重口縁壺である。24-5 は、直立する頸～口縁部をもち底部が丸底の直口壺である。胴部外面と頸部内面はハケ調整で、胴部内面はヘラケズリで仕上げられている。頸部外面には粘土帯接合痕が 2 条うかがわれ、粘土帯 3 段によって頸部が成形されたことがわかる。布留式初頭～前葉の所産と考えられる。

以上の諸特徴から、ここに掲載した当遺構出土遺物はすべて布留式初頭期を中心とする時期のものと考えられ、遺構の埋没もその時期に比定できよう。

96-1-1 トレンチ第 5 面遺構 142 出土遺物（図25）

遺構 142 からは、古式土師器が出土しており、10 点が図化可能であった。25-1 は、胴部形態が球形で、外面を前面ハケ調整後肩部に横方向のハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる壺である。口縁部は内済気味に立ち上がり端部に面をもつ、いわゆる「布留式壺」で布留式期前～中葉の所産と考えられる。25-2 は、口縁部が直立して外面に木製工具による条線を施す壺である。岡山平野の古墳時代初期壺の搬入品もしくは模倣品と考えられる。

25-3 は小型丸底土器で、頸部外面を細密なヘラミガキ調整、頸部内面をハケ調整で仕上げている。内外面のヘラミガキ調整が省略傾向にあることから、布留式期前葉の所産と考えられる。25-4, 5, 6 は小型のミニチュア土器で、形態から小型丸底土器の模倣品と推定される。布留式前葉の小型丸底土器が模倣対象と考えられ、所属時期も同一と考えたい。

25-7, 8 は高坏で、いずれも外面はナデ調整で仕上げられている。25-7 の坏部内面にはヘラミガキ調整を粗に施している。25-8 の脚部は柱状部が長めで、裾が明確に屈曲して広がる形態である。いずれも、布留式期前～中葉の所産と考えられる。

25-9は複合口縁壺、25-10は直口壺で、いずれも胴部外面はハケ調整、内面はヘラケズリ調整で仕上げられている。25-9の胴部上半外面にはヘラ状工具による刺突文が施されている。2点とも布留式前～中葉の所産と考えられる。

96-1-1 トレンチ第5面遺構 125出土土器（図27）

遺構125から出土した土器には、27-1がある。胴部外面をタタキ成形後ハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げた壺で、口縁端部を摘み上げた形状である。胎土には、角閃石・長石・石英の角礫が多い数含まれている。いわゆる生駒西麓産胎土で製作されていることや、器面調整・形態の特徴から、庄内式後半～布留式初頭の「庄内河内型壺」と考えられる。

96-1-1 トレンチ第5面遺構 219出土遺物（図28）

遺構219から出土した土器のうち図化可能だったのは、28-1～4である。28-1は、胴部が球形、口縁部が直線的に立上がる形態の壺である。器面調整痕などは不明であるが、口縁屈曲部の内面にヘラケズリ調整による明瞭な稜線がみられ、いわゆる庄内式壺の形態である。28-2は小型器台の脚部で、中位に円孔透かしが穿たれている。28-3,4は、外面を細密なヘラミガキ調整で仕上げた有段口縁鉢である。内面は、28-4に数条のヘラミガキ調整が認められる。

これらの土器はすべて、庄内式後半から布留式初頭の所産と考えられ、当遺構の埋没時もその時期と考えられる。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構 206出土遺物（図34）

当遺構の北側立ちあがり部・中央部から、須恵器坏身が2点（34-1,2）が出土している。34-1は口縁部が欠失しているが、34-2は完形品である。いずれも、深めの器形で外面の回転ヘラケズリ調整が中位まで残存している。34-2は、口縁部の立ちあがりは大きく、口縁端部内面に明確な稜線が形成されている。形態・調整手法からTK47型式を中心とする時期のものと思われ、5世紀後葉～6世紀初頭に製作されたと考えられる。

96-1-1 トレンチ第5面遺構 122出土遺物（図37～43）

当遺構から出土した多量の土器のうち、主要なものを（図37～43）に掲載した。上述のように、当遺構埋土は上下2層に分別可能で、図43に図示した個体の出土層位は、そのうちの下層に限定できる。

まず注目されるのは、43-18の土製品である。中空の体部の下方に底面をもつ突出部があり、上半は前後に筋縫線上に延びる形状である。鳥形土製品と考えられるが、頭部と尾部は欠損している。脚部は土器底部状に合一されている。外面はヘラケズリ後ナデ調整によって仕上げられている。

43-1,2は高坏で、いずれも斜め外方に直線的に延びる坏部形態で、外面は横方向の、坏部内面は横方向後放射状の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。43-2の脚柱状部は短い。43-7は椀形高坏で、短い柱状部から明確に屈曲して大きく裾部が広がる脚部形態である。坏部内外面・脚部外面は細密なヘラミガキ調整で仕上げられている。

43-3は小型器台脚部で、直線的に裾部が広がる形態で、中位の3方に円孔が穿たれている。外面は細いヘラミガキ調整で仕上げられている。43-4,5,6は小型丸底壺で、いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作され、外面は横方向の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。頸部内面に関しては43-4は右上がりの斜め方向、43-6は横方向の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。43-8は口縁部が屈曲する形態の有段口縁鉢で、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。外面は横方向の、内面は横方向後放射状の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。43-9は直口する形態の丸底鉢

である。外面はヘラケズリ調整後ナデ調整またはハケ調整、内面はナデ調整で仕上げられている。

43-10~17は中型の壺である。いずれも球形胴部に端部を擒み上げる形状の口縁部をもつ器形で、胴部内面はヘラケズリ調整、口縁部内面はハケ調整後ナデ調整で仕上げられている。ただ、胴部外面の調整痕には差異が見られる。43-14~17は、胴部外面がタキ整形後ハケ調整で仕上げられ、胎土中には角閃石・長石・石英角礫が多く含まれている。いわゆる「生駒西麓産」胎土で製作され、形態・器面調整手法から「庄内河内型壺」に分類できる土器群である。一方、43-10~13は、いずれも胴部外面を斜め方向のハケ調整で仕上げられている。布留式期の定型的壺のように外面肩部ヨコハケ調整を施すものではなく、いずれも「布留傾向壺」「布留系壺」と呼ばれる型式といえよう。

図43に掲載した土器群を通観すると、古式土師器の小型精製器種の型式がほとんど描いつつも、中空（「X」形）小型器台や定型的布留式壺が共存していないことがわかる。この組成上の特徴から、遺構122下層出土土器群は、平城宮下層SD6030出土[井上和人1980『平城宮発掘調査報告X』奈良国立文化財研究所]の典型的な「布留式古相」の直前の状況を示している。類似した型式的特徴・組成を持つ一群として、八尾市久宝寺遺跡南地区K3号墓周溝内下層およびk-sx-3出土土器群[（財）大阪府文化財調査研究センター1999『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』]などが挙げられる。寺沢薰氏の「布留0式」[寺沢薰1986『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所]の新相もしくはその直後、米田敏幸氏の「庄内V/布留I期」[米田敏幸1990『土師器の編年I近畿』『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣]の古相に相当する土器群と考えられ、布留式成立過程を考える上での基準資料といえよう。

図37~42は遺構122上~下層出土の土器群である。37-17,18は大型鉢で、いずれも外面はハケ後ナデ調整で仕上げられている。37-17は口縁屈曲部外面に刻み目入り突帯を貼付し、37-18は口縁部が段をもって直立する形態である。

37-1~14は小型丸底壺である。いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されていて、頸~口縁部長が胴部高の2/3以下となる形態である。器面調整では、外面が横方向の細いヘラミガキ調整で仕上げられているもの（37-3,5,6,8,9,10,12,13,14）とそうでないものの（37-1,2,4,7,11）2種類がみられる。前者の下地にはヘラケズリ後ナデ調整を行っているものが多い。後者でも最終器面調整はヘラケズリ後ナデ調整である。両者は基本的に同一手法で作られ、最終段階のヘラミガキ調整の有無だけが各個体差となって現れている。37-15は小型の丸底鉢でヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。37-16は有段口縁鉢で外面を横方向の、内面を横方向後放射状のヘラミガキ調整で仕上げられている。

38-1~7は、小型器台である。受け部は断面が半円形となる形態で、いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。38-5は内外面を細いヘラミガキ調整で仕上げられているが、その他の個体はナデ調整で仕上げられている。38-8~15は高杯で、いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。杯部口径からみると、38-8,9,10,11,12の中型品と、38-14,15の大型品が存在する。完形品は38-11,12だけであるが、上半部が残存している個体では、すべて断面逆台形の杯部形態である。下半部が残存している38-11,12,13では、いずれも柱状部の短い脚部形態で、直線的に広がる裾部には円孔が穿たれている。杯部外面は横方向の、内面は横方向および放射状の細いヘラミガキ調整で仕上げられているものが多い。

38-17,18は大型の、38-19は小型の二重口縁壺である。38-17,18は頸~口縁部のみの破片であるが、いずれも内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられている。38-19は細砂粒のみを含む精良な胎土で

製作されており、丸底で胴部形態は球形である。38-20,21,22は小型で完形の直口壺で、いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。38-21,22は、胴部外面は横方向、頸部の内外面は横方向後斜め方向の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。39-1,2,3,4,6,7は大型の直口壺である。いずれも破片状態で、球形の胴部が完存しているのは39-6の1点のみである。どれも内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられている。39-5は、広口壺の完形品である。胴部外面はタタキ整形後ハケ調整、内面はハケ調整で仕上げられており、胴部中位に焼成後穿孔が行われている。

図40~42に掲載している土器群は壺である。40-1~19、41-3,9,10は胴部外面をタタキ整形後ハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げ、口縁端部をつまみあげた形態の壺である。底部が残存している個体では、すべて丸底形態である。いずれも、角閃石・長石・石英の角礫を多量に含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。形態・調整手法・胎土の特徴から庄内河内型壺といわれる型式である。41-1,2,4~8,11~18は、胴部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる壺である。大半の個体は口縁端部を摘み上げる形態をとり、庄内式壺と類似している。ただ、41-16,17,18は端部に面をもち、内側に稜線に形成される口縁形態で、特に胴上半部が残存している41-18は横方向のハケメが認められる。これらは布留式壺に通有な属性といえる。41-1,2,4~8,11~15は、「布留系壺」「布留式傾向壺」と呼ばれる型式、41-16,17,18は定型的布留式壺といえよう。42-1,2,4,8は内面ヘラケズリ調整を行わない小型の壺である。

42-5,9は、庄内式~布留式にはみられない形態の壺である。42-5は、口縁部が短く外反する形態で、胴部外面がハケ調整、内面がナデ調整で仕上げられている。四国北部の古墳時代初頭の壺に形態は類似しているが、内面調整がヘラケズリ調整でないことから搬入品とは考えられない。また、42-9は口縁端部が立ち上がる形態で、胴部内面がヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。古墳時代初頭の岡山平野の壺に類似しており、搬入品もしくは模倣品の可能性が高い。

42-3,6,7,10,11,12,13は胴部が長楕円球形で、頸部が長く伸びる形態の土器群である。胴部外面はタタキ整形後ハケ調整が行われたと考えられ、弥生後期以来の壺製作手法・形態をもっている。ただし、頸部~口縁部が発達して直立もしくは広口壺状に外反し、壺・壺の中間形態ともいえる。42-3,12,13とともに残存している底部は小さな平底である。

以上、図37~42に示した遺構122上~下層出土土器は、図43に示した遺構122下層出土土器に類似した土器群ではあるが、壺にみられるように定型的布留式にみられる型式も共伴している。つまり、後続する土器群を含むことになり、図37~42に示した土器群の廃棄には庄内式末期~布留式確立期間での一定の時間幅を考慮する必要があろう。

96-1-5 トレンチ第5面遺構123出土遺物（図44~48）

遺構123からも大量の古式土器群が出土しており、その主要なものに関しては図44~48に図示した。44-1,2,3,4,5,6は小型丸底壺で、いずれも頸~口縁部が短い形態で、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。44-2,3,4,5,6は外面が横方向、頸部内面が横方向もしくは斜め方向の細かいヘラミガキ調整で仕上げられており、外面のヘラミガキ調整の下地にはヘラケズリ調整痕がうかがわれる。44-12,13,14,15,16は有段口縁鉢であり、これらも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。外面は底部が縱方向で口縁~胴部が横方向、内面は横方向後放射状のヘラミガキ調整が施されている。小型丸底壺同様に、外面のヘラミガキ調整の下地にはヘラケズリ調整痕がうかがわれる。もう1点特殊形態の有段口縁鉢として、脚部の付属した個体（44-7）がある。鉢部は他の44-12,13,14,15,16と同

じ形態・製作手法で、脚部は当該期の高坏と同じ形態である。有段口縁鉢と高坏の折衷形式と考えるべきであろうか。また、中型の鉢として44-18がある。外面ハケ調整後ナデ調整、内面ヘラケズリ調整後ナデ調整で仕上げられ、有段口縁鉢とは異なる手法で製作されている。

44-8は緩やかに裾部が外反する形態の高坏脚部で、弥生時代後期後葉～庄内式前半にみられる形態である。既往の当該期土器編年案では、有段口縁鉢出現以前の形式と考えられていることから、先行する時期の堆積層からの混入品の可能性が高い。また、44-11の椀形高坏も、深い坏部器形や外面の斜め方向のヘラミガキ調整などは、庄内式前半の型式の特徴であり、混入品と考えたい。また、47-4, 5は口縁端部に円形浮文を貼付する広口壺である。これらも庄内式前半の型式と考えられ、既往の良好な一括資料においては有段口縁鉢と共に伴する例はない。混入品と考えたい。

44-17,19,20,21,22は丸底で球形の胴部をもつ小型壺である。完形品は44-17のみであるが、その他もこの個体同様直口壺と考えられる。いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられており、頸部が残存する個体ではその内面にも横方向もしくは放射状の細いヘラミガキ調整が施されている。小型の壺としては、胴部上半に櫛描直線文・波状文を施す47-15がある。広口壺もしくは二重口縁壺と考えられる。

45-1,2,3,4は中型の直口壺である。45-1は外面と頸部内面がヘラミガキ調整で仕上げられているが、その他の3点（45-2,3,4）は外面がハケ後ナデ調整で仕上げられている。いずれも胴部内面はヘラケズリ調整である。46-1,2,3も直口壺の形態であるが、胴部が楕円球形であり、外面がタタキ整形後ハケ調整で仕上げられるなど、弥生後期の壺に類似した型式である。いずれも内面はハケ後ナデ調整で仕上げられている。

45-5,6,46-4,5は二重口縁壺である。45-5,6は口縁部が外反する形態で、胴部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ後ナデ調整で仕上げるタイプである。46-5は、口縁部が直線的に広がり、底部が微妙に平底状を呈する形態である。全体に内外面ともハケ調整で仕上げられている。46-4は口縁部が直立する形態の大型品である。胴部内面はハケ調整で仕上げられるものの、頸～口縁部の内面は横方向、外面は横方向後縦方向のヘラミガキ調整が施される。高松平野で多く見られるタイプの大型壺であるが、搬入品か模倣品かは不明である。

図47-48には壺を掲載している。掲載した壺は、その特徴から主に3群に類別することができる。一つは、胴部外面をタタキ整形後ハケ調整、胴部内面をヘラケズリ調整で仕上げ、口縁端部を摘み上げる形態の一群（48-1,4,5,6）である。これらは、すべて角閃石・長石・石英の角礫を含む「生駒西麓産」胎土で製作されており、庄内河内型壺と呼ばれる型式である。もう一つは、内湾気味の口縁部に端面をもつ形態で、胴部外面全体にハケ調整、特に肩部に横方向のハケ調整が施され、胴部内面はヘラケズリ調整で仕上げられる一群（47-1,6,7,48-18）である。これらは、布留式の定型的な壺の型式である。これら2者にはその中間形態ともいべき一群がある。口縁端部を摘み上げる形態で、胴部外面がハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げるもの（48-7,8,9,10,11,13,14,15,16,17）が多数みられる。これらは、「布留傾向壺」「布留系壺」と呼ばれる一群である。また、これら主要3種の壺のほかに、48-1,3のように胴部外面にタタキ整形を明瞭に残し、胴部内面をハケ後ナデ調整で仕上げるものがある。これらは、弥生後期以来の手法によって製作されたものである。

これらを通観すると、当遺構出土土器群の中心は定型的布留式の古相（布留Ⅰ期 [前掲米田1991]）に相当するが、小数の庄内式前半の土器群が混在する状況にあると考えられる。

そのほかに、庄内式～布留式にはみられない特徴を持つ土器も出土している。47-9,10は内傾する広い口縁端面に凹線文状の沈線を施し、口縁部内面にヘラミガキ調整を行う土器である。このような口縁部の特徴は北陸・北近畿・山陰地方の当該期の器台に通有で、日本海沿岸部とその周辺地域からの搬入品もしくはその模倣品の可能性が高い。47-12は、上方へ拡張した口縁部に木製工具による条線を施す壺で、岡山平野を中心に分布する当該期の壺に通有の特徴をもっている。中部瀬戸内地方からの搬入品もしくはその模倣品と考えられる。47-13,16は、「S」字状口縁を呈する壺で、特に47-16には脚台が付属している。これらは東海地方に通有の型式であり、その地方からの搬入品もしくはその模倣品と考えられる。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構185出土遺物（図49～51）

遺構185から出土した多量の古式土師器は図49～51に掲載している。49-1,2,8,9は、胴部外面をタタキ整形後ハケ調整、胴部内面をヘラケズリ調整で仕上げ、口縁端部を摘み上げる形態の壺である。これらは、すべて角閃石・長石・石英の角礫を含む「生駒西麓産」胎土で製作されており、庄内河内型壺と呼ばれる型式である。49-4,5,6,7,10,11,12,50-3,4,5,8,9,10は、内湾気味の口縁部に端面をもつ形態で、胴部外面全体にハケ調整、特に肩部に横方向のハケ調整が施され、胴部内面はヘラケズリ調整で仕上げられる壺である。これらは、布留式の定型的型式である。そのほかに、口縁端部を摘み上げる形態で、胴部外面がハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる壺（49-3,50-1,2,7,11）もみられる。これらは、「布留傾向壺」「布留系壺」と呼ばれる一群である。また、口縁部が段を持って立ちあがる形態の大型壺として、51-1,2がある。いずれも胴部外面にはハケ調整を行なうが、51-2では、胴中～下位にヘラミガキ調整をまばらに施している。

50-12～16は小型丸底土器である。50-16以外は、頸～口縁部長が胴部長とほぼ同等になる形状である。50-13,14には外面あるいは頸部内面に細いヘラミガキ調整を施すが、それ以外は内外面ともナデ調整で仕上げられている。いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。50-17は細砂粒のみを含む精良な胎土で製作された小型直口壺である。外面全体と頸部内面を横方向のヘラミガキ調整後、頸部外面には最終段階で放射状のヘラミガキ調整を施している。頸部中位に焼成後穿孔が行なわれている。大型直口壺としては51-3,4,5があり、球形の頸部がハケ調整で仕上げられ、頸部外面にまばらなヘラミガキ調整を行なっていることがわかる。

50-18は高坏で、断面逆台形の坏部に、長い柱状部から裾が明確に屈曲して広がる脚部を持つ形態である。内外面はすべてナデ調整で仕上げられている。

以上を通してみると、壺のうち定型的布留式壺が多数を占めること、小型丸底壺が頸部の発達する形態でヘラミガキ調整が省略される特徴をもつこと、高坏の脚柱部が長い形態であることなどから、当遺構出土土器群は布留式前業（布留Ⅰ～Ⅱ期〔前掲米田1991〕）に位置付けることが可能である。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構186出土遺物（図52）

遺構186出土の古式土師器は、図52に掲載している。52-1,2,3,4,5は、頸～口縁部長が胴部長とほぼ同等になる形状の小型丸底壺である。52-1の頸部内面、52-4の外面・頸部内面にヘラミガキ調整が行なわれている以外は、すべてナデ調整で仕上げられている。いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。52-6は小型の二重口縁壺である。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作され、外面は細いヘラミガキ調整で仕上げられている。52-7,8は小型器台で、いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。52-7は受け部が中空の「X」形の断面形状で、52-8は半円形の受け部

断面形態である。いずれも、内外面ともナデ調整で仕上げられている。

52-9,10,11,12,13は壺である。52-9,11,12は、口縁端部を摘み上げる形態で、胴部外面がハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる「布留傾向壺」「布留系壺」と呼ばれる一群である。52-10,13は、内湾気味の口縁部に端面をもつ形態で、調部外面全体にハケ調整、特に肩部に横方向のハケ調整が施され、胴部内面はヘラケズリ調整で仕上げられる壺である。これらは、布留式の定型的型式である。

以上を通観すると、小型器台の受け部が中空の「X」形の断面形状であること、小型丸底壺が頭部の発達する形態でヘラミガキ調整が省略される特徴をもつことから、当遺構出土土器群は布留式前業（布留I〔前掲米田1991〕）に位置付けることが可能である。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構 208出土遺物（図53）

遺構 208からは、53-2が出土している。口縁部が短く外反して頭部上位に段をもつ形態の広口壺で、外面と頭～口縁部内面はヘラミガキ調整で仕上げられている。弥生時代前～中葉の所産である。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構 207出土遺物（図53・54）

遺構 207からは、53-1が出土している。胴部外面を縦方向のヘラミガキ調整で仕上げ、口縁部が短く外反する形態の壺である。弥生時代中期～後葉の所産である。

また、当遺構からは、53-1のほかに古式土師器も多量に出土している。54-1は有段口縁鉢で、外面が横方向の、内面が横方向後、放射状の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。54-12は、頭～口縁長が胴部高の1/2程度と短い形態の小型丸底壺で、胴下半部外面には細いヘラミガキ調整がまばらに施されている。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。54-2は、受け部が断面半円形の小型器台で、脚裾部外面に横方向の、受け部内面に横方向後、放射状のヘラミガキ調整が施されている。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。

54-5,6,7,8は、小型の二重口縁壺で、いずれも外面と口縁部内面が細密なヘラミガキ調整によって仕上げられている。いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。54-10は大型で球形胴部をもつと推測される広口壺で、外面がハケ調整、口縁部内面が横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。54-14,15は大型の二重口縁壺で、球形の胴部外面はハケ調整後まばらなヘラミガキ調整が縦方向に施される。胴部内面はヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。

54-3,4は、坏部側面が逆台形を呈し、脚部は短い柱状部から明確に屈曲して広がる裾部形態の高坏である。坏部外面は横方向、坏部内面は横方向もしくは放射状の細いヘラミガキ調整によって仕上げられる。いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。54-11は椀形高坏で、坏部外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられる。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。

54-9は平底、54-13は尖底の壺である。いずれも胴部外面にタタキ整形痕がうかがわれるが、内面の器面調整は、54-9ではハケ後ナデ調整、54-13ではヘラケズリ調整である。54-13は、角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されており、庄内河内型壺と呼ばれる型式に相当する。

以上を通観すると、脚柱部の短い高坏形態、小型器種へのヘラミガキ調整の徹底などの特徴から、当遺構出土の古式土師器は、庄内式末～布留式初頭の所産と考えられる。

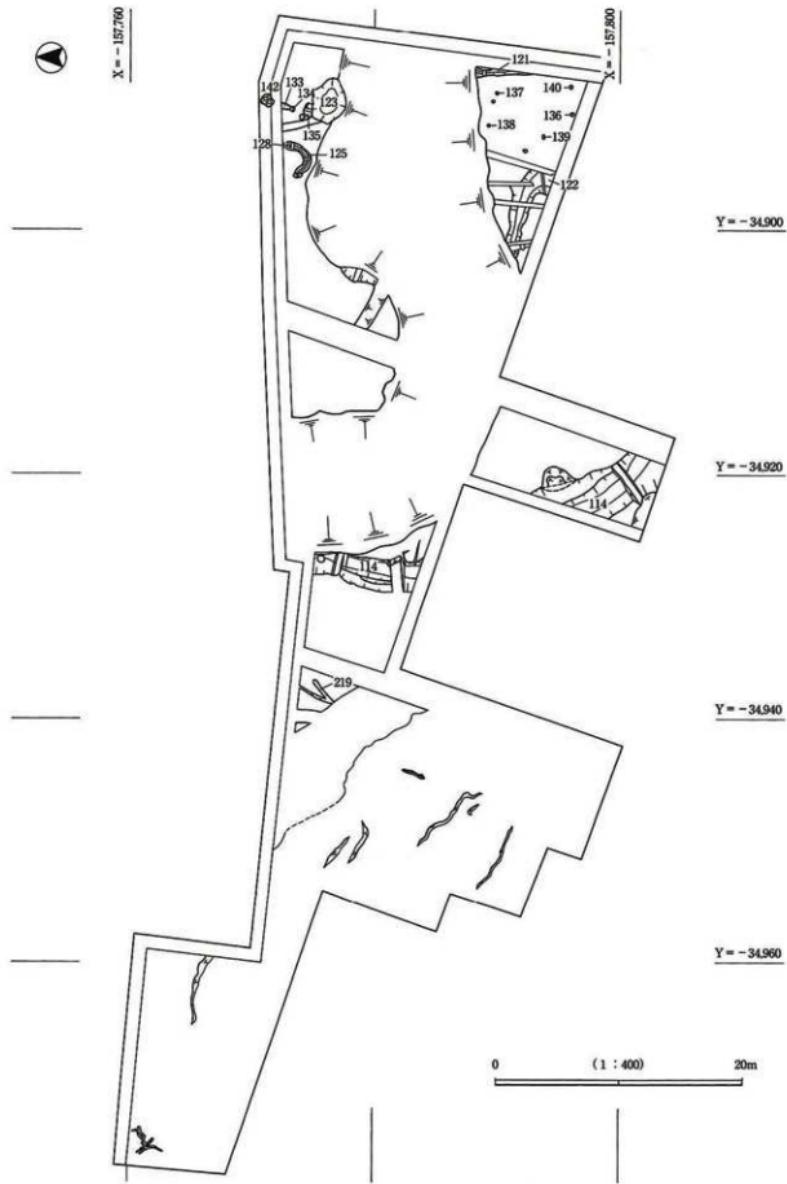


図21 96-1-1・2・3 トレンチ 第5面 平面図

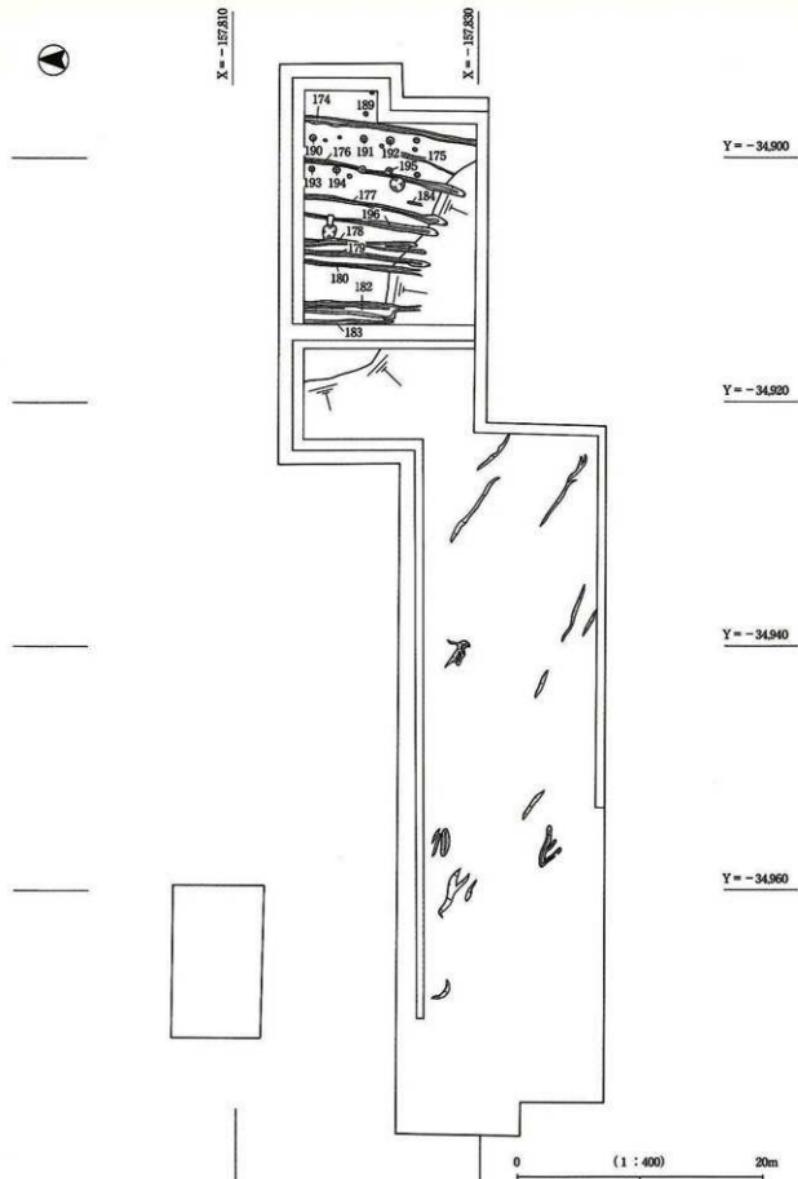


図22 96-1-4・5 トレンチ 第5-1面 平面図

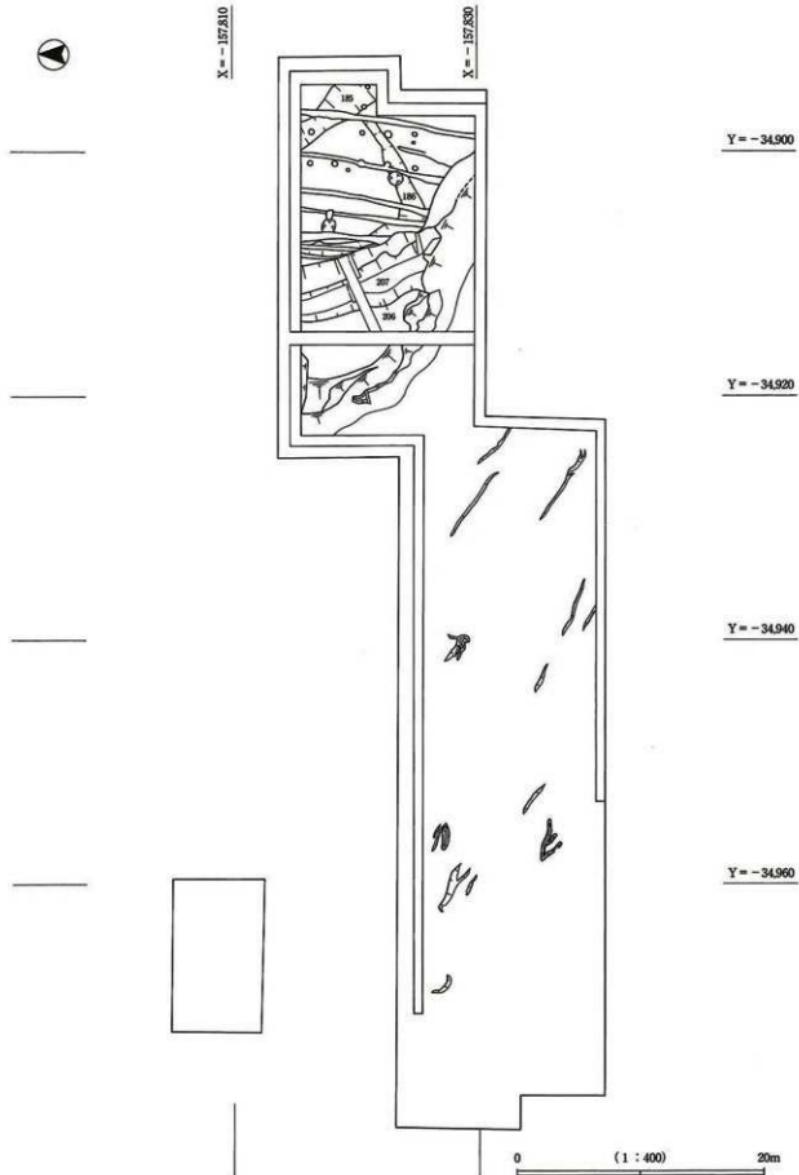


図23 96-1-4・5 トレンチ 第5-2面 平面図

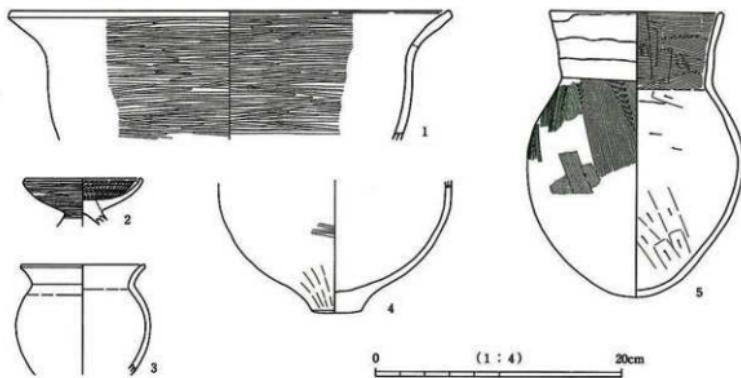


図24 96-1-1・3トレンチ 第5面 遺構114出土遺物

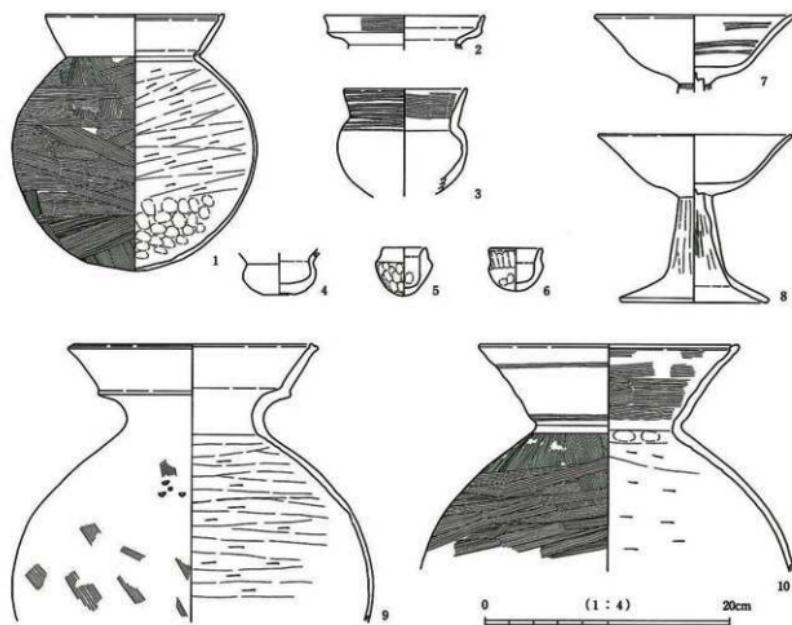


図25 96-1-1トレンチ 第5面 遺構142出土遺物

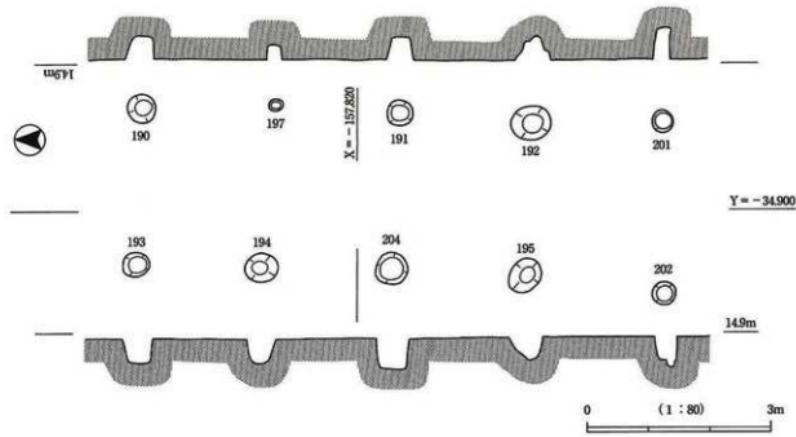


図26 96-1-5 トレンチ 第5-1面 ピット 190~195、197、201~203、204

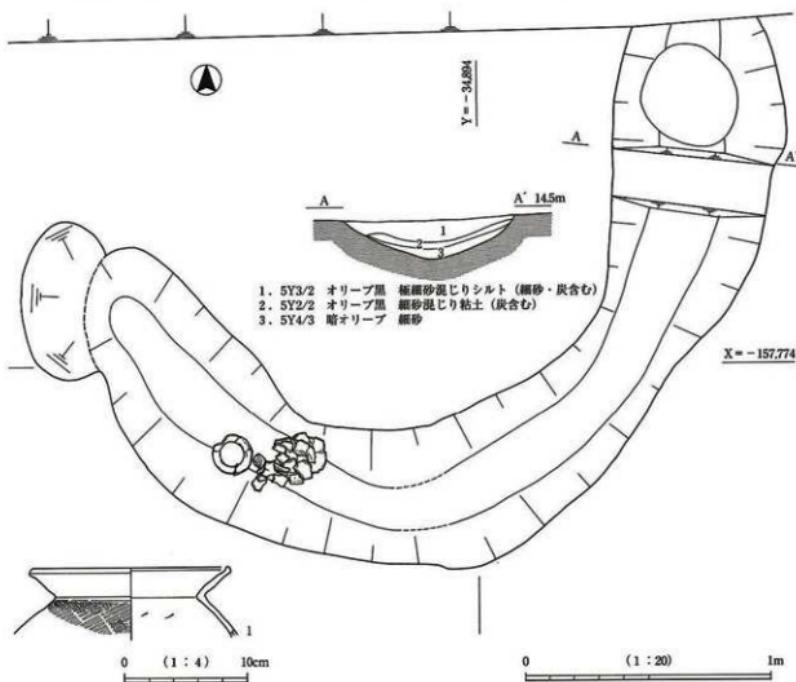


図27 96-1-1 トレンチ 第5面 造構125 平・断面図、出土遺物

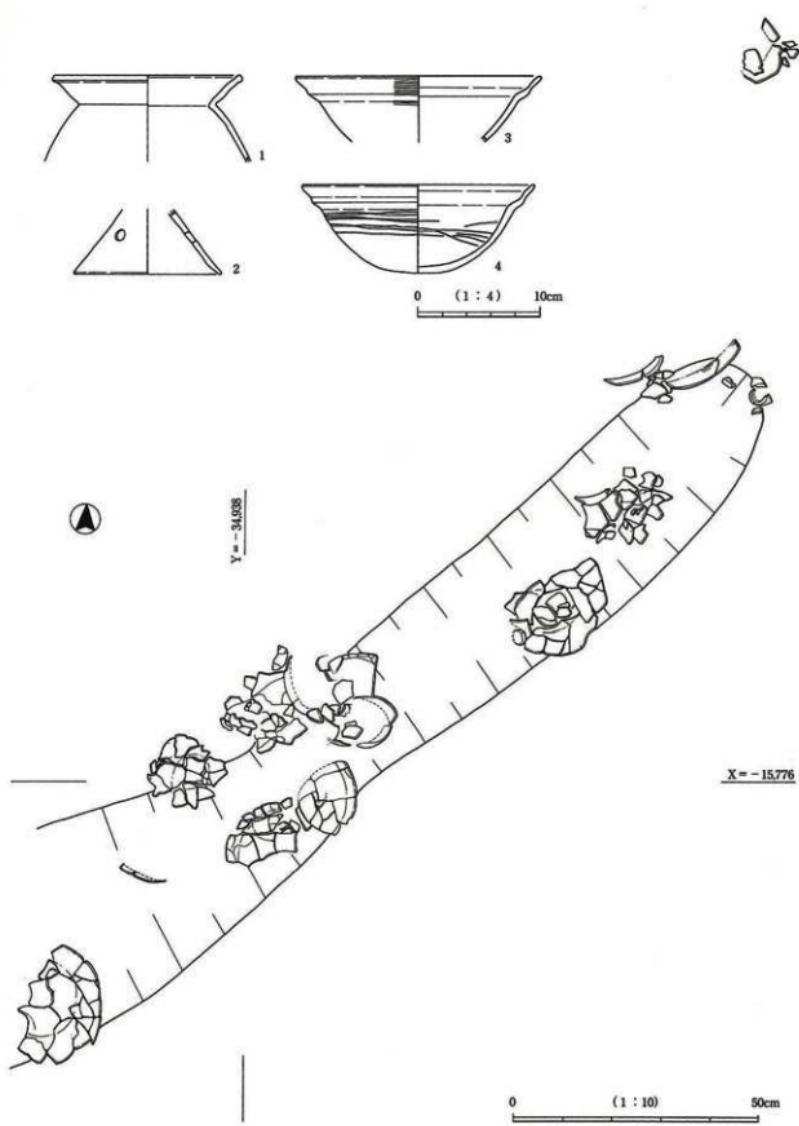


図28 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構219平面図、出土遺物

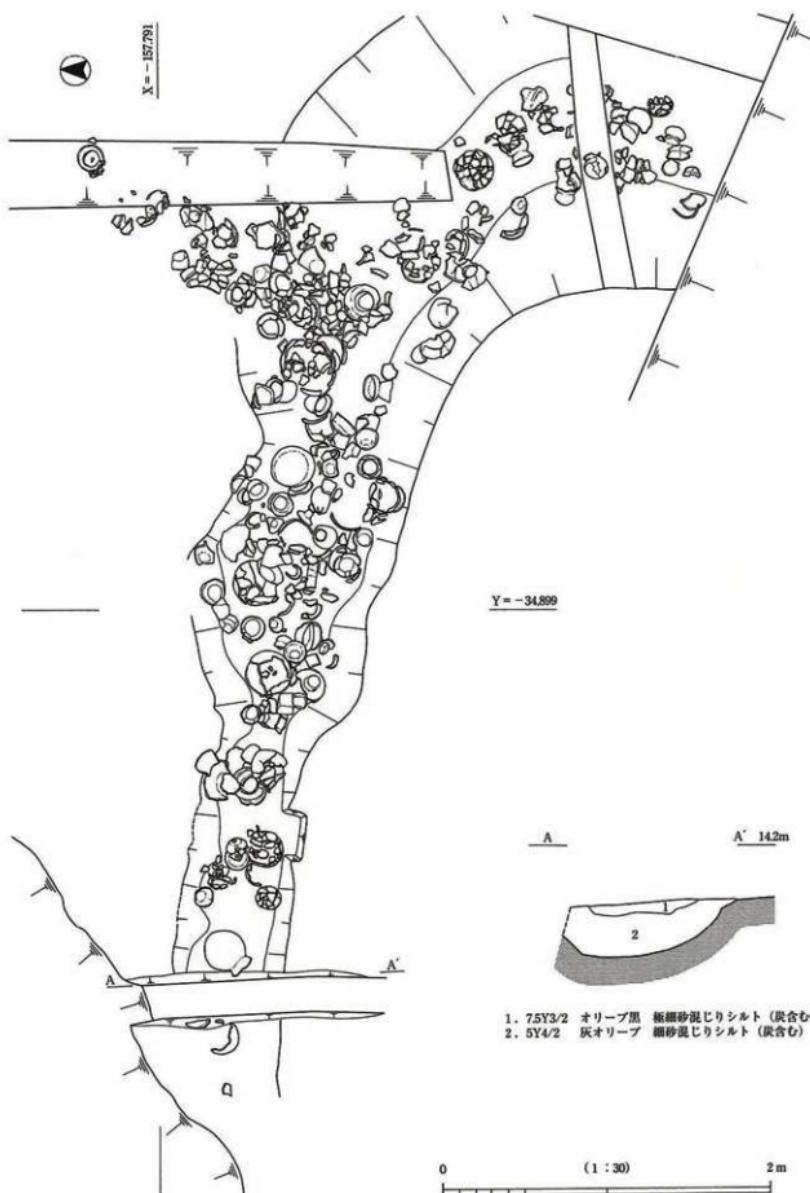
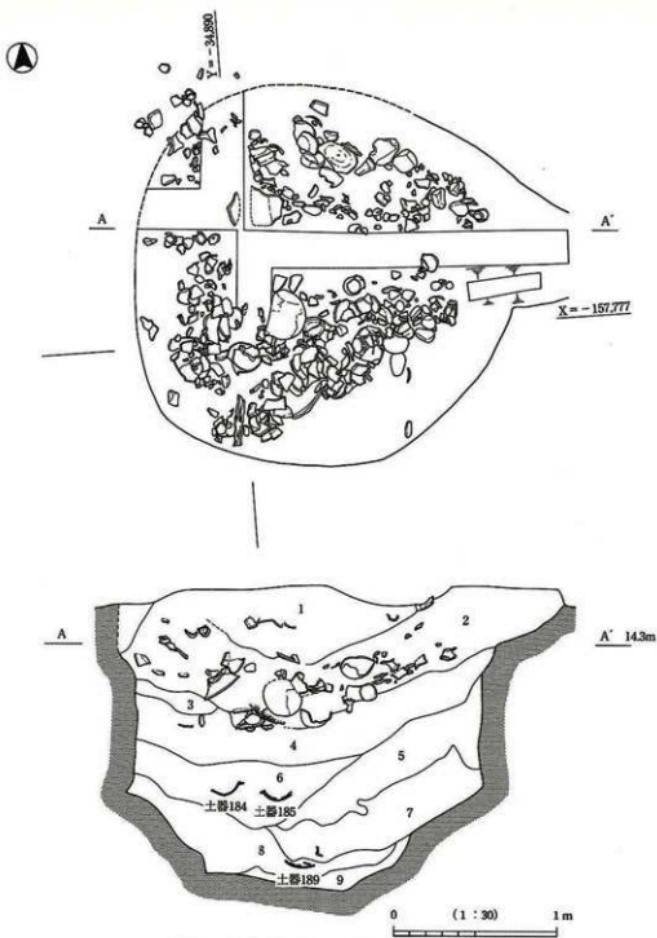
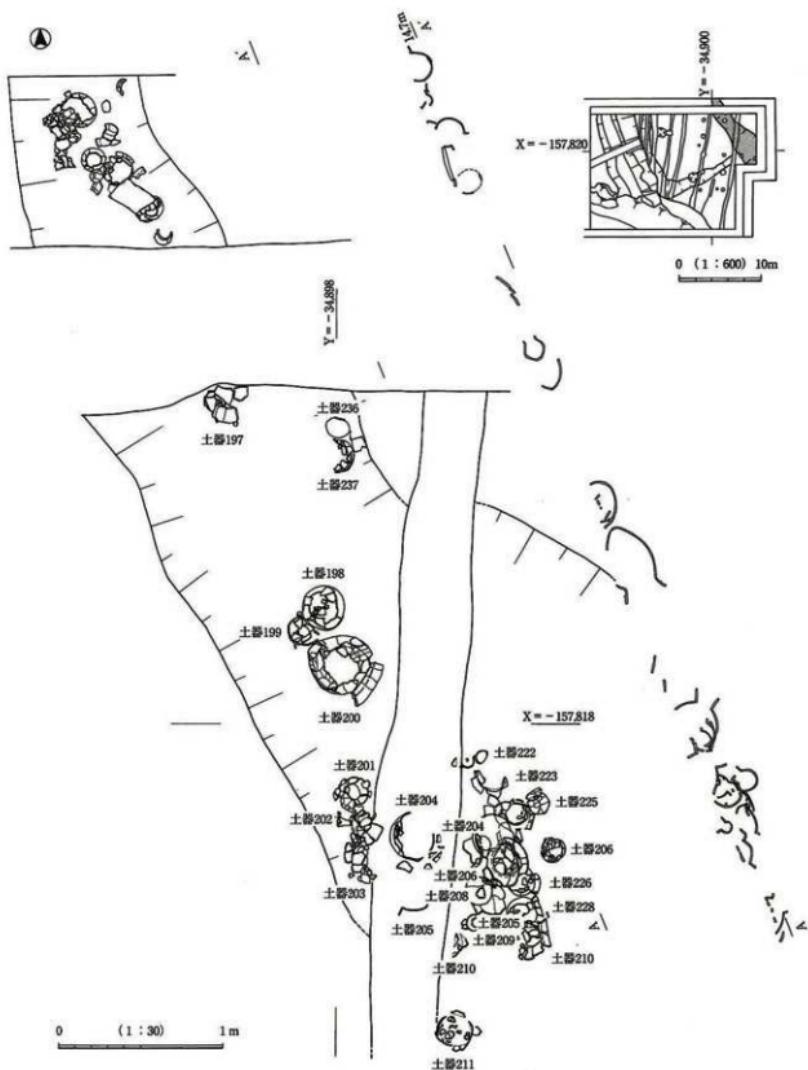


図29 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122平・断面図



1. 5Y4/2 灰オーリーブ 細砂混じりシルト（炭・土器片混じる）
 2. 10Y3/1 オリーブ黒 極細砂混じりシルト（灰混じる、土器多量に混じる）
 3. 7.5GY4/1 暗緑灰 細砂混じり粘土質シルト
 4. 7.5Y3/2 オリーブ黒 細砂混じりシルト（粗砂含む）
 7.5Y5/2 灰オーリーブ 細砂のブロック土
 5. 7.5Y4/3 暗オーリーブ 細砂混じりシルト
 (下部グライ化してGY4/1 暗オーリーブ灰)
 6. 10Y3/2 オリーブ黒 極細砂混じりシルト
 5GY4/1 暗オーリーブ灰 極細砂混じりシルト（細砂含む）のブロック土
 7. 7.5GY3/1 暗緑灰 細砂混じり粘土
 7.5GY4/1 暗緑灰 細砂混じり粘土
 2.5GY5/1 オリーブ灰 細砂のブロック土
 8. 5GY4/1 暗オーリーブ灰 細砂混じりシルト
 10GY4/1 暗緑灰 細砂混じりシルトと
 7.5GY4/1 暗緑灰 細砂混じり極細砂のブロック土
 9. 5GY5/1 オリーブ灰 細砂
 2.5GY5/1 オリーブ灰 中砂のブロック土

図30 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123平・断面図



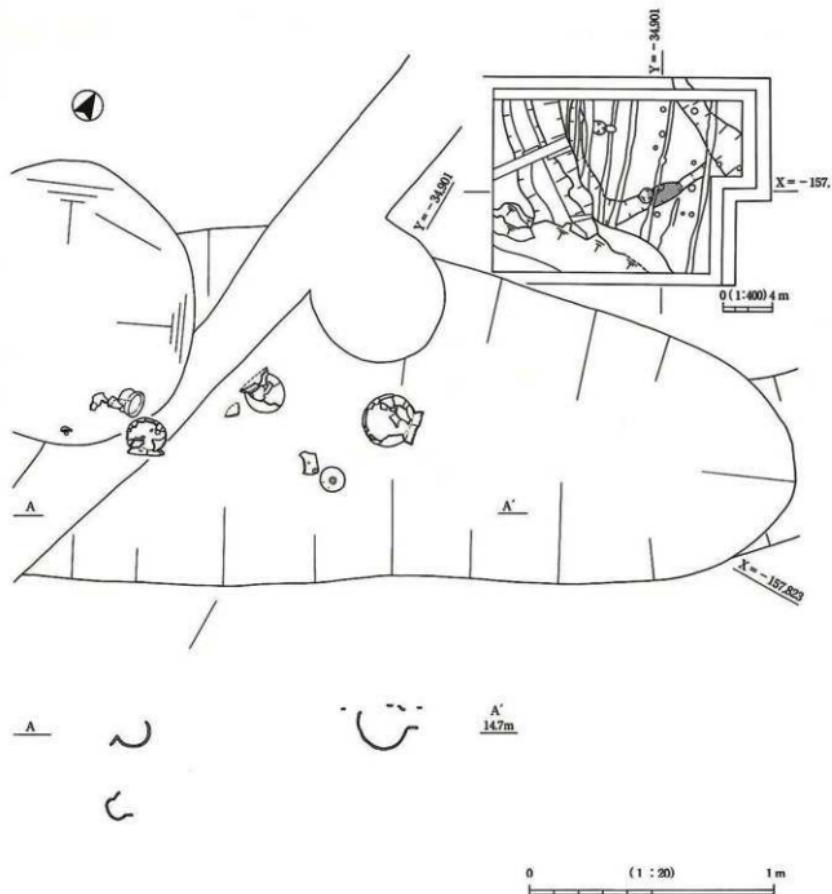


図32 96-1-5 トレンチ 第5-2面 造構186遺物出土状況図1

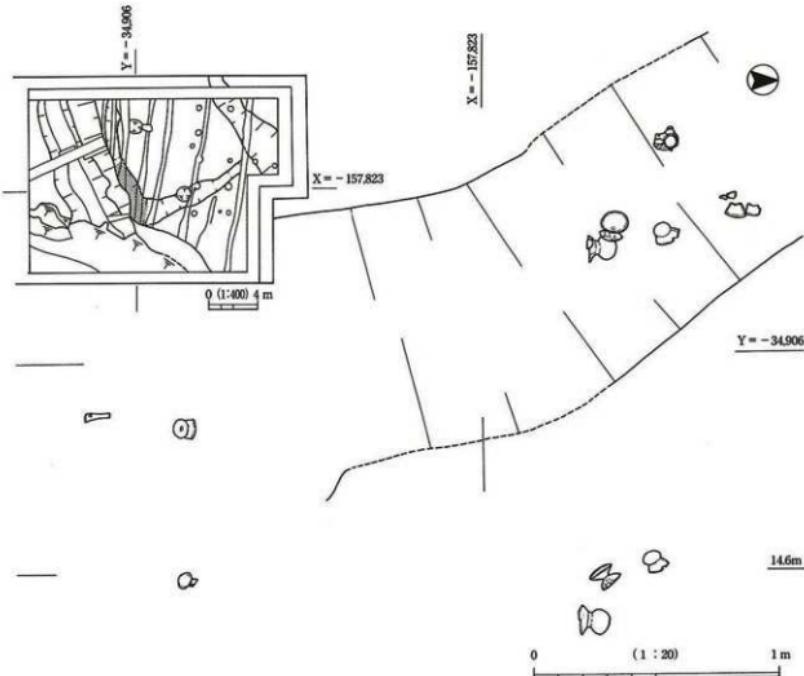


図33 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構186遺物出土状況図2

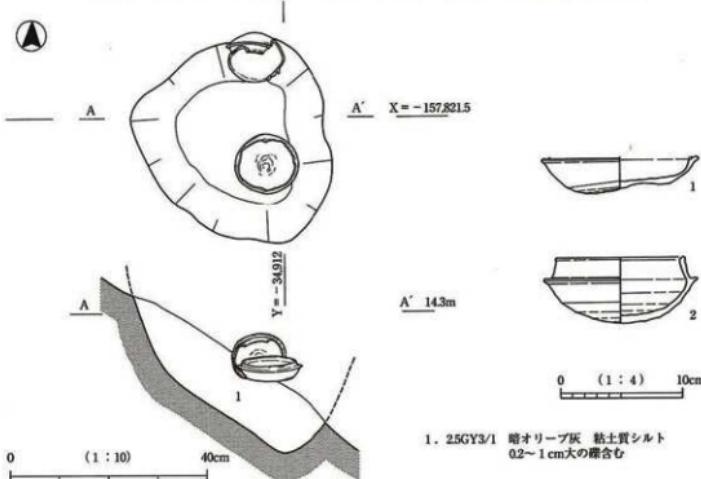


図34 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構206平・断面図、出土遺物

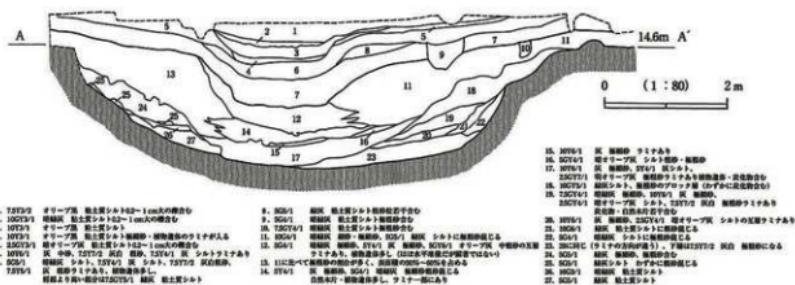
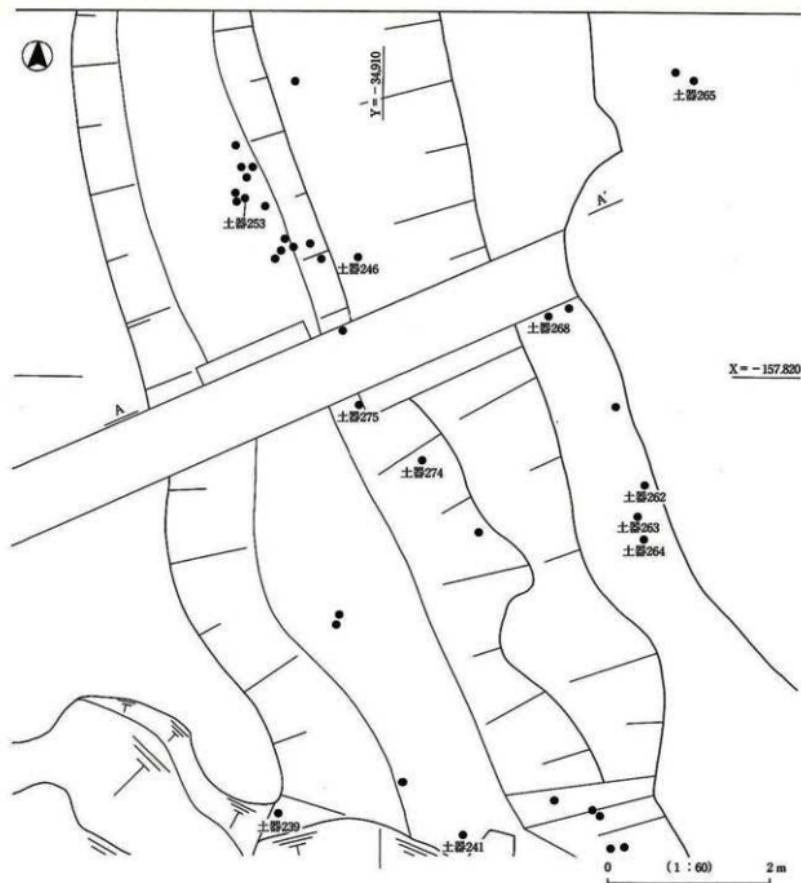


図35 96-1-5 トレチ 第5-2面 遺構207平・断面図

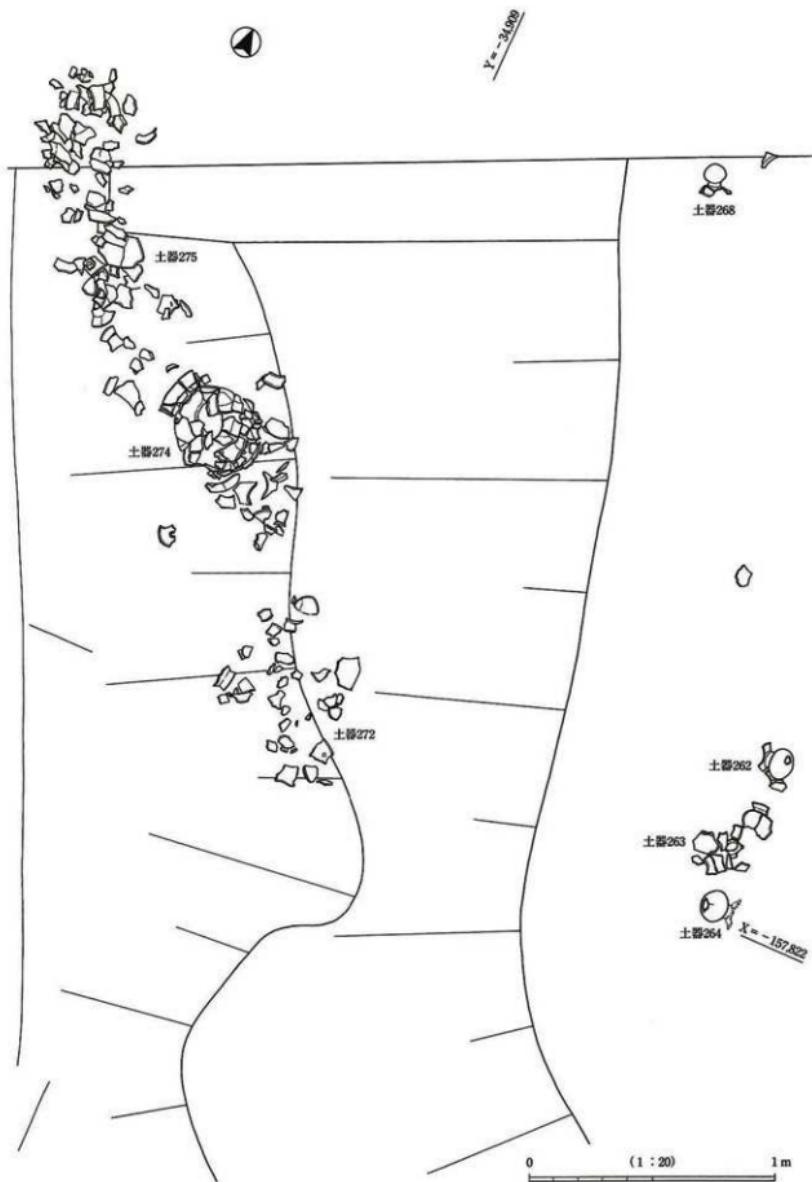


図36 96-1-5 トレンチ 第5-2面 造構207平面図

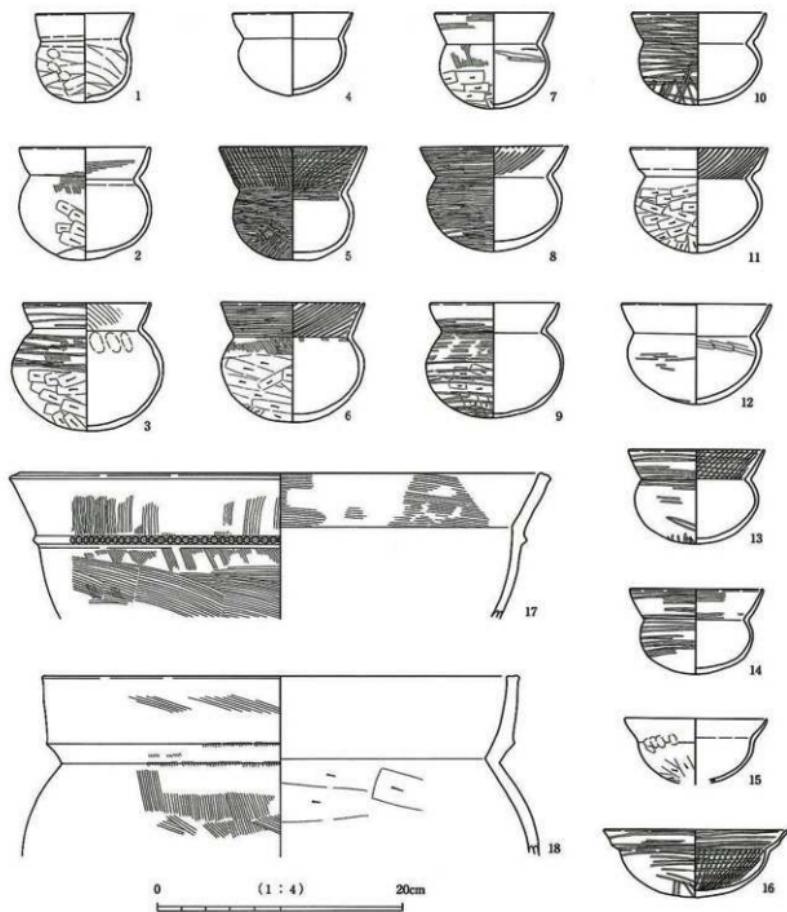


図37 96-1-1 トレンチ 第5面 造構122出土遺物1



図38 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物 2

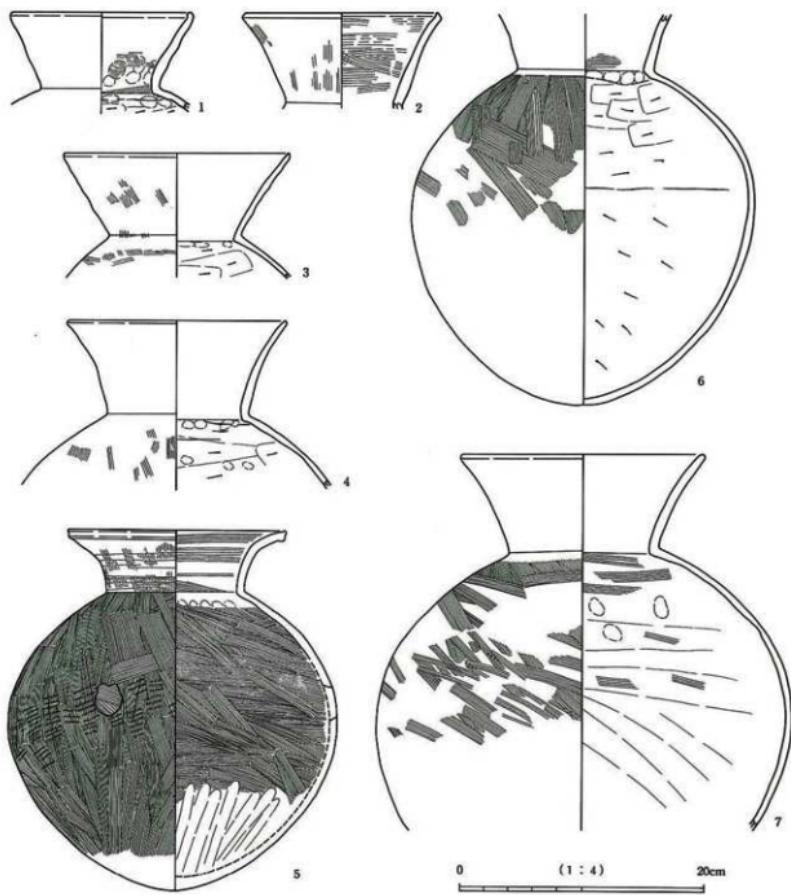


図39 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物 3

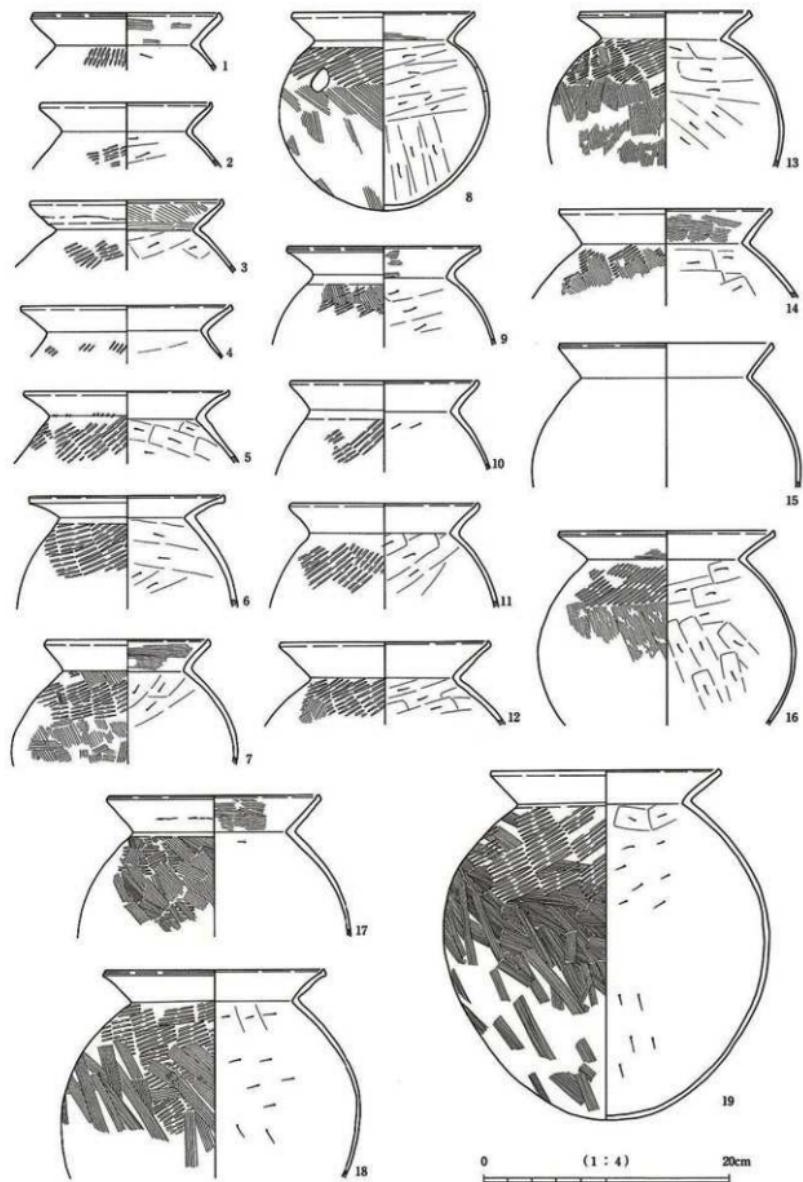


図40 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物 4

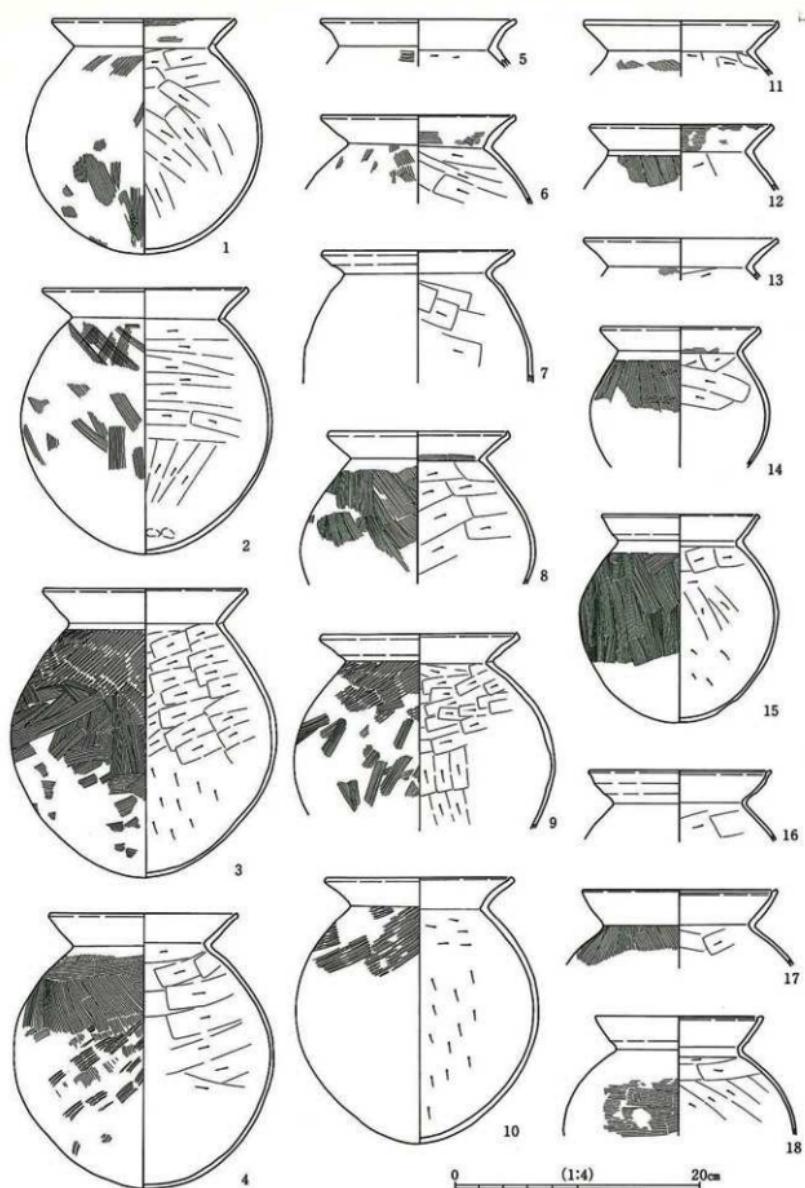


図41 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物5

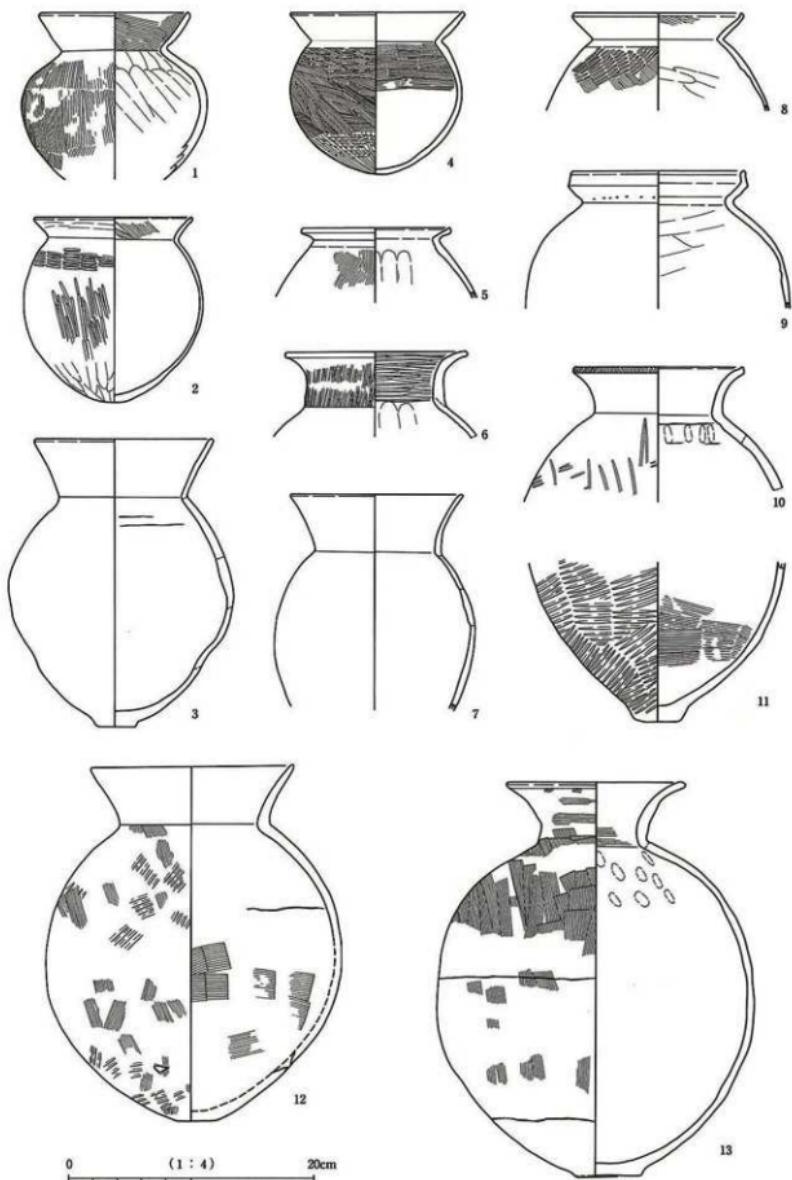


図42 96-1-1トレンチ 第5面 遺構122出土遺物 6

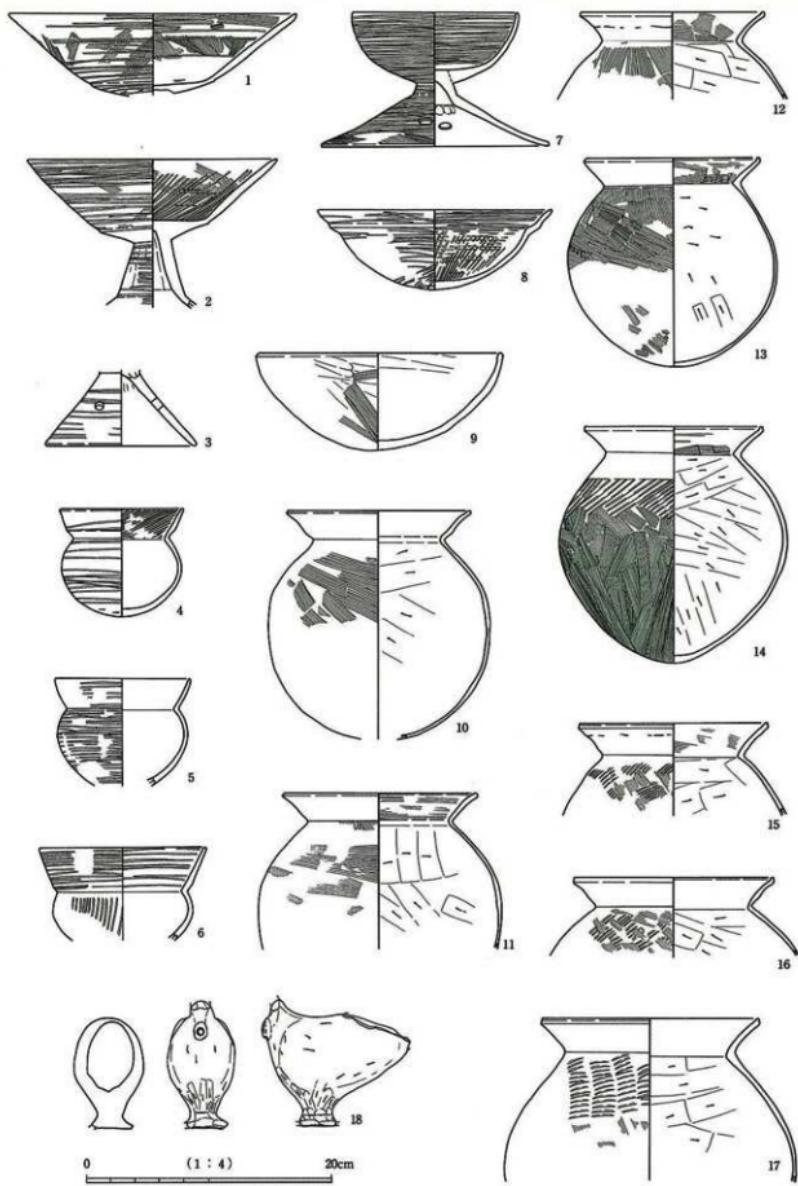


図43 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物7

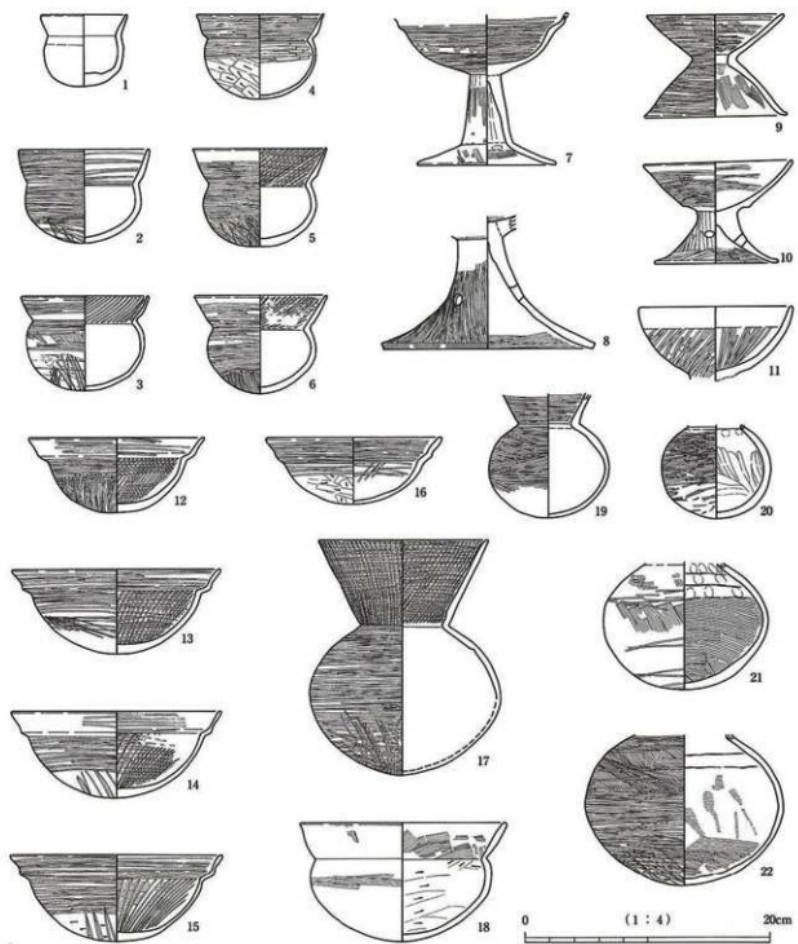


図44 96-1-1 トレンチ 第5面 造構123出土遺物1

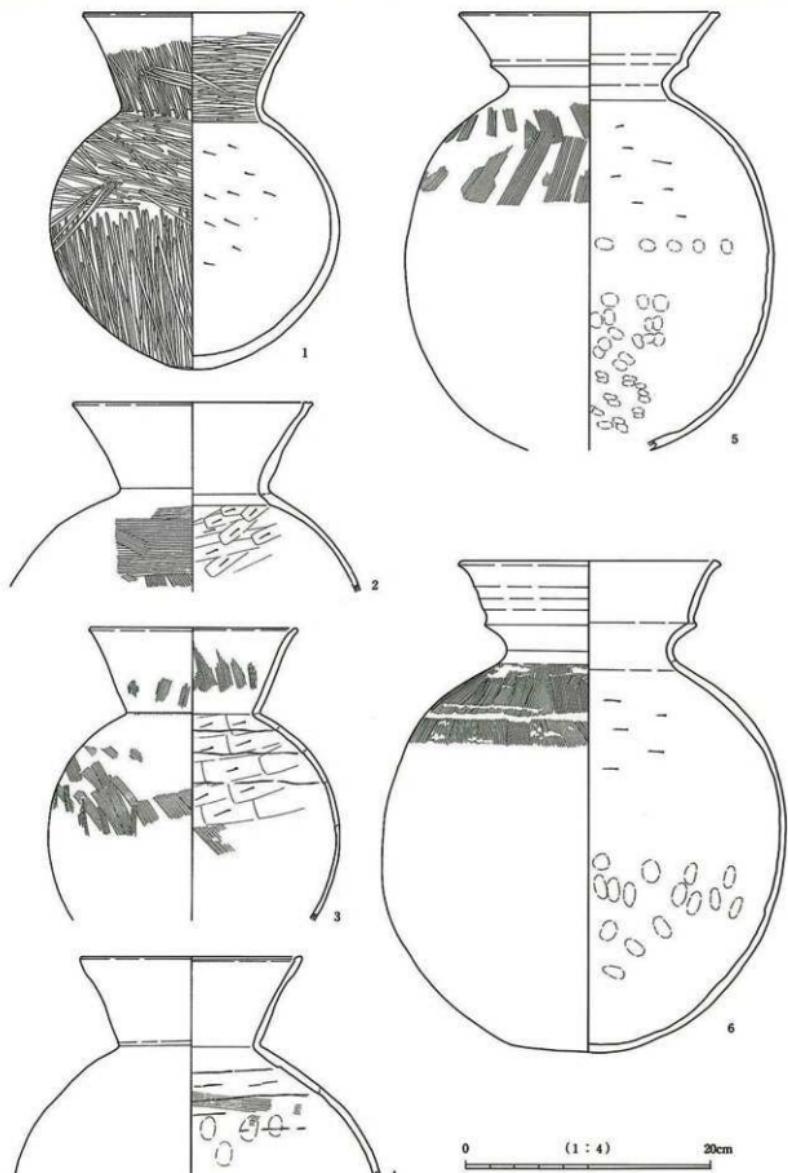


図45 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土物 2

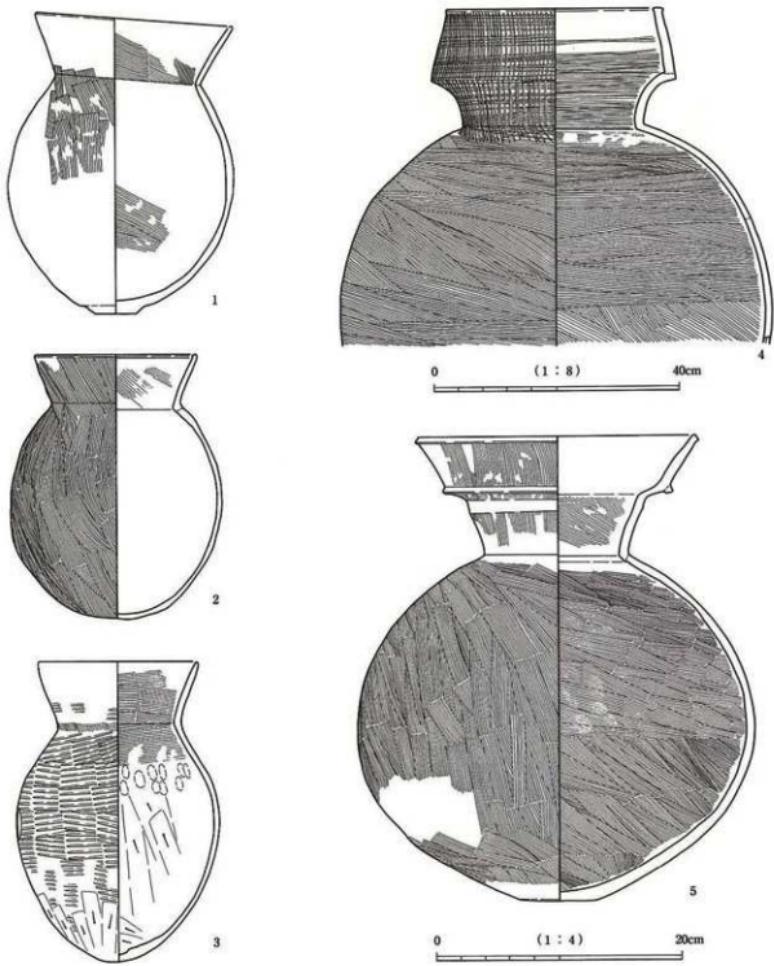


図46 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土遺物 3

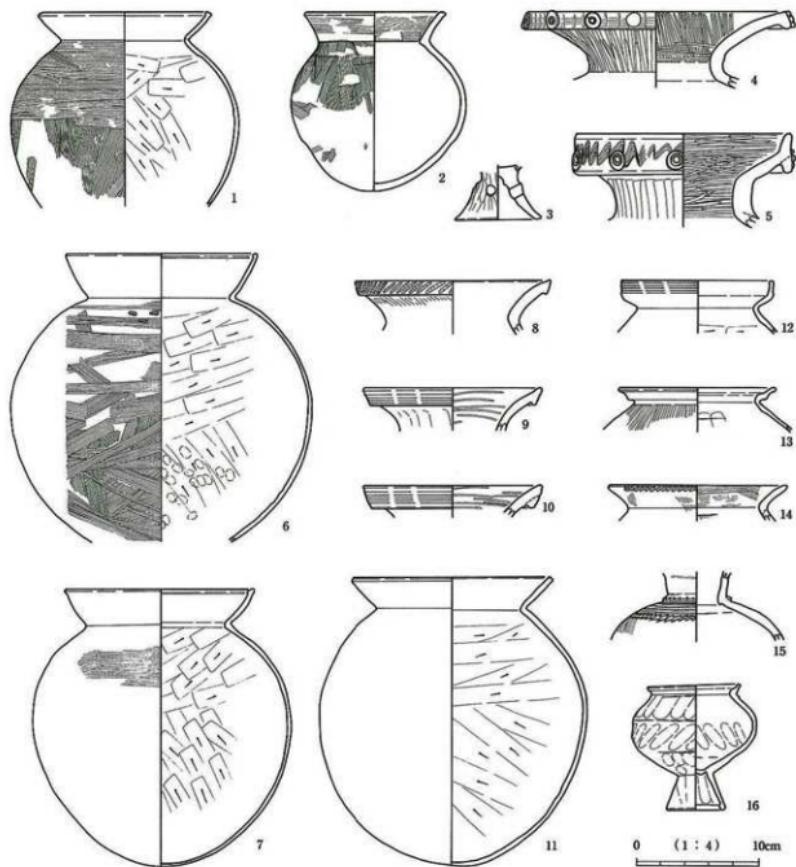


図47 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土遺物 4

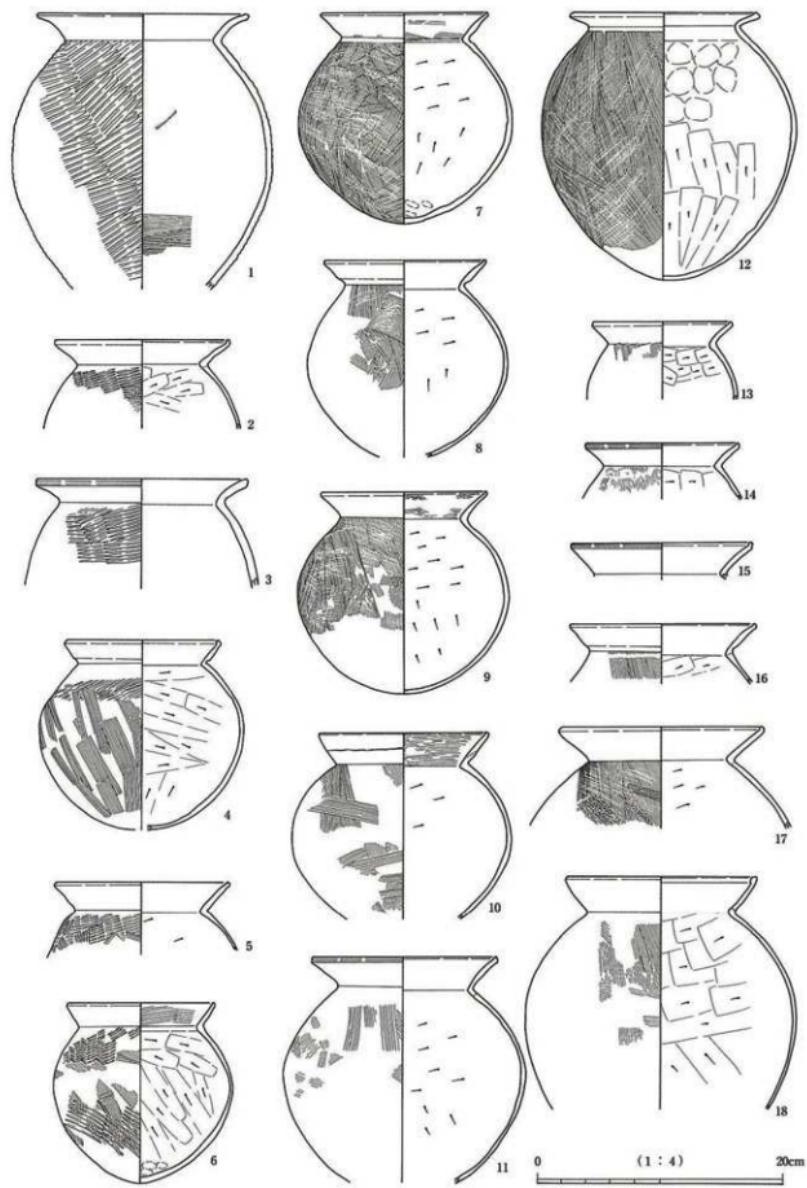


図48 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土遺物5

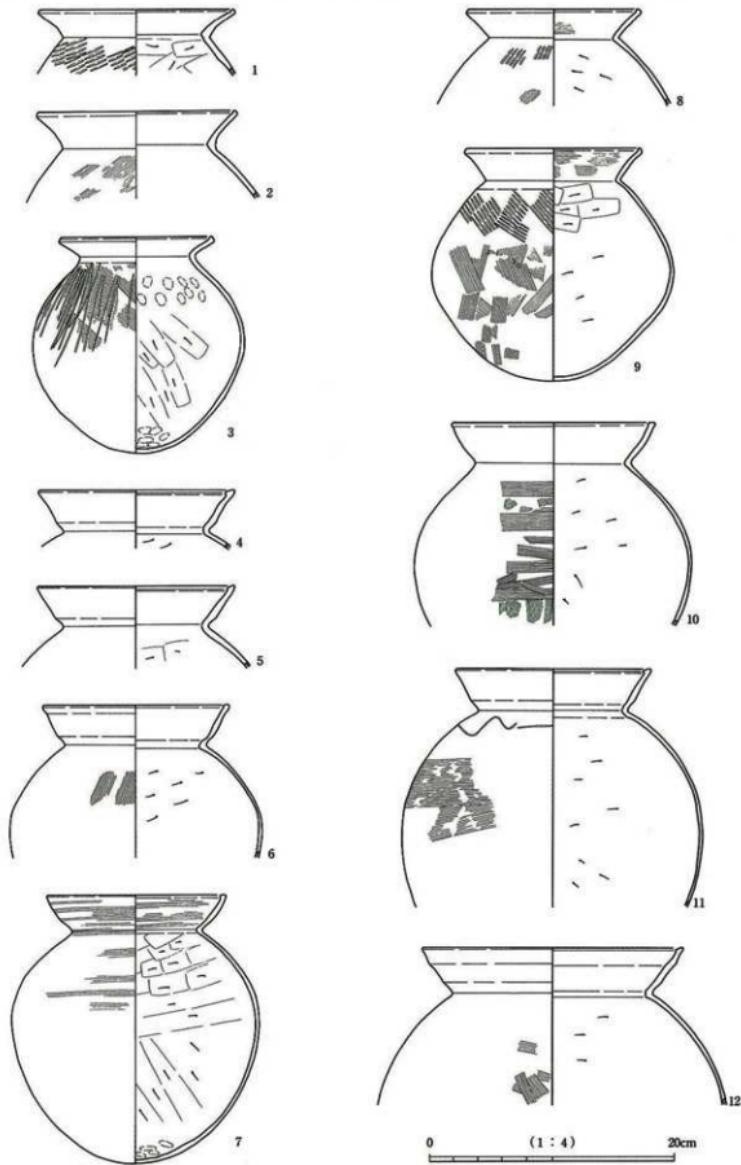


図49 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構185出土遺物 1

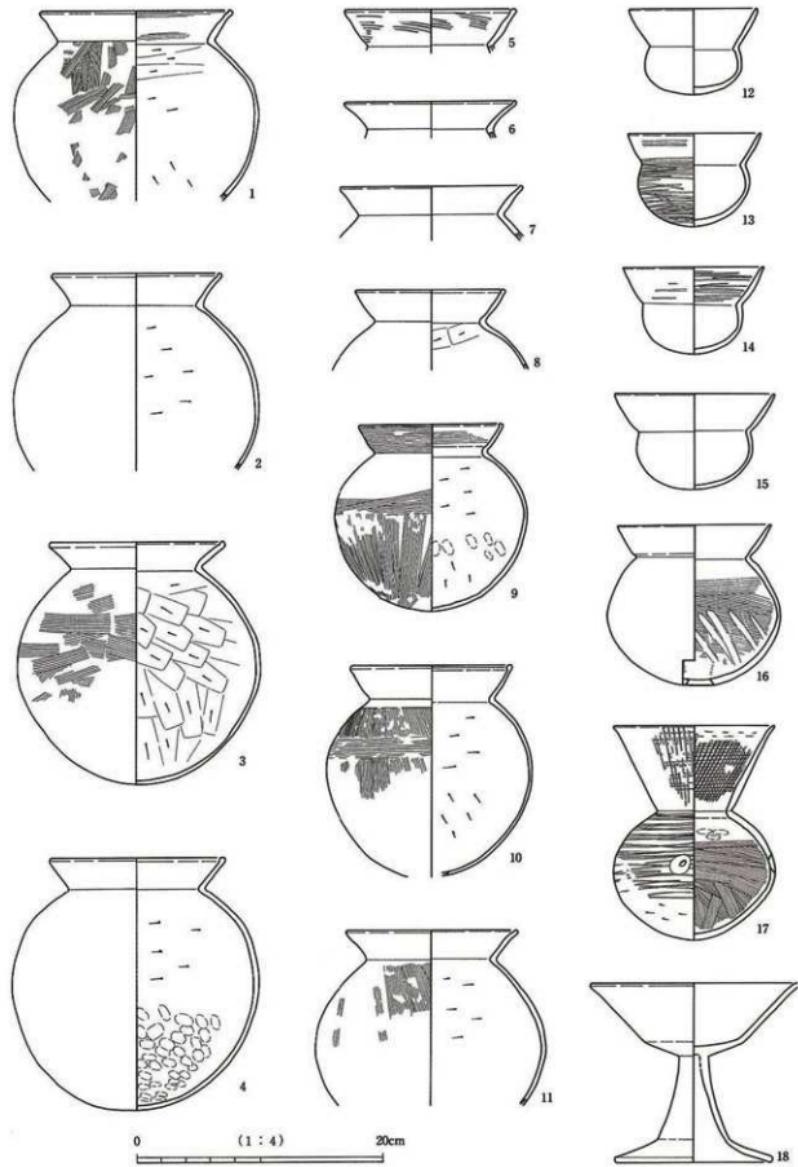


図50 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構185出土遺物2

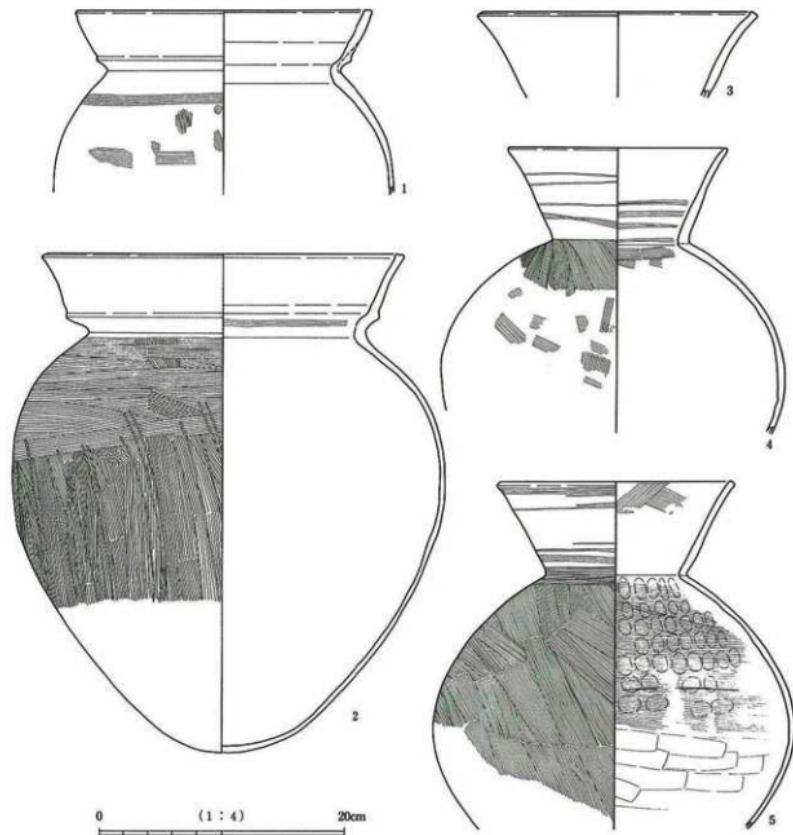


図51 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構185出土遺物 3

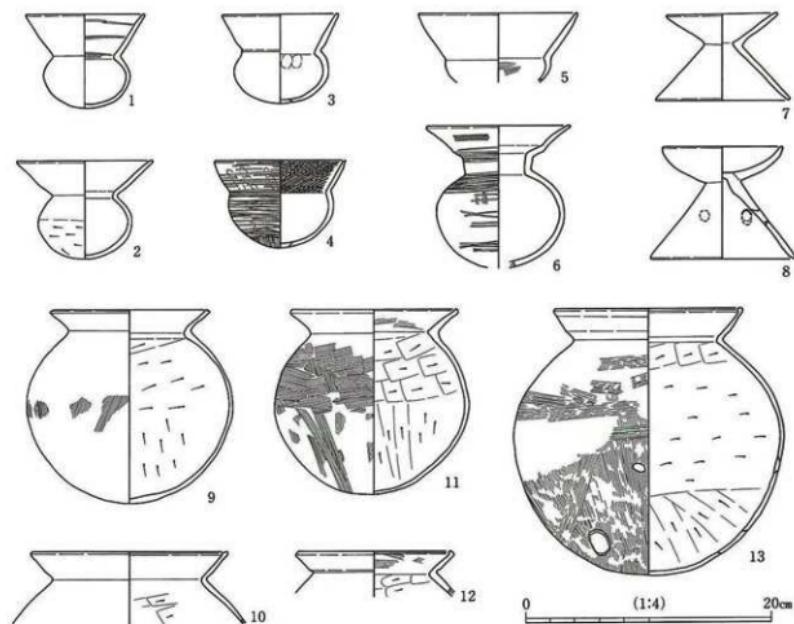


図52 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構186出土遺物

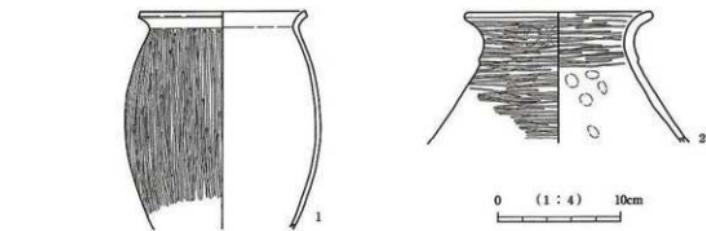


図53 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構207 (1)・208 (2) 出土遺物

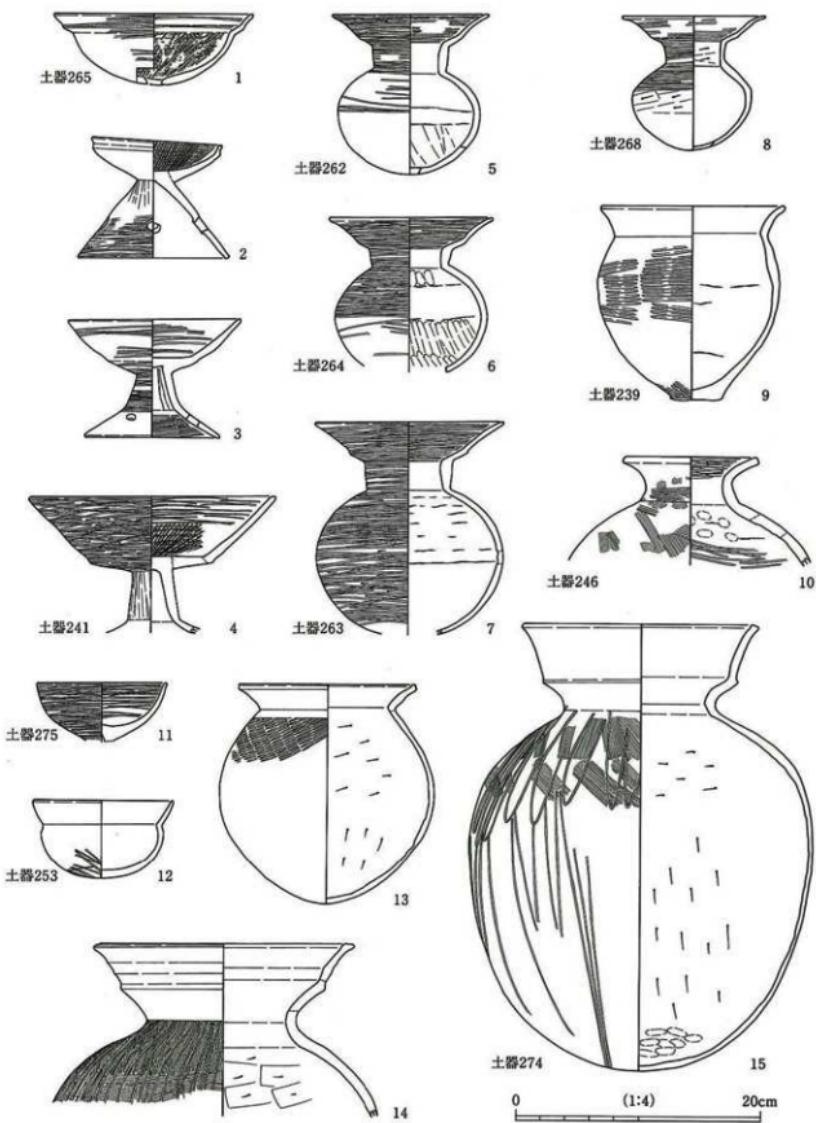


図54 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構207出土遺物

第6面・第6面ベース（図55～64、写真図版13～17）

第5面と同様に5層との間に自然堆積層がなく土壤化層が連続している。

96-1-1・2・3トレンチでは第6面で遺構は検出できず、6層を除去した第6面ベースで検出した。遺構131・141（溝）、遺構126・129・130（土坑）の他、土器が直線的に並んで出土した土器151～158・160～162がある。

96-1-5トレンチでは第6面で遺構209・210（土坑）遺構211（溝）を検出した。弥生時代中期面である。

遺構131（溝）は検出長5m、幅90cm、深さは約35cmを測る。南は遺構129（土坑）に切られている。遺物は出土しなかった。

遺構141（溝）は調査区北辺東西側溝を掘削中に検出した。側溝内に収まるため詳細は明らかではないが、残存長4m、深さ70cmを測る。肩部に平行して3点出土した遺物のうち、甕は上部から、高坏2点は中位からいずれも横位で出土した。高坏部下半には穿孔が見られる。

遺構126（土坑）は平面不整梢円形の浅い土坑である。下層では長辺95cm、短辺40cm、深さ5cm程度の梢円形となる、底面近くT.P.14.23m～14.25mでサスカイト製石礫が10点と剥片が出土した。

遺構129（土坑）は第4面遺構1（流路）肩部で検出した。平面不整梢円形で長径4m、短径2m、深さは1.1mを測る。遺物は完形に近いものが大半を占め、横位で下層から出土した。出土レベルはT.P.13m～13.4mである。62-1・2は体部下半に穿孔が見られる。

遺構130（土坑）は、遺構129の西側で検出した。南半は遺構（流路）に切られている。平面梢円形、長径約2.5m、短径1.7、深さは75cmを測る。遺物は3・4層境で土器片が出土した。

土器151～158・160～162は6層を掘削中に検出した。北端の土器151から土器162までの5点はほぼ南北方向に、土器154-1から南端の土器158は角度をえ北東から南北方向にそれぞれ並ぶ。

土器はいずれも横位の状態で出土した。土器底面のレベルは土器151（T.P.14.3m）、土器161（T.P.14.08m）、土器152（T.P.14.03m）、土器153（T.P.14.13m）、土器154-1（T.P.14.08m）、土器160（T.P.14.11m）、土器155（T.P.14.14m）、土器157-1（T.P.14.3m）、土器157-2（T.P.14.37m）、土器158（T.P.14.47m）、土器156（T.P.14.10m）、土器162（T.P.14.00m）、である。

第6層掘削中に遺物が並んで出土し、完形あるいはそれに近い状態であることから、遺構の有無を確認するために精査及び断面観察を行ったが、遺構であるという確証は得られなかつた。

遺構209・210（土坑）は東側を第5-2面遺構207（溝）に切られている。遺構209は平面不整梢円形で長径3.5m、短径2.3m、深さは約80cmを測る。埋土は5層に分層でき、遺物は最上層から広口壺が出土した。

遺構210（土坑）は深さ25cm程度の不定形な遺構である。遺物は縄文晚期の浅鉢片がT.P.13.8mで出土した。便宜的に同一遺構平面図図61に弥生中期の直口壺を示した。調査時には第6層出土遺物として認識している。土器底面レベルがT.P.14.27mと前述遺物とのレベル差は約50cmを測る。

遺構211（溝）は調査区東端で検出した。バチ形に広がる浅い溝である、深さは約15cmを測る。遺物は甕が2点出土した。

96-1-1 トレンチ第6面ベース造構141出土遺物（図58）

造構141の中層から出土した土器は図58に掲載している。58-1は壺で、胴部外面が縱方向の、胴部内面下半が縱方向、上半が横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。

58-2は垂下する口縁形態の高壺である。口縁部は内外面とも横方向の、坏・脚部外面は縱方向の、坏部内面は放射状後下半部のみ横方向のヘラミガキ調整によって仕上げられている。脚部内面中位には横方向にはヘラケズリ調整が行なわれている。58-3は、坏部が楕形で、脚部が柱状部から明確に屈曲して裾部が広がる形態の高壺である。坏部内外面とも、放射状後上位のみ横方向のヘラミガキ調整、脚部外面は縱方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。脚裾部内面にはハケ調整痕が残存している。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。図示した3点の当造構出土土器は、いずれも弥生時代中期中葉後半の所産と考えることができる。

96-1-1 トレンチ第6面ベース造構129出土遺物（図62）

造構129から出土した土器群は、図62に掲載している。62-1,4は、胴部下位に屈曲部をもち、口縁部を垂下させて端面を形成する形態の広口壺である。いずれも、口縁端面・頸～胴部外面に櫛描簾状文を施している。62-4では外面の櫛描文帯の最下段に扇形文を施している。いずれも、胴中～下位外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。いずれも、角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。

62-5も頸部の長い広口壺で、頸部～胴部上半外面に直線文・簾状文を施している。簾状文2帯は胴～頸部の境界に配されている。胴中～下位外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。

62-2,3は無文の広口壺である。62-2は胴部外面がハケ調整された後、下半部のみヘラケズリ調整が行なわれている。62-3は、胴～頸部外面がヘラミガキ調整で仕上げられている。これら造構129出土土器群は中期中葉の所産と考えられる。

96-1-5 トレンチ第6面造構209,211出土遺物（図63）

造構209からは63-1,3が出土している。63-3は、口縁部が稜をもちながら外反気味に直立する形態の浅鉢である。体部下半外面はヘラケズリ調整、口縁部外面と内面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。繩文時代晩期後半、口酒井式段階の浅鉢と考えられる。63-1は、算盤玉形の胴部に長い頸部をもつ広口壺で、垂下した口縁端部に波状に刻目を施している。頸～胴部上半外面には櫛描直線文・扇形文が施されており、各櫛描文帯間隔にはヘラミガキ調整が施されている。胴部下半外面および口縁部内面にもヘラミガキ調整が行なわれている。形態・文様構成から弥生時代中期中葉前半の所産と考えられる。

造構211からは63-2,4が出土している。いずれも、短く側方に延び端面を形成する形態の口縁部をもつ壺で、63-2は中型品、63-4は大型品である。体部外面は主に縱方向のヘラミガキ調整、口縁部～体部内面は横～斜め方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。2点とも、弥生中期中葉前半の所産と考えられる。

66-2は小型の直口壺で、第6面からの出土品である。頸部～胴部上半には櫛描直線文が連続的に施され、最下段には櫛描波状文が配されている。弥生中期中葉前半の所産と考えられる。

96-1-1 トレンチ第6面ベース造構126出土石器（図67）

造構126から出土した石器は、図67に掲載している。いずれもサヌカイト製の打製石器である。67-

1,2は有茎式石鎚で、いずれも基部は欠損している。67-1は作用部が正三角形に近い形状で、67-2は作用部が継長で全体に平面が菱形に近い形態である。どちらも、片面に主要剥離面が残存し、断面形態はレンズ形である。67-3,4,5,6,7,8は平面柳葉形の石鎚である。67-3,4,5,7は基部が欠損していて全体形態は不明である。67-3,4,5の小型品では、全面に調整剥離が及んでいる。一方、67-6,7,8のやや大きめの柳葉形石鎚は側縁に調整剥離を行うものの、片面には主要剥離面が残存している。特に、67-6は非常に薄く、湾曲した剥片を用いて製作されている。67-9は、長さ約2.9cm、幅約1.7cmと大型の平基式石鎚である。両面とも側縁に調整剥離を行うものの、主要剥離面が残存している。断面も平たい形状で、薄い剥片を用いて製作されたと考えられる。67-10は両側に小突起を持つ形状のサヌカイト製刀器である。先端部や基部が欠損しているため定かではないが、奈良盆地の弥生時代打製石器に一般的な「石小刀」に類似した形態のものと考えられる。ただし、現状での残存部分の形態からは、定型的な石小刀のように全体に湾曲した形状になるとは考えにくい。直線的に延びる尖頭器上の体部の左右に小突起を作り出す形態であったと推定できる。以上の打製石器はいずれも弥生時代中期後半の所産と考えられる。

96-1-1 トレナンチ第6面ベース出土土器（図65・66）

第6面ベース・6層からは多量の弥生中期土器が出土しており、図65・66に掲載している。65-9は、長頸の広口壺で頸～胴上半部外面に櫛描直線文を連続的に施し、一部に縦方向に櫛描直線文を施す。口縁部は小さく垂下し、端部に刻み目が施されている。胴部下半外面は斜め方向のヘラミガキ調整で仕上げられる。弥生中期中葉前半の所産と考えられる。65-10は、口縁端部を上下に拡張する形態の広口壺で、口縁端面に櫛描簾状文、胴～頸部には櫛描簾状文と最下段に波状文、口縁部内面に櫛描列点文が施されている。胴部下半外面はヘラミガキ調整で仕上げられている。弥生中期中葉後半の所産と考えられる。

65-1,2,3,8,66-6は口縁部を垂下させて端面を形成し、胴部最大径を著しく下位に持つ形態の広口壺である。65-1,2は頸部が細くしまり、65-3,8,66-6は頸部が太い形態である。いずれも、口縁部・胴～頸部に櫛描簾状文を中心に施文され、櫛描文帯間と胴部下半外面ヘラミガキ調整で仕上げられている。66-6は胴部が球形に近く、それ以外では最大径部位で胴部が明確に屈曲している。前者では扇状文が最下段に配されることから弥生中期中葉前半、後者は櫛描文原体幅が広く円形浮文などを貼付することから弥生中期中葉後半の所産と考えられる。いずれも、角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。

65-5,6,7,66-10,14,15は無文の広口壺である。65-7は長頸で、頸部・胴部下半外面は縦方向の、胴部中位は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。66-10, 65-5,6は頸部の短いタイプで、内外面とともにヘラミガキ調整で仕上げられる。いずれも、弥生時代中期前葉の所産と考えられる。

65-4は、大型の細頸壺である。頸～口縁部しか残存していないが、口縁部付近は櫛描列点文と円形浮文、頸部には簾状文が施されている。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。その他の壺類では、頸部以上が欠失した66-16があり、胴部上半に櫛描流水文が施されている。流水文は縦形に展開するもので、弥生時代中期中～後葉に位置付けられる文様構成である。胴部中～下位にはヘラミガキ調整が行なわれている。

66-2,13は水差形土器である。66-2は、頸部～胴部上半に櫛描直線文と列点文が施され、胴部中～下位にはヘラミガキ調整が施されている。66-13は、胴部最大径を著しく下位にもつ器形で、頸部が

列点文、胸部が簾状文により加飾が行なわれている。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。いずれも、弥生時代中期中葉後半に位置付けられる。

66-1は口縁端部に上方を向いた面をもつ高坏である。外面全体と坏部内面にヘラミガキ調整を施している。66-7は、口縁部が緩やかに外反する形態の壺である。内外面は、ヘラミガキ調整で仕上げられている。66-11は、上面に平面橢円形の突起が多数貼付された蓋である。中央部分の突起は特に大きく、つまみの機能を持っていたと思われる。明確な時期は不明であるが、弥生時代前期～中期前葉の所産と考えられる。また、66-17は、綱長の袋形の小型土器で、いわゆる「瓢形土器」と呼ばれるものである。斜めにカットされた口縁部の直下に小さな円孔が穿たれている。外面上半には横型の櫛描流水文が施されている。流水文の手法から、弥生時代中期前葉の所産と考えられる。

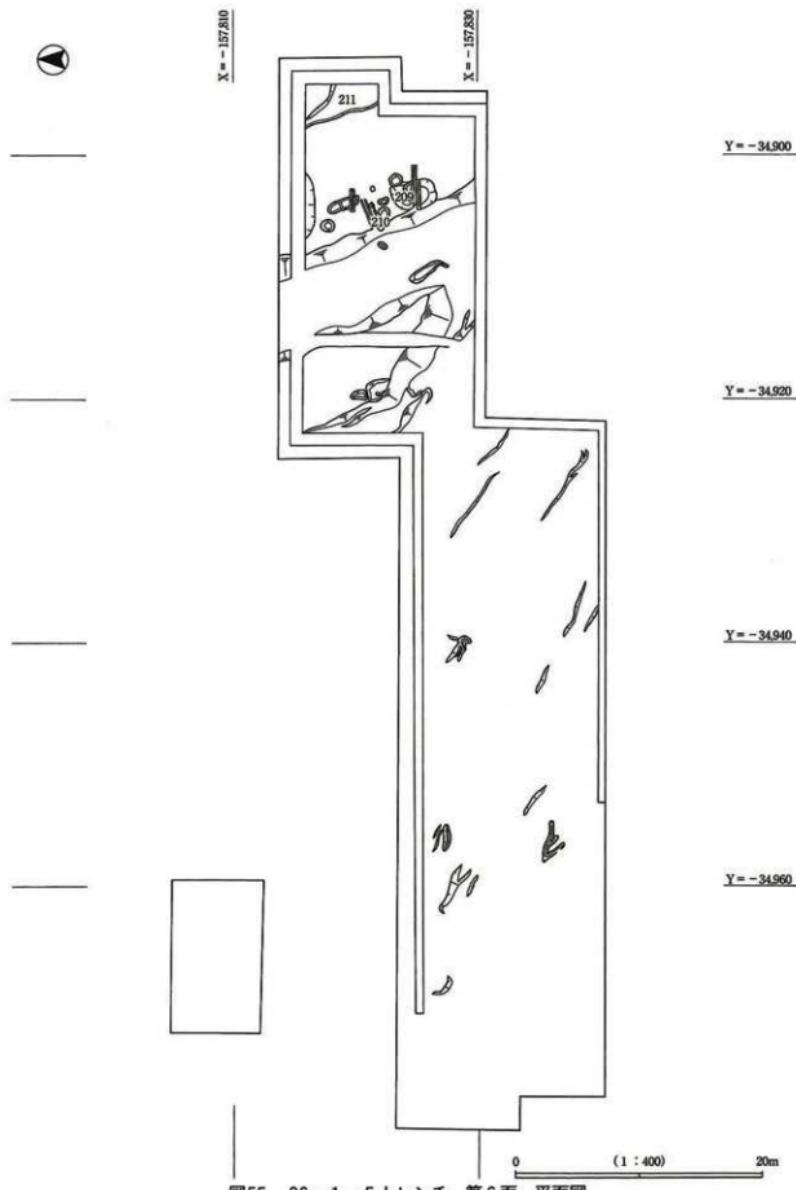


図55 96-1-5 トレンチ 第6面 平面図

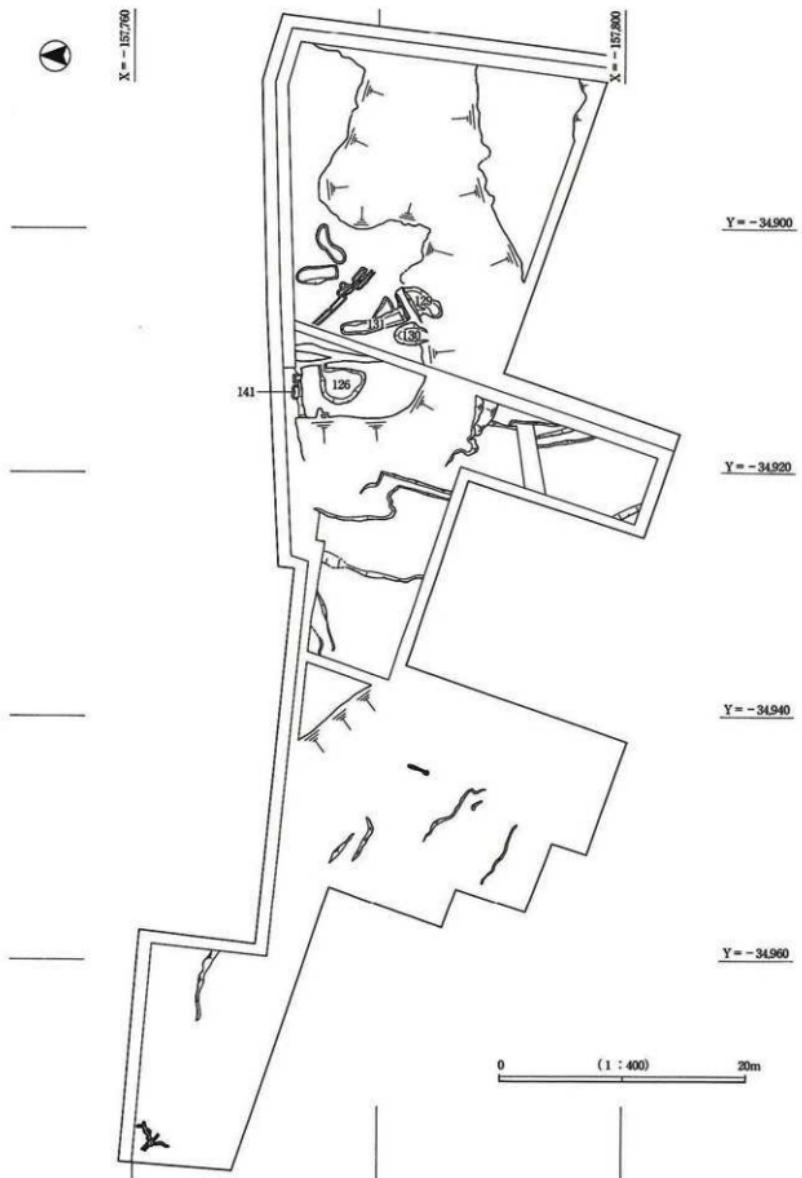


図56 96-1-1・2・3 トレンチ 第6面ベース 平面図

1. 1996年1月1日、第6面ベースの発掘調査
2. 1996年1月1日、第6面ベースの発掘調査

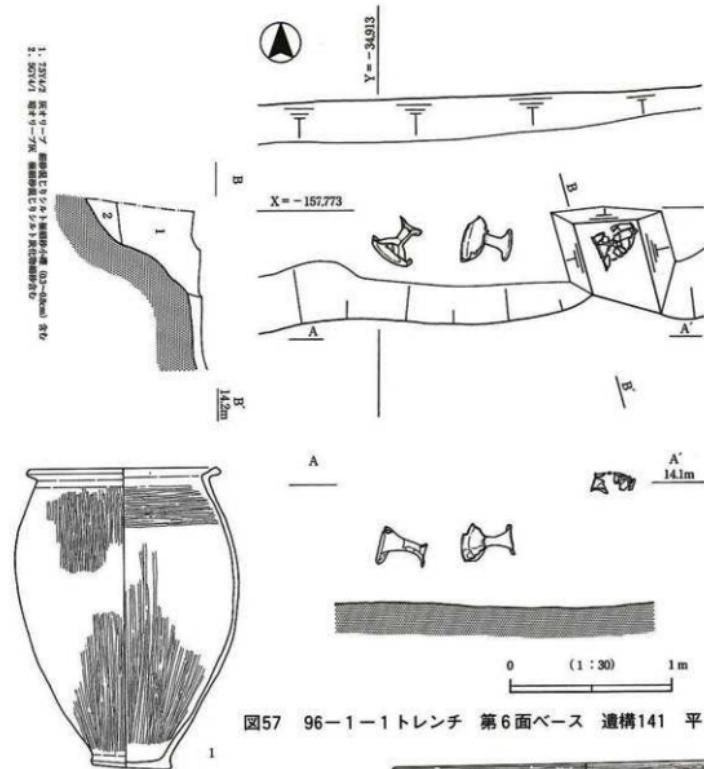


図57 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 発構141 平・断面図

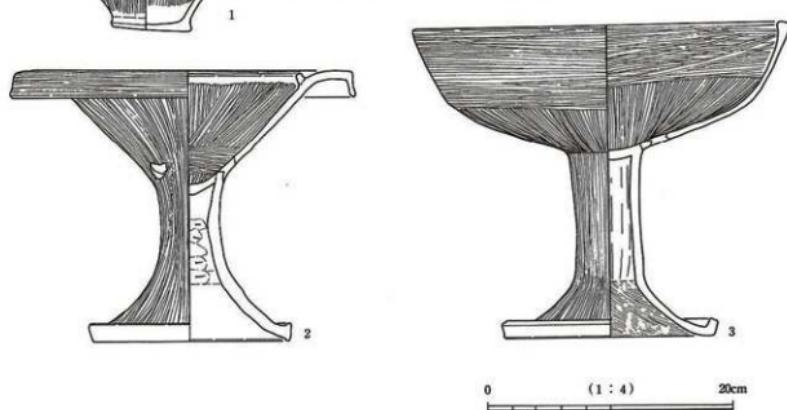
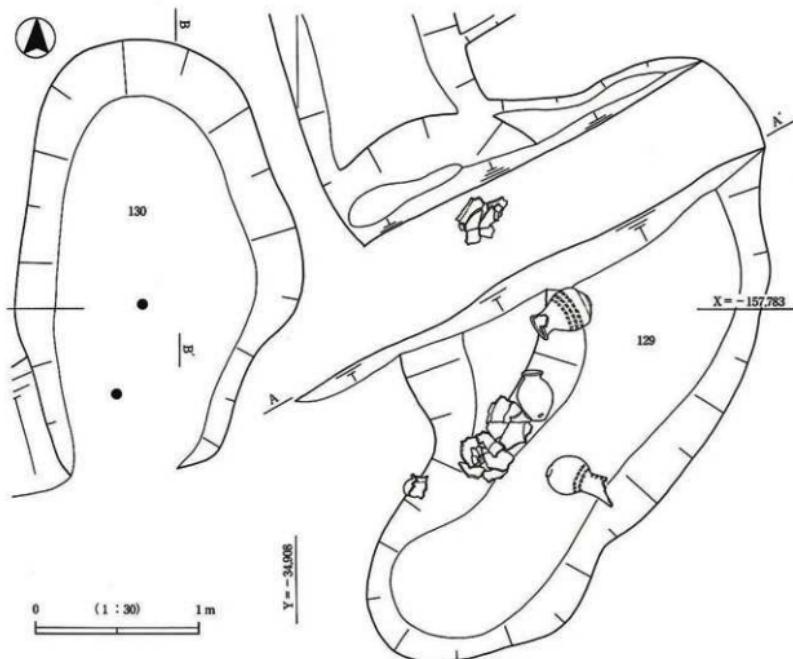


図58 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 発構141 出土遺物



造構129
 1. 10Y4/1 明暗斑
粘土質シルト
 2. 10G7Y5/1 線隙
粘土質シルト
 3. 2ZG7Y5/1 オリーブ灰
細砂
 2ZG7Y5/1 塗モリーフ灰
粗粒じり粘土質シルト
 10Y5/2 オリーブ灰
粗粒砂

造構130
 1. 10Y4/2 オリーブ灰
細砂混じりシルト
 2. 2ZG7Y5/2 塗モリーフ灰
粗粒じり粘土質シルト
 3. 2ZG7Y5/2 塗モリーフ灰
中砂シルトブロック混じる
 4. 10Y4/2 オリーブ灰
粗粒砂

図59 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 造構129・130 平・断面図

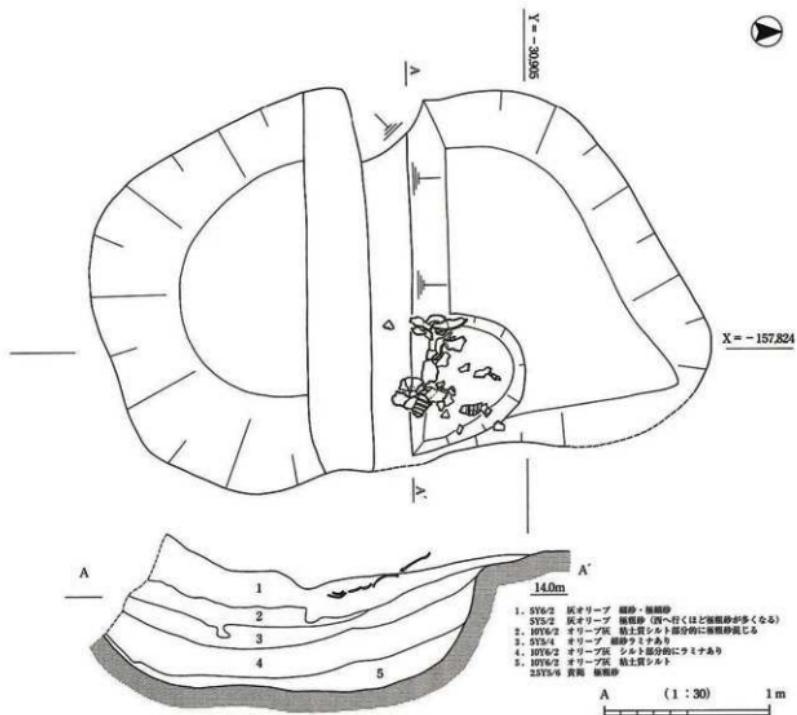


図60 96-1-5 トレンチ 第6面 遺構209平・断面図

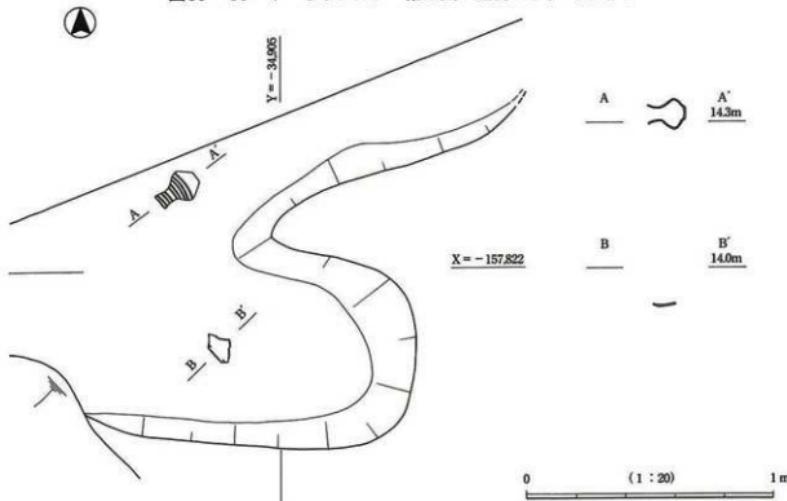


図61 96-1-5 トレンチ 第6面 遺構210平・断面図



図64 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 土器151~158、160~162出土状況

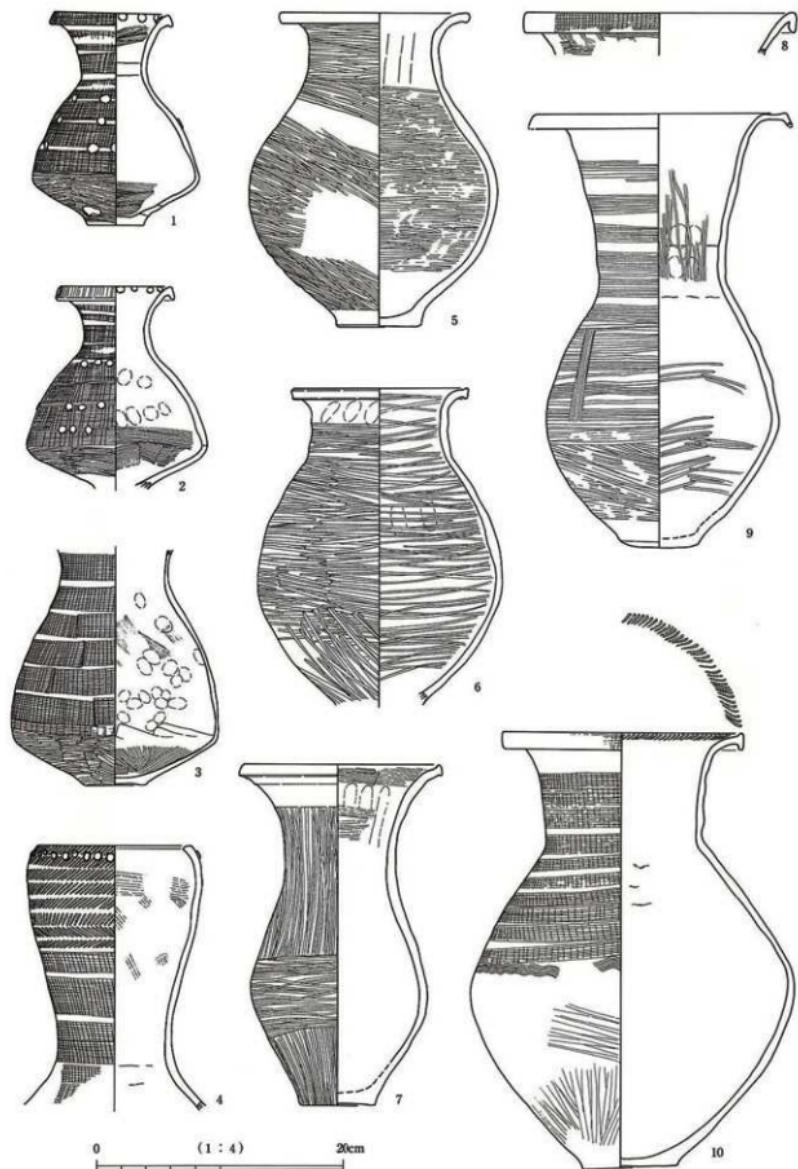


図65 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 土器 151・152・154-1・154-2・155・157-1・157-3・160・161・162

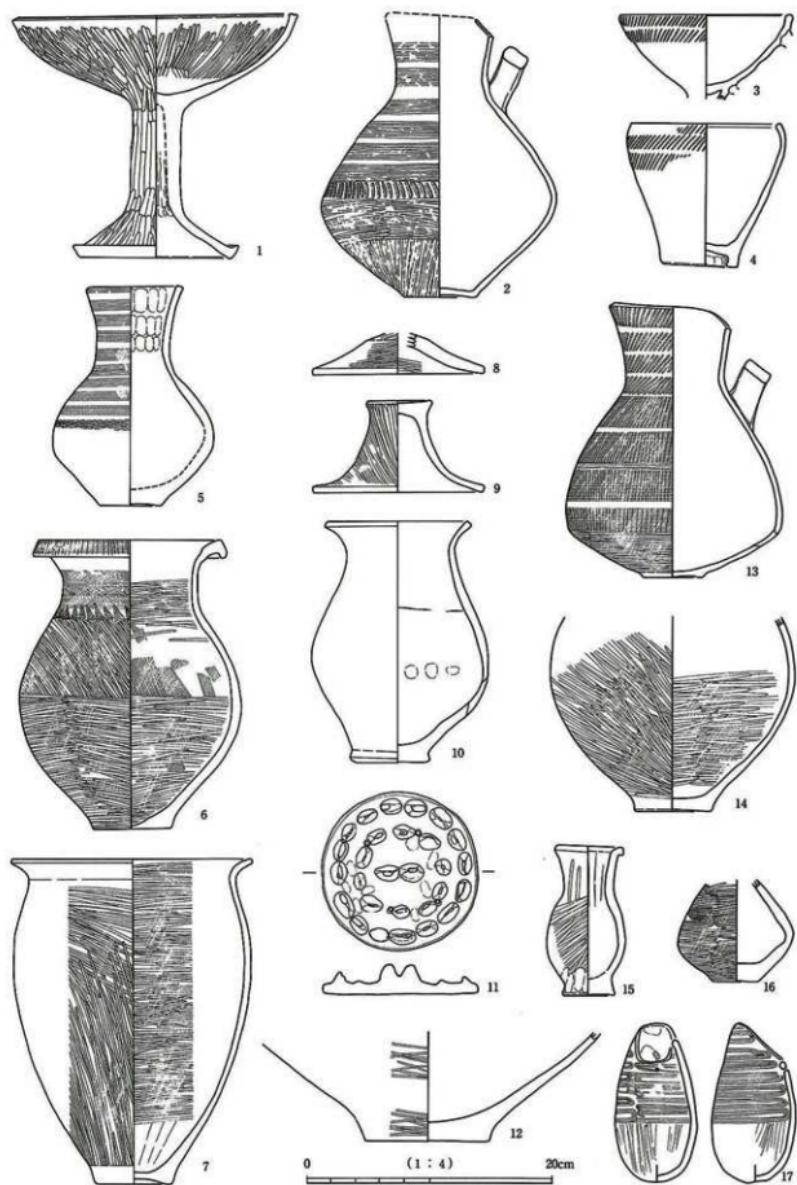


図66 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 土器 153(4)・156(1)・157-2(3)・158(2)・6層
土器 279(5)・6面ベース (6~17) 出土遺物

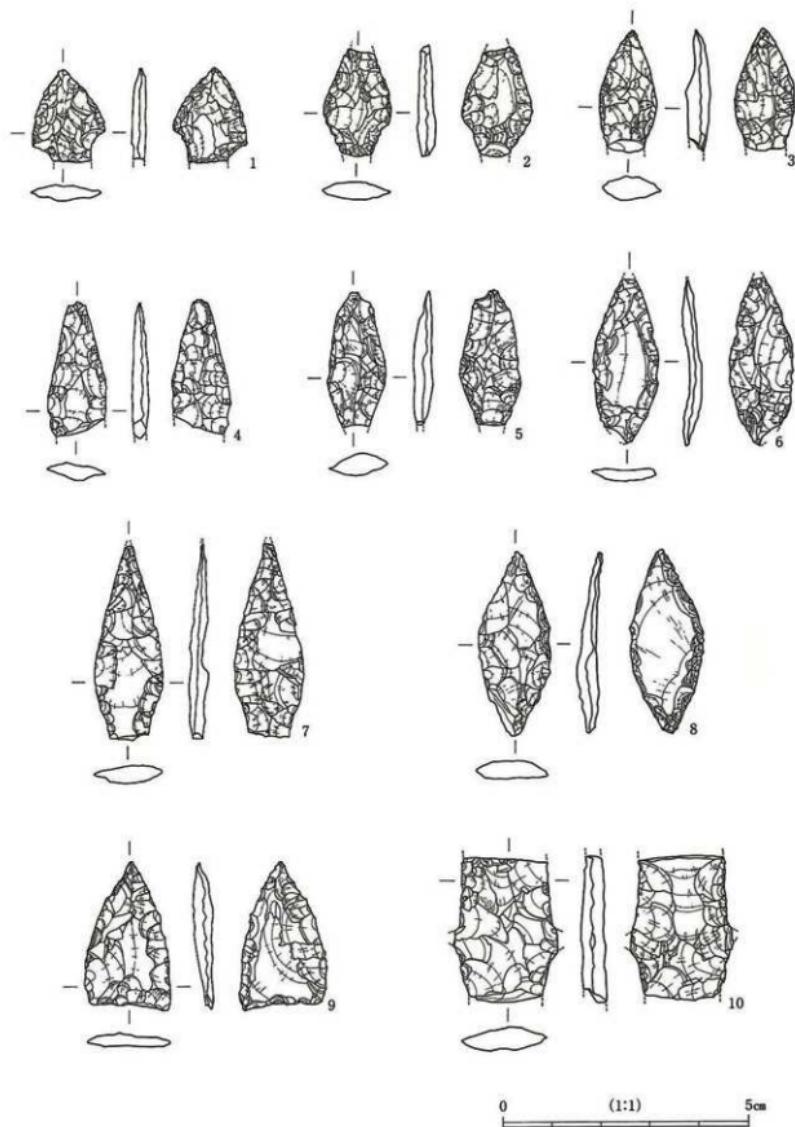


図67 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 遺構126出土石器

第7面（図68・69、写真図版17）

第7面・7面ベースで遺構は検出できなかった。7面の標高はT.P.14m前後である。7層は層厚10cm程度で炭化物を少量含むオリーブ黒粘土質シルトである。遺物は7面ベース層である極細粒砂から縄文晩期の土器が3点出土した。

96-1-5 トレンチ第7面ベース7b層出土遺物（図69）

7b層から出土した土器は図69に掲載している。69-1,2は浅鉢の破片である。69-1は底部片で、端部が左右につまみ出されたような形態である。胴下半部にかけて縱方向のヘラケズリ調整で仕上げられている。69-2は、胴中位～口縁部片である。屈曲して外反気味に立ち上がる口縁形態で、端部直下に断面3角形の突帯文を貼付している。外面は、屈曲部より下位がヘラケズリ調整、上位がナデ調整で仕上げられている。2点とも縄文晩期船橋式に位置付けられる浅鉢である。

69-3は、2条突帯を貼付した深鉢である。口縁部は胴上位の突帯部で屈曲して内傾し、やや外反気味に直立する形態である。口縁部の2～3mm下に突帯文を貼付している。突帯は2条とも、「D」字形の刻み目を施している。形態、突帯文の特徴などから、縄文晩期船橋式に位置付けられる深鉢である。

第8面・8面ベース（図70～72）

96-1-1 トレンチでは第8面で落ち込み・流路、第8面ベースで土坑を検出した。96-1-4・5 トレンチで遺構は検出できなかった。

落ち込みは調査区中央で検出した。東は第4面遺構1に切られ、北は調査区外となる。平面円形で検出長7m、深さは約10cmを測る。

流路は調査区東端で南東から北西方向に走る左岸部を検出した。検出幅22m、深さは1.5mを測る。埋土はラミナがみられる細粒砂・極細粒砂である。

第8面ベースでは調査区中央を中心として土坑を5基検出した。いずれも平面形は不定形である、深さは5～10cm程度である。埋土は8a層の灰オリーブ細砂混じりシルトである。

第9面・9面ベース、10面、11面（図73～77）

96-1-5 トレンチ9面ベースで遺構215（溝）を1条検出した他に遺構・遺物は検出できなかった。

遺構215（溝）は調査区北端で検出した。検出長3.5m、幅50cm、深さ20cmを測る。埋土は9a層であるオリーブ黒極細粒砂混じり粘土である。

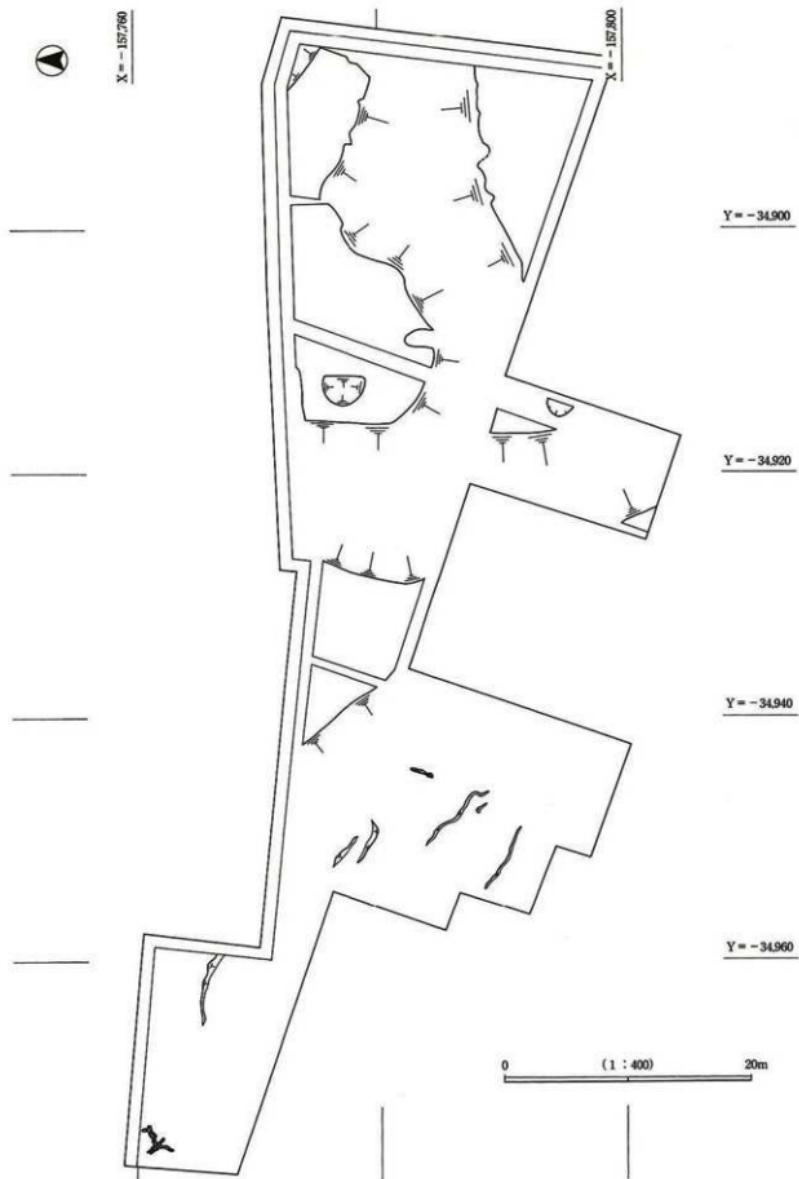


図68 96-1-1・2・3 トレンチ 第7面ベース 平面図

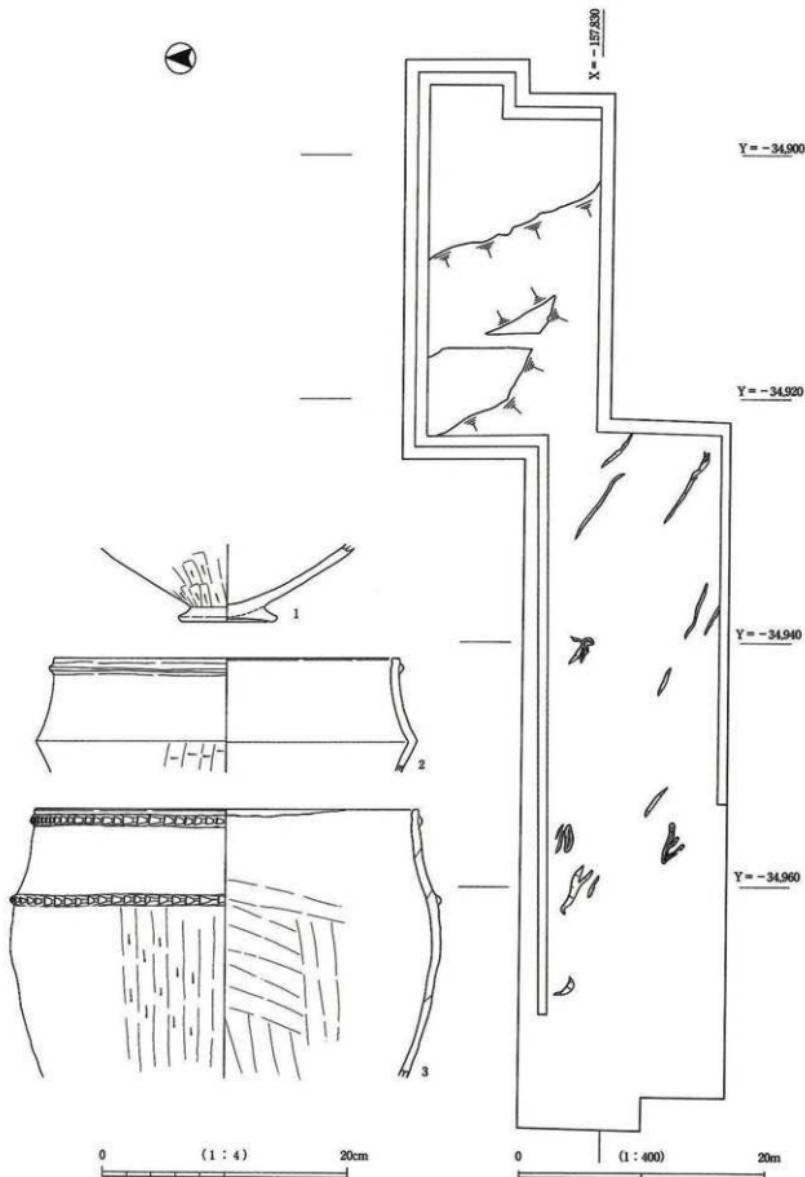


図69 96-1-5 トレンチ 第7面ベース 平面図・7b層出土遺物

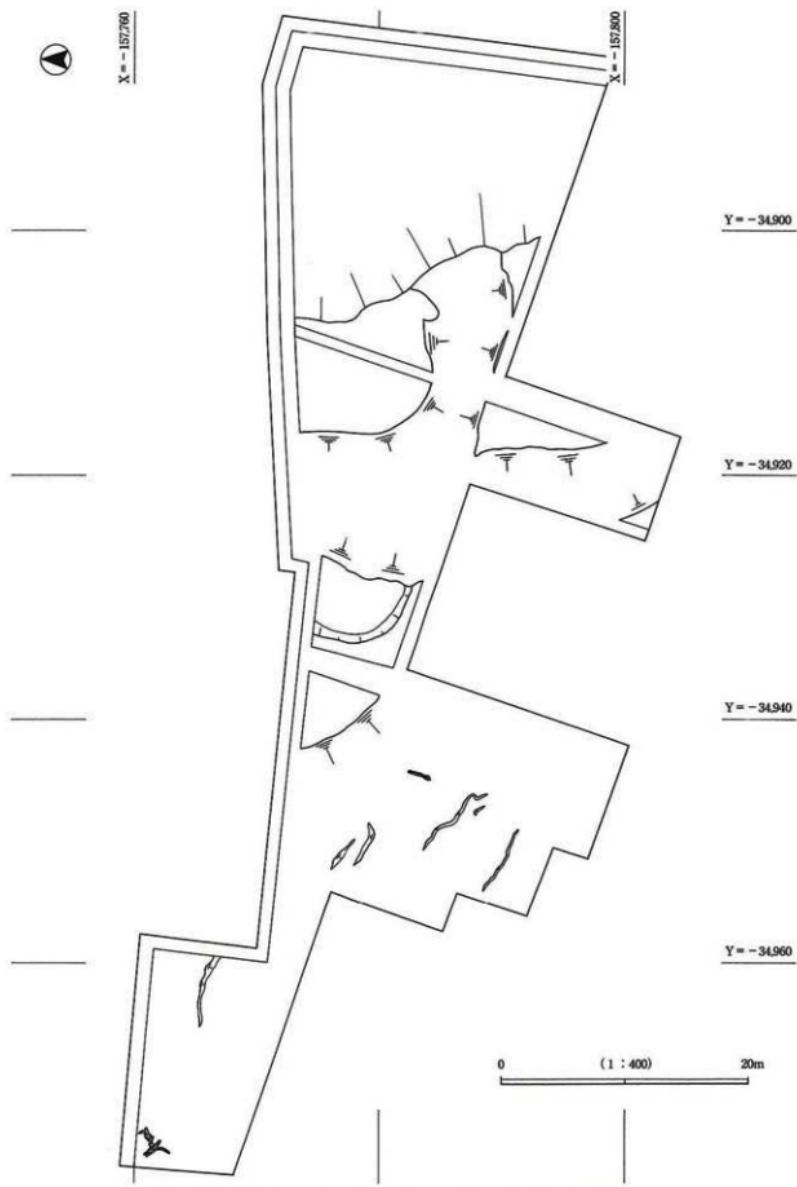


図70 96-1-1・2・3トレンチ 第8面 平面図

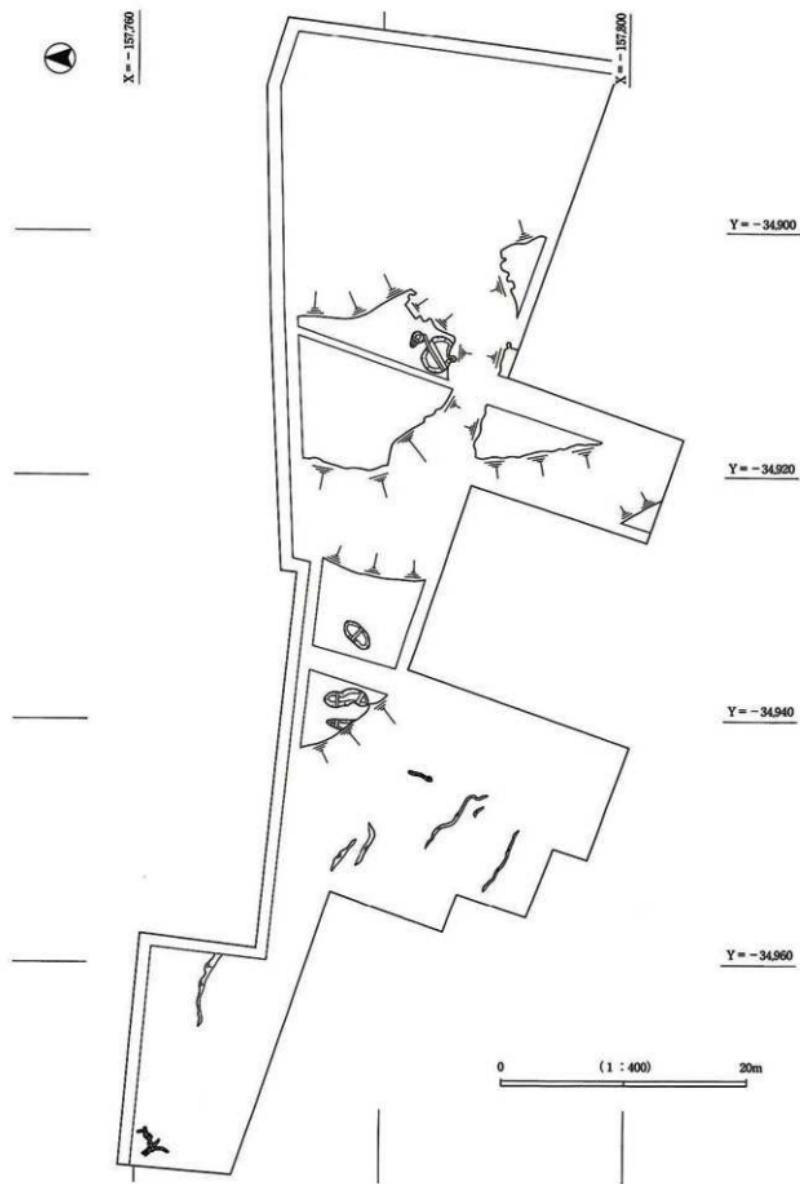


図71 96-1-1・2・3 トレンチ 第8面ベース 平面図

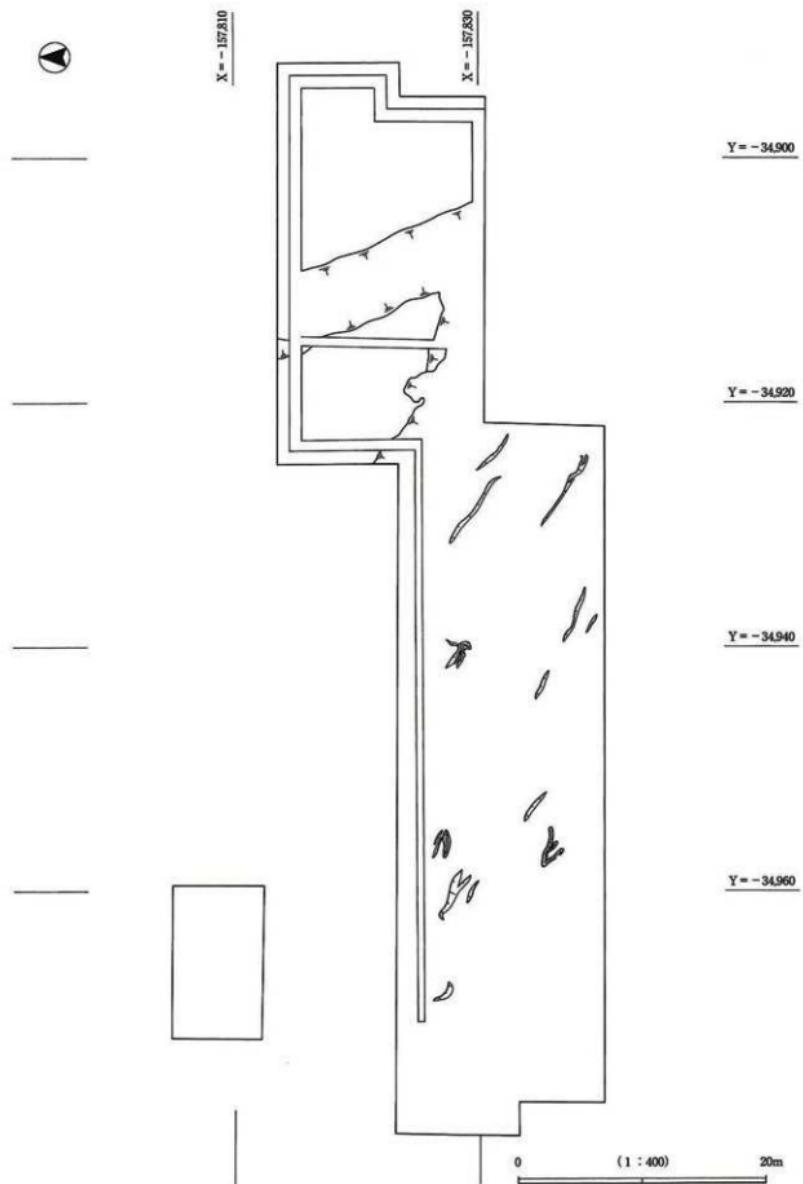


図72 96-1-5 トレンチ 第8面ベース 平面図

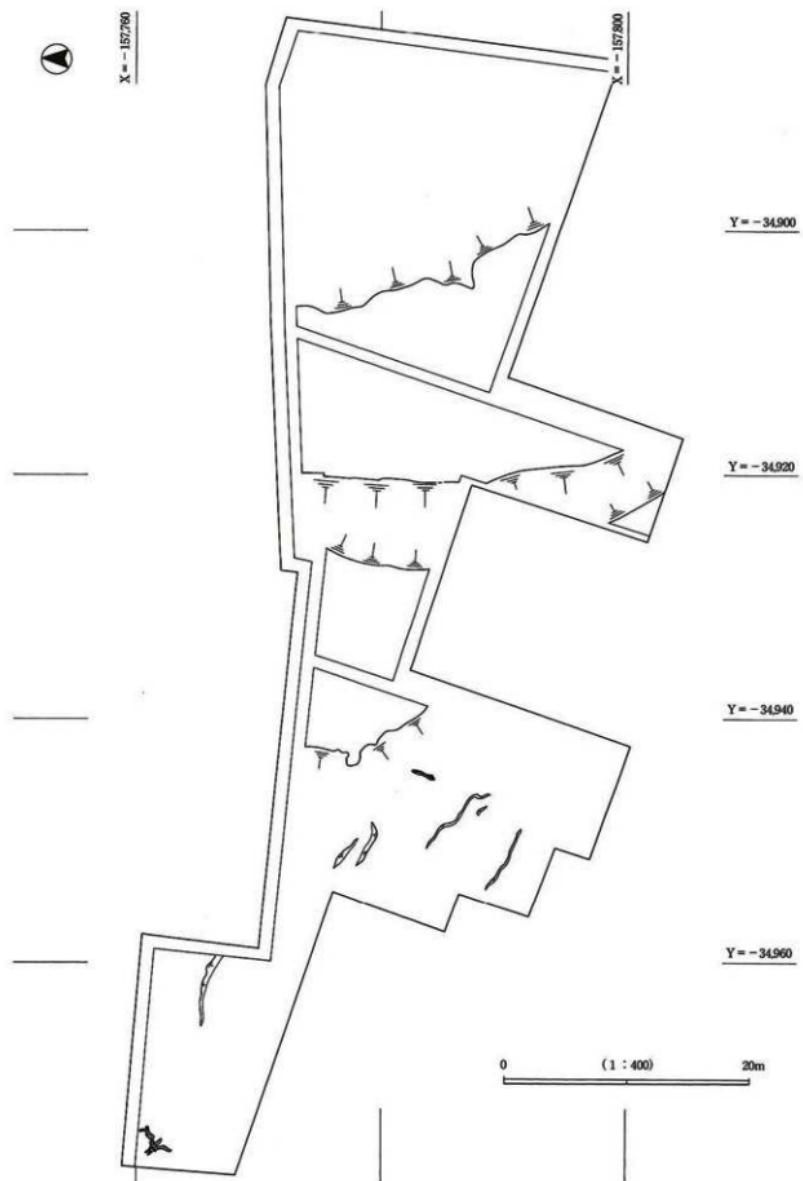


図73 96-1-1・2・3 トレンチ 第9面 平面図

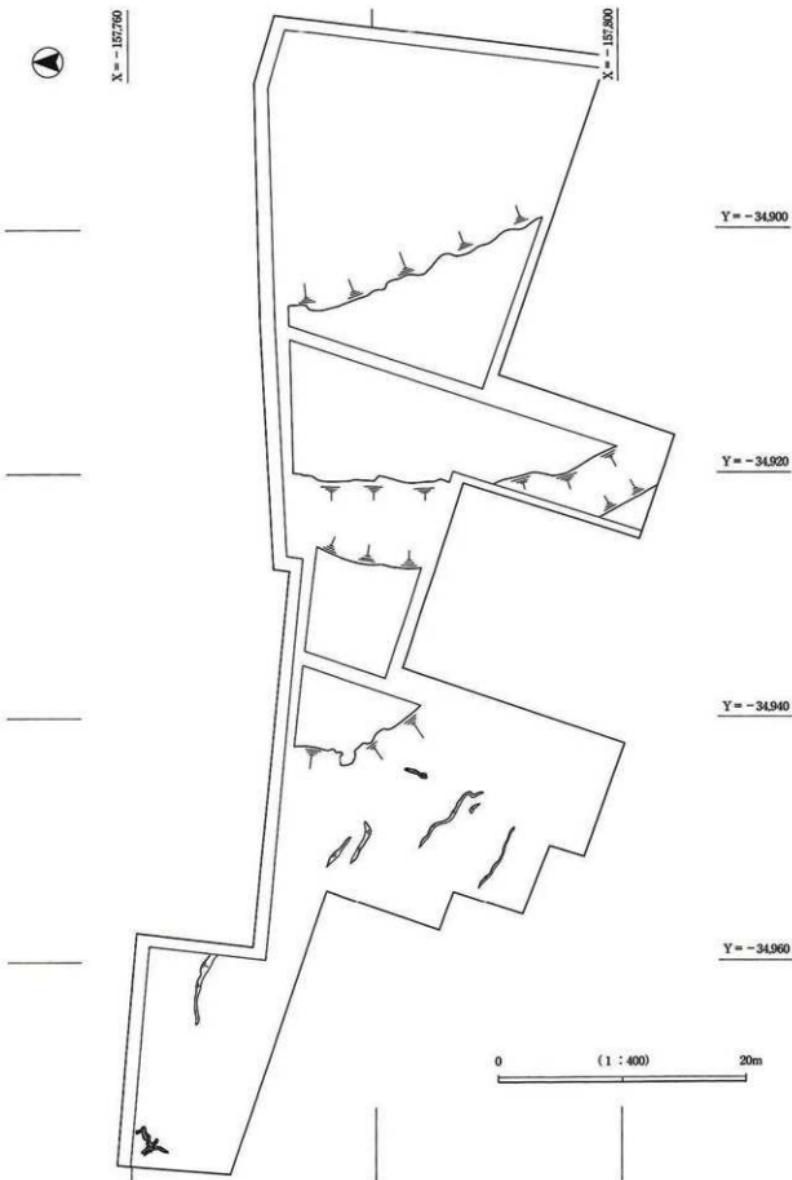


図74 96-1-1・2・3 トレンチ 第9面ベース 平面図

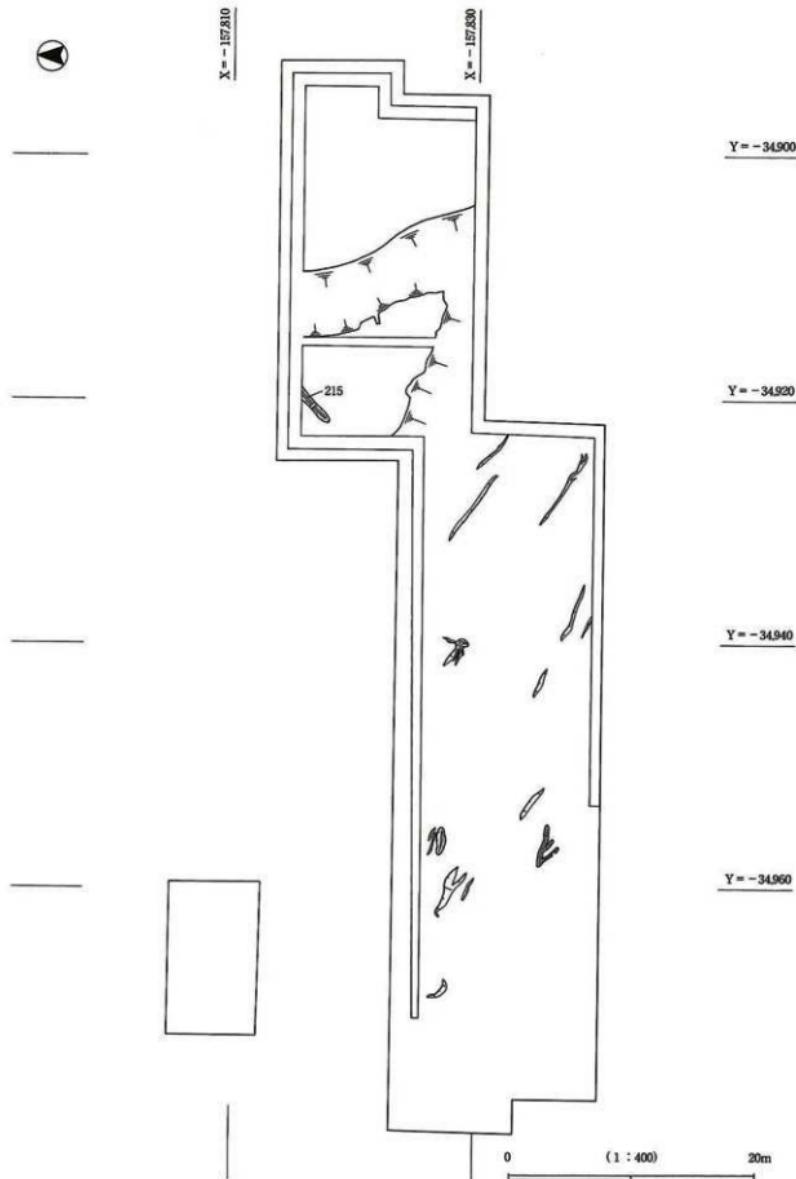


図75 96-1-5 トレンチ 第9面ベース 平面図

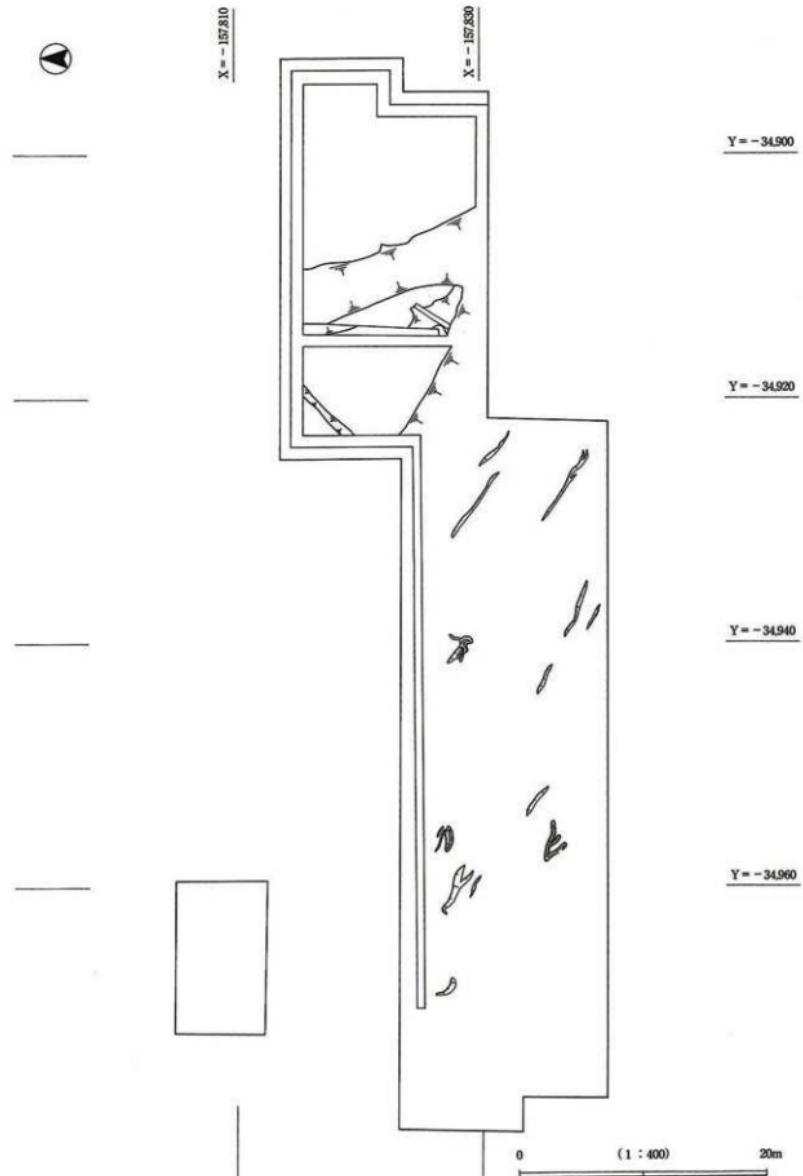


図76 96-1-5 トレンチ 第10面 平面図

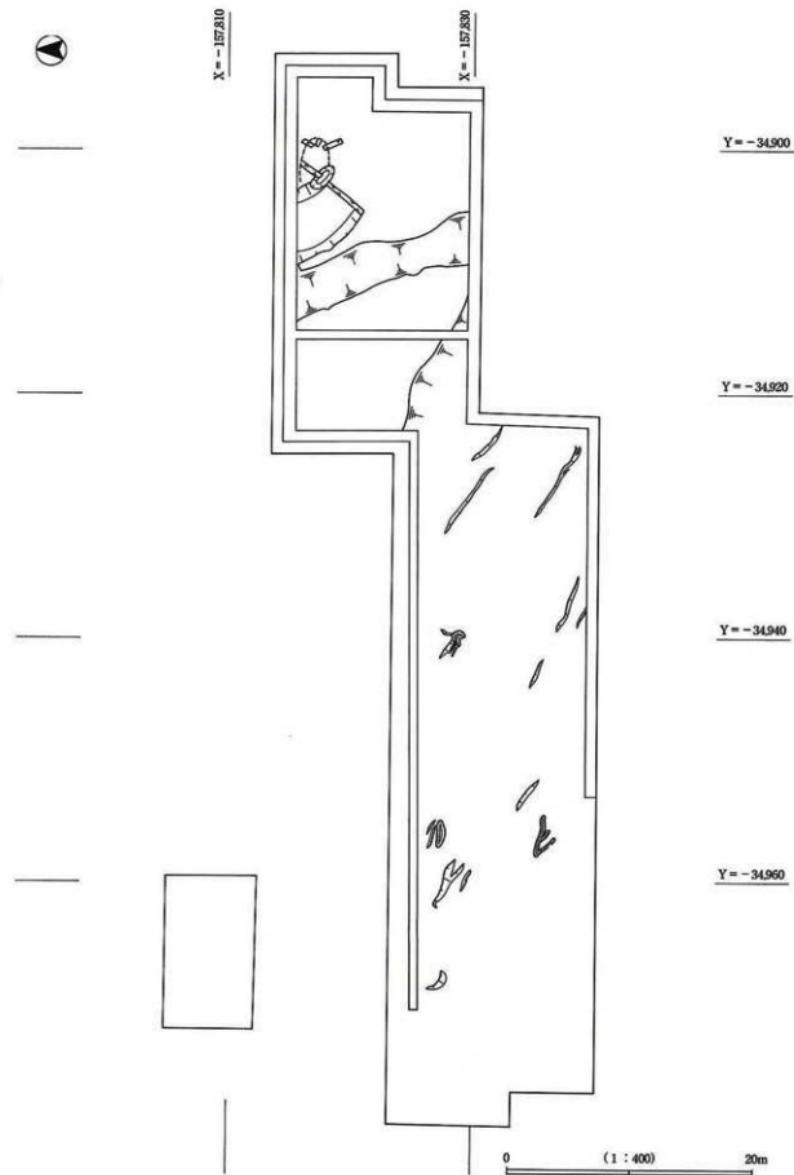


図77 96-1-5 トレンチ 第11面 平面図

第2節 96-2-1~3トレンチ

第1面(図79. 写真図版20)

府営住宅建設時の盛土・旧表土・洪水砂層を除去した面である。

3トレンチから1トレンチにかけて南北方向の畦畔、1トレンチではそれにつながる東西方向の畦畔、さらに東西方向畦畔から北へのびる畦畔を検出した他、1~3トレンチ全域で東西方向の鋤溝を検出した。鋤溝内には部分的に耕作具痕が見られた。

標高は2トレンチではT.P.15.1m~15.3m、3トレンチではT.P.15.3m前後で東側が高い傾向にある。3トレンチの畦畔上面の標高はT.P.15.4m。当面を覆う洪水砂層から、染付碗等が出土した。

第2面(図80. 写真図版21)

1~2面間に自然堆積層はなく、1面作土を除去した面が第2面となる。

1層が粗砂混じりシルトであることから、本来2面上に堆積していた自然堆積層が、1面耕作時に攪拌され1層に取りこまれたと理解している。

全域で南北方向の鋤溝を検出した他、1トレンチでピット・土坑、2トレンチ西側で南北6.5m、東西2.5~3mの平面方形の範囲で足跡が密集する部分、3トレンチで南北に連なる土坑群を検出した。

標高は2トレンチでT.P.14.8m、3トレンチ西側でT.P.14.9m、東側ではT.P.15.15m前後を測る。1面と同様に東が高い傾向にある。

第3面~第5面

第3・4面は2トレンチ西半で部分的に検出した。3・4層は、第5面が2トレンチ東端で西へ落ちて低くなる部分に堆積している。3・4層共に砂混じり粘土である。

5面は2トレンチから3トレンチ西半で検出した。いずれの面でも足跡を検出したにとどまる。

遺物は5層から土師器小皿が1点出土した。

第6面(図81. 写真図版22・23)

下面の洪水砂層上面では南北方向に走る溝を6条検出した。溝の深さは5cm~15cm程度と浅く凹地状を呈する。

第7面(図82. 写真図版23・24)

2トレンチ西端の低い部分で南北に走る溝1条を検出した。幅2m~4.5m、深さは25cm~50cmを測る。埋土は上層中疊混じりシルト、下層は粘土である。

第8面(図83. 写真図版24~26)

厚く堆積した砂層を除去した河床面である。水流によるものか、南東から北西方向に幾筋もの抉れが見られる。河床までの砂の堆積は約3mで、河床の標高はT.P.12mを測る。

第8面上に堆積している砂は、河床の抉れの方向、砂の厚みからみて、96-1-4・5トレンチ第4面で検出した遺構5(流路)埋土と同一であると考えられる。

第8面では縄文時代晩期の土器が1点出土した。(図85)

96-2-1~3トレンチ出土遺物(図84)

96-2-1~3トレンチで出土した遺物は図84に掲載している。84-1~7は近代洪水砂層、8は5層、9~15, 22, 23は洪水砂層、16, 19, 20は洪水砂最下層、21, 24~26は河川、17, 18はトレンチ壁および側溝から出土している。

1～7は肥前系磁器の染付碗または皿で、見込部に二重圓線とコンニャク印判五弁花文が施されたものが多い。1, 3の高台内の銘はそれぞれ「寿」・「渦福」であろう。1, 4の外面文様は丸文で、2の外面文様は1重網目文である。5の見込部には胎土目が残存している。6は見込部に「松竹梅」の文様が施され、蛇ノ目釉剥ぎ凹形の高台を有している。これらの磁器はおおむね18世紀前半代の所産であろう。

8, 9は土師器小皿である。8の口縁部にはヨコナデが施される。9の口縁部はいわゆる「ての字」で、底部には指頭圧痕が認められる。10は土師器高台付皿で、坏部外面下半にはユビオサエが確認できる。11は和泉型瓦器椀で、外面はユビオサエ・ヘラケズリが施された後へラミガキが施される。内面は全面にヘラミガキが施され、見込部には斜格子状暗文が施される。8～11はいずれも中世の所産で、11～12世紀の範疇で捉えられる。16は土師質真蛸壺で、口縁部に穿孔が認められる。体部外面にはヘラ記号（屋号か）が線刻されている。田山遺跡（阪南市）に類例があり、12～13世紀の所産であろう。

12～15は須恵器である。12は小型短頸壺で、全体が回転ナデで調整されているが底部は未調整である。13は有蓋高坏で、坏部の一部を欠損している。坏部外面下半は回転ヘラケズリで調整される。14は初期須恵器と考えられる把手付椀で、把手部を欠損している。底部には静止ヘラケズリが施されている。15は高台付坏である。14は5世紀中頃、13は5世紀後半、12, 15は8世紀の所産である。

17, 18は均整唐草文軒平瓦で、河内国分寺系瓦と考えられる。古代の所産である。

19は銅製の鉈尾（鎧帶用）で、完成品ではなく2個体を分離していない連鑄式の鋳放し状態である。このような状態での出土例はほとんど類を見ない。それぞれ体部に3つの足が残存している。体部の一端には切断した痕跡があり、もともとは3連で鋳造されたと考えられ、1個体は使用されたのであろう。もう一端には鉤状の押湯に相当する部分が残されている。この部分は本来鋳上がったあと切断されて再利用されるものである。鋳放し状態であることや押湯部分が残存することから、周辺で鋳造作業がおこなわれていたことは確実である。8～9世紀の所産であろう。20は銅製の資金具で、大きさから刀子用であると推定できる。19と同時期であろうか。23は石製巡方（鎧帶）である。サヌカイト製で全面が丁寧に研磨されている。2孔1対の潜り穴が2箇所残存し、欠損部にもう2箇所痕跡が確認でき、もともと4箇所潜り穴があったことがわかる。この潜り穴は、非常に細かい敲打によって貫通させている。残存状態から4.2cm四方の正方形であったと推定できる。西大路遺跡（岸和田市）に類例があり、9世紀の所産であろう。

21は形象埴輪の端部片である。鋸齒文線刻が認められることから盾形埴輪の可能性が考えられる。胎土に角閃石を含む。24は円筒埴輪片で、底部あるいはスカシ孔部分が残存している。7本/cmのタテハケ1次調整後にB種ヨコハケが施される。B種ヨコハケが施されることから川西編年IV期であると考えられるが、タガが低い台形を呈していることからV期に下るものかもしれない。両者とも5世紀後半の所産であろうか。

22は壺形土器で、頸部に櫛描直線文が3条確認でき、弥生時代中期前葉の所産である。

25・26は繩文土器である。25には突帯が1条認められ、体部外面に横方向のヘラケズリ調整が確認できる。船橋式であろう。26は口縁部外面が強くなられ、一部に二枚貝条痕が認められる。頸部にわずかにがら屈曲が確認でき、屈曲部より下半に横方向のヘラケズリが施される。体部内面は板ナデによる調整が施され、一部にハケ目状の痕跡が確認できる。滋賀里Ⅲa式であろう。

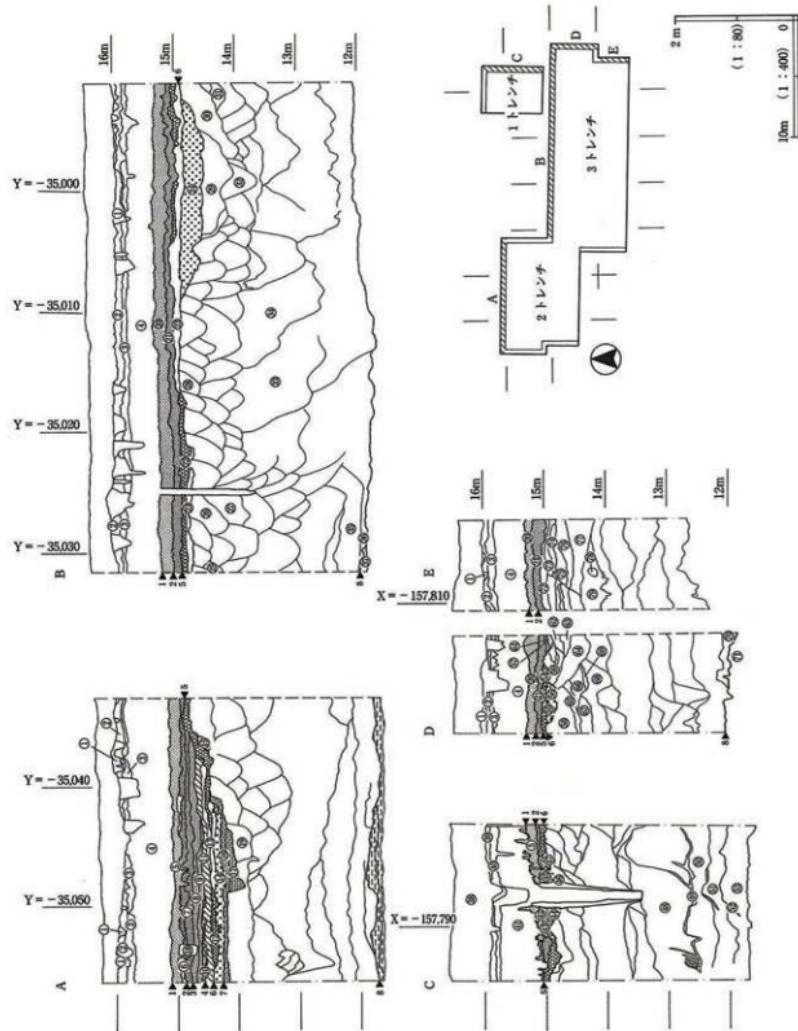


図78 96-2-1・2・3トレンチ 断面図

1	2.5Y7/6	明黄褐色
2	2.5Y4/2	暗灰黄砂混シルト
3	10YR4/2	灰黄褐砂混シルト
4	2.5YR7/6	明黄褐細混砂
5	10Y6/2	オリーブ灰粗砂混シルト 1層
6	7.5Y6/1	灰粗砂混シルト（やや移多し）
7	7.5Y4/2	灰オリーブ中粒砂混粘土 2層
8	10Y4/2	オリーブ灰中粒砂混粘土 3層
9	10Y3/1	オリーブ黑中粒砂混粘土
10	10Y5/1	灰粗砂混粘土
11	2.5GY3/1	暗オリーブ細砂混粘土 4層
12	2.5GY3/1	暗オリーブ灰细砂混粘土 5層
13	7.5Y5/2	灰オリーブ中粒砂
14	10Y3/2	オリーブ黑中粒砂混粘土 6層
15	2.5Y6/4	にぶい黄細混粗砂 2.5Y7/3 暗黄細砂（中粒砂と粗砂含む。ラミナ有り）
16	5GY3/1	暗オリーブ灰中粒砂混シルト（砂やや含む） 7層
17	10Y3/1	オリーブ黑粘土
18	5Y6/3	オリーブ黄粗砂（細繩混）
19	7.5Y3/1	オリーブ黑粘土
20	2.5Y4/2	暗灰黄シルト混細砂（粗砂含む） 管状斑 1層
21	5Y4/2	灰オリーブ細砂混シルト（中粒砂含む） 管状斑 2層
22	2.5Y4/3	オリーブ細砂（シルトと中粒砂含む） 管状斑 3層
23	5Y5/1	灰中粒砂と粗砂（シルトと粗砂含む）
24	2.5Y7/3	浅黄細砂（中粒砂と粗砂含む。ラミナ有り） 2.5Y6/4にぶい黄細繩混粗砂
25	5Y6/4	オリーブ黄粗砂
26	2.5Y6/6	明黄褐中粒混粗砂
27	2.5Y7/4	浅黄中粒混粗砂 2.5Y6/4にぶい黄粗砂
28	2.5Y7/6	明黄褐中粒砂（粗砂含む）
29	5Y6/3	オリーブ黄粗砂（中粒砂含む。ラミナ有り） 5Y5/2 灰オリーブ細砂混シルト（ラミナ）
30	7.5Y5/1	灰中粒砂（粗砂と混含む。掘難有り）
31	2.5Y7/3	浅黄細砂と中粒砂（ラミナ）
32	2.5Y7/2	灰黄細砂
33		暗茶褐色粗砂、礫
34		黄褐色粗砂
35		暗灰褐混粗砂
36	5GY4/1	暗オリーブ灰シルト
37	10Y3/1	オリーブ黑粘土（上部に植物炭化物含む）
38	2.5Y6/6	明黄褐中粒混中粒砂
39	5G3/2	オリーブ黑シルト質細砂
40	2.5Y4/3	オリーブ褐中粒混シルト質細砂
41	5Y6/4	オリーブ褐中粒混粗砂
42	5Y4/2	灰オリーブ粗砂混シルト（1層より疊多い） 2層
43	2.5YS/4	黄褐中粒混粗砂（土壤化している） 5層
44	5Y5/2	灰オリーブ細砂混シルト質細砂（土壤化している）
45	10YR5/6	黄褐中粒混粗砂 6層
46	2.5Y6/3	にぶい黄中粒砂 6層
47	2.5YS/4	黄褐中粒砂（やや土壤化している） 6層
48	10YR5/3	暗黄褐粗砂 7.5Y6/8粗粒砂
49	2.5YR3/6	暗赤褐砂
50	10YR6/4	にぶい黄橙粗砂
51	10YR5/2	灰黄褐細混砂
52	5YR2/4	極暗赤褐砂
53	10YR6/4	にぶい黄橙粗砂
54	10YR5/6	黄褐シルト混粗砂 2.5Y5/4黄褐シルト 5層
55	5Y6/2	灰オリーブ粗砂 6層
56	7.5Y5/2	灰オリーブシルト混細砂 6層
57	5Y4/2	灰オリーブ中粒砂混粗シルト 6層
58	2.5YS/6	黄褐粗砂中粒砂
59	5Y5/3	灰オリーブ細繩混粗砂
60	5Y4/4	灰オリーブ細繩混粗砂
61	10YR3/2	黑褐細混粗砂
62	5Y5/2	灰オリーブ細砂
63	5Y5/3	灰オリーブ粗砂
64	10YR5/3	にぶい黄褐繩混粗砂
65	2.5Y7/6	明黄褐細砂
66	5Y6/6	オリーブ中粒砂
67	5Y6/6	オリーブ粗砂混粗砂
68	2.5Y6/4	にぶい黄褐混粗砂 5Y6/3 オリーブ黄中粒砂
69	5Y6/4	オリーブ黄中粒砂
70	2.5GY2/1	黑褐砂混シルト
71	10GY5/1	綠灰粘土 8層
72	2.5Y5/2	暗灰黄中粒砂混粗砂
73	5Y5/3	灰中粒砂
74	5Y5/4	オリーブ粗砂
75	10YR6/6	明黄褐細繩混中粒砂
76	5Y6/3	オリーブ黄細砂
77	5Y5/3	灰オリーブ粗砂
78	2.5GY4/1	暗オリーブ灰粘土
79	10YR6/6	明黄褐粗砂（繩混含む）

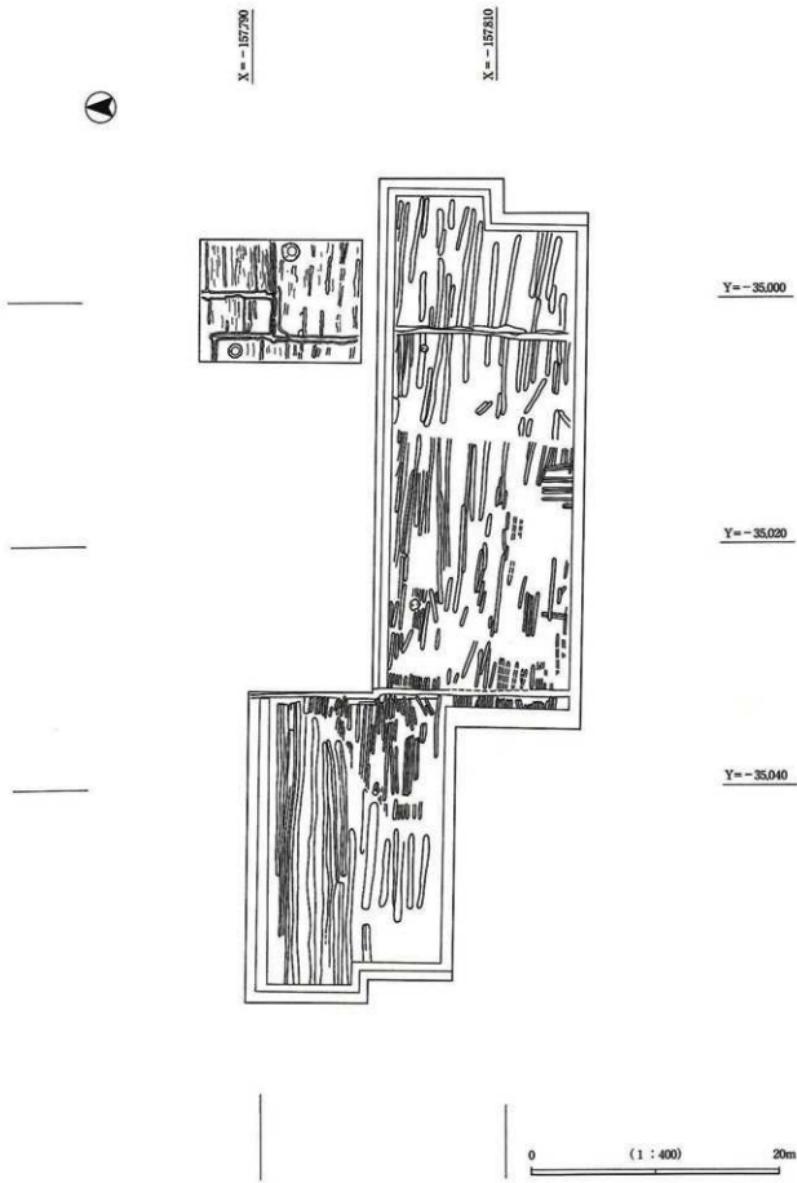


図79 96-2-1・2・3 トレンチ 第1面 平面図

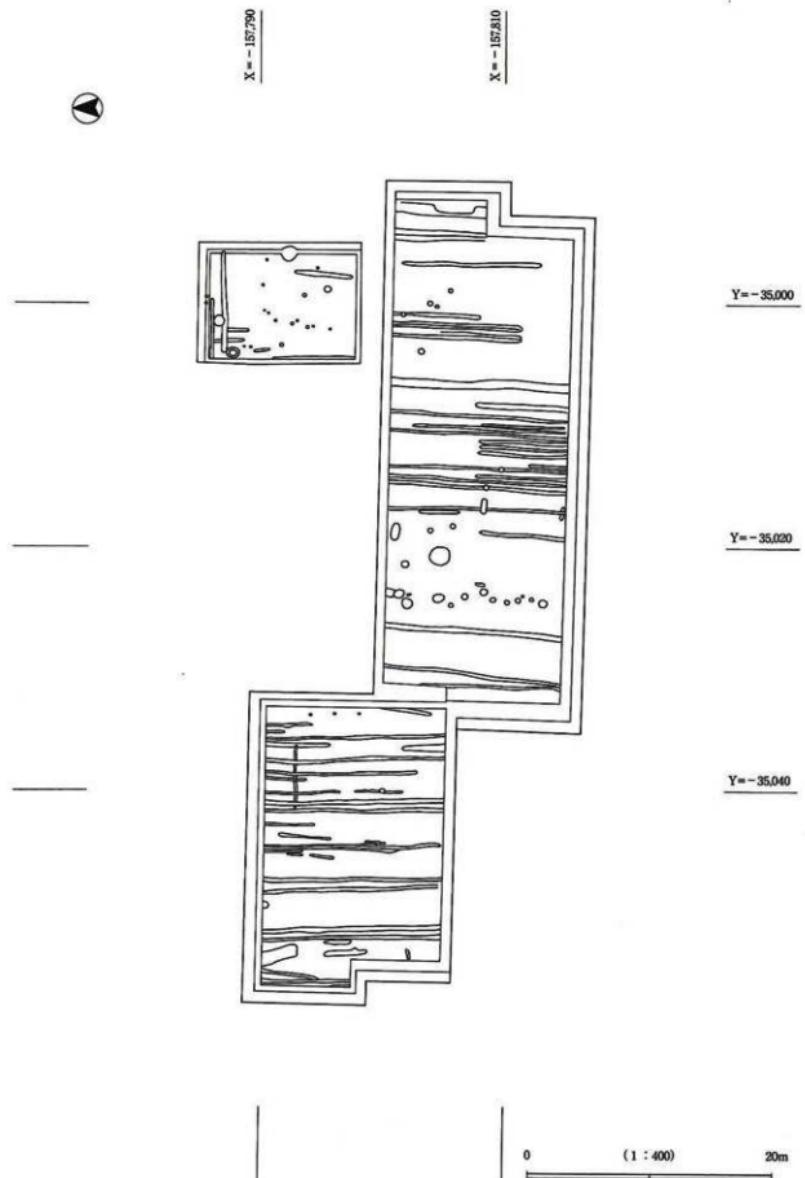


図80 96-2-1・2・3 トレンチ 第2面 平面図

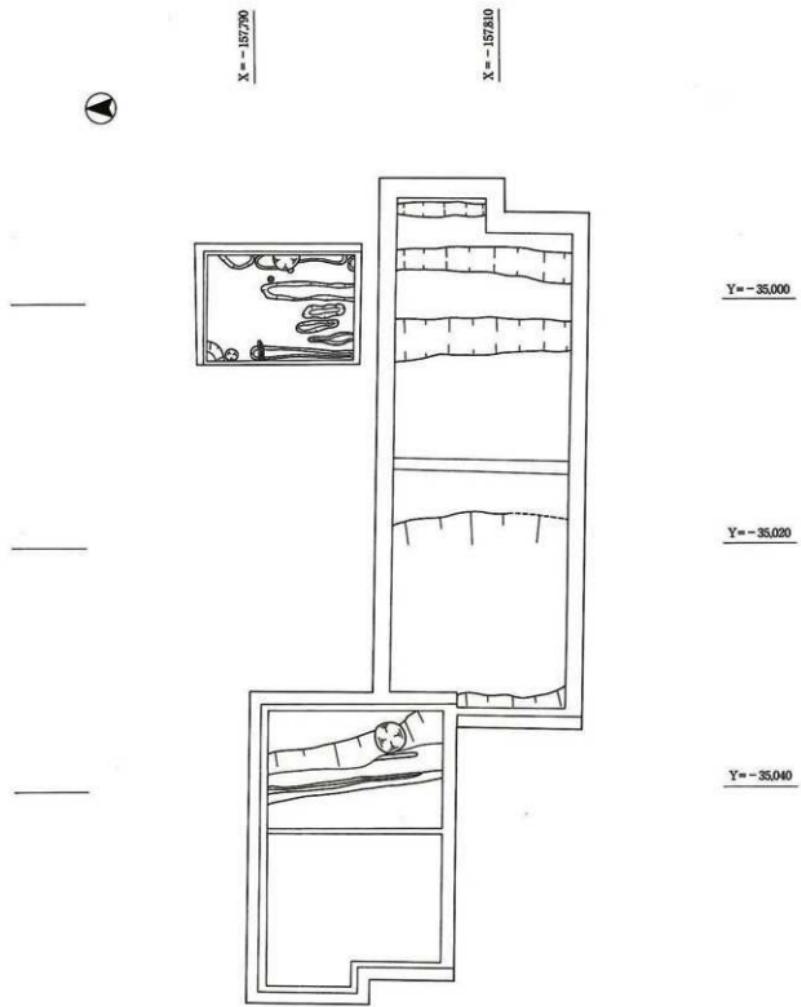


図81 96-2-1・2・3 トレンチ 第6面 平面図

0 (1 : 400) 20m

(A)

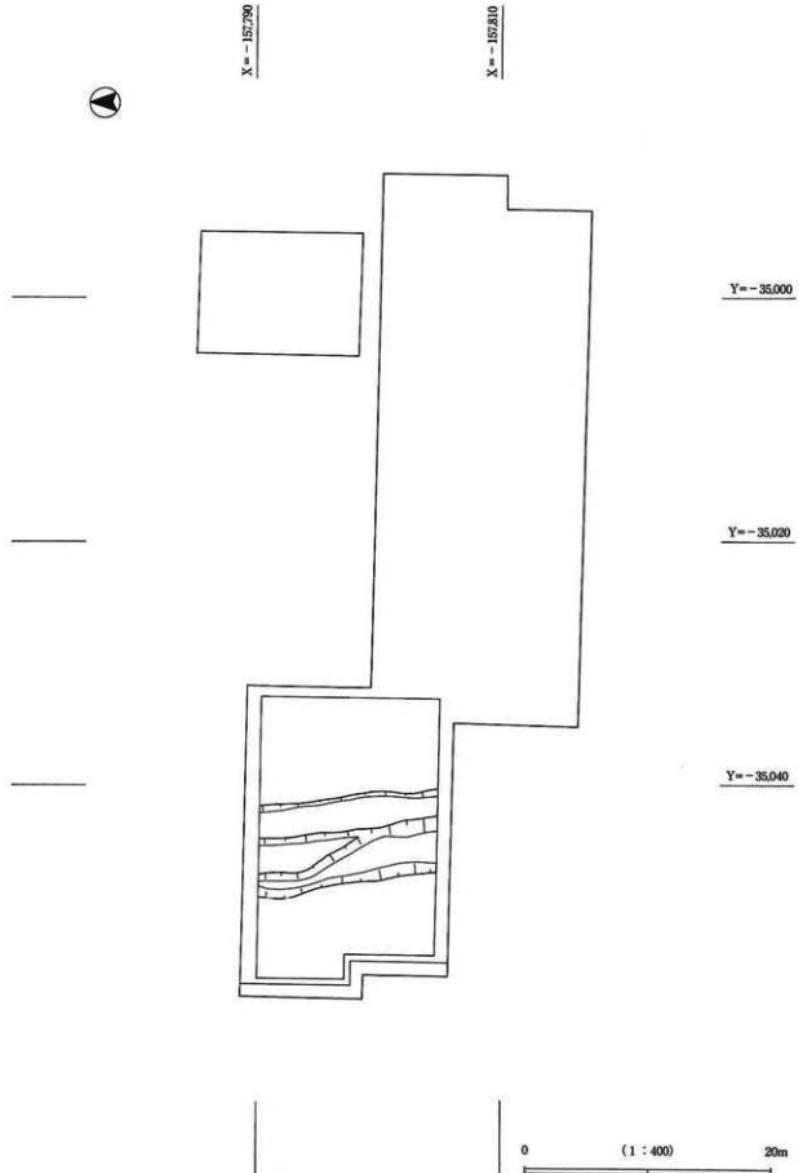


図82 96-2-1・2・3 トレンチ 第7面 平面図



X = - 157.70

X = - 157.80

Y = - 35.000

Y = - 35.020

Y = - 35.040

0 (1 : 400) 20m

図83 96-2-1・2・3 トレンチ 第8面 平面図

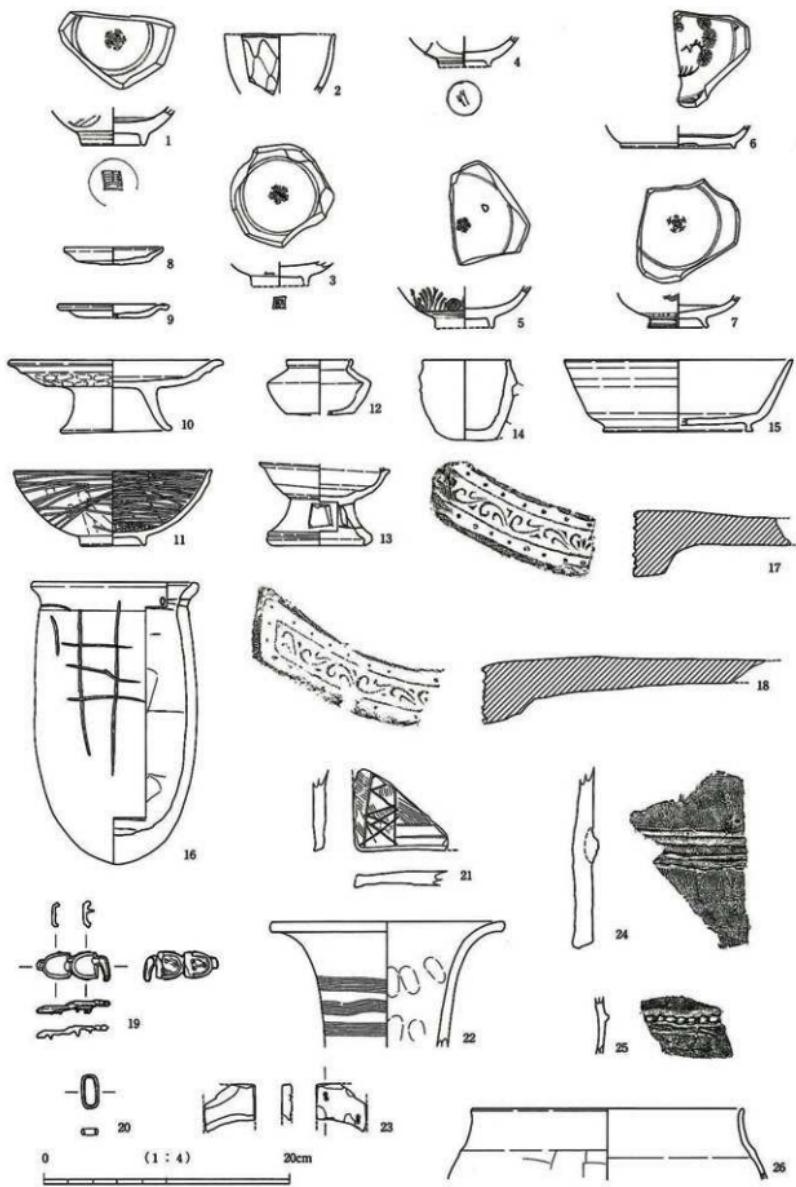


図84 96-2-1・2・3 トレンチ 出土遺物

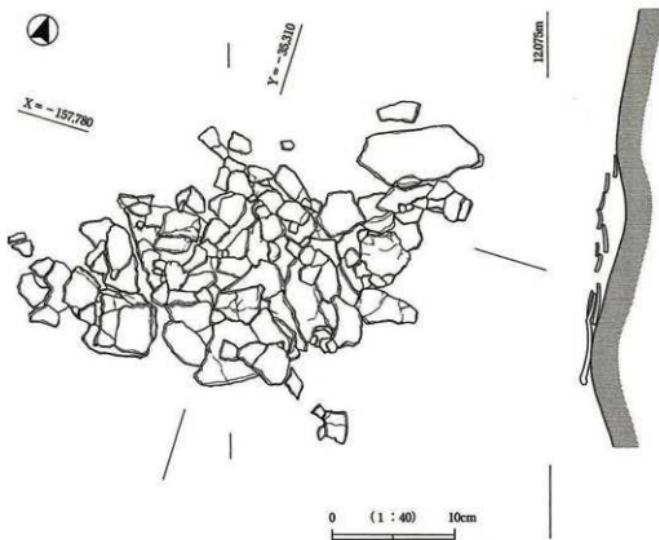


図85 96-2-1・2・3トレンチ 第8面 遺物出土状況

第IV章 まとめにかえて

船橋遺跡は昭和31年から33年にかけて大和川遺跡調査会により調査が行われ、豊富な資料が出土し、つとにその名が知られるようになった。

しかし、それ以降は大規模な調査が行われることはなかった。今回府営住宅・建設省河川事業に伴い約4,700m²の調査を行い、中世から古代末、古墳時代前期、弥生時代中期の遺構・遺物を検出した。

以下2調査区の遺構面の対応関係を列記し、まとめにかえたい。

96-1調査区第1面から第4面、96-2調査区第1面から第7面は、耕地として利用されていた。ただし96-1調査区第4面ベースで柱痕跡が確認できるピットが存在することから近くに集落の存在が想定される。

96-1調査区第4面で流路が占める割合は65%、96-2調査区第7面では100%流路上面となり、96-1調査区で部分的に検出した古墳・弥生時代（第5・6）面は遺存していない。

96-1調査区第5～5-2面では古墳時代前期庄内式～布留式にかけての遺構・遺物を検出した。特に96-1-5トレンチの遺構185・186（溝）は先述したようにコ字形に曲がる溝である可能性があること、同様に96-1-1トレンチで検出した遺構122（溝）もほぼ直角に曲がることから1辺10m程度の方形周溝墓の可能性を考えられる。

第6面では弥生時代中期を中心とする遺構・遺物を検出したが、詳細は明らかにできなかった。

第7面ではベース層から縄文時代晩期の船橋式土器を検出した。96-2調査区第8面と対応すると考えられるが標高が96-1調査区でT.P.14m、96-2調査区でT.P.12mと2mの比高差があることから、周辺の調査を待って結論を出したい。

図 版

図版 1



96-1-5 トレンチ1面（南西から）

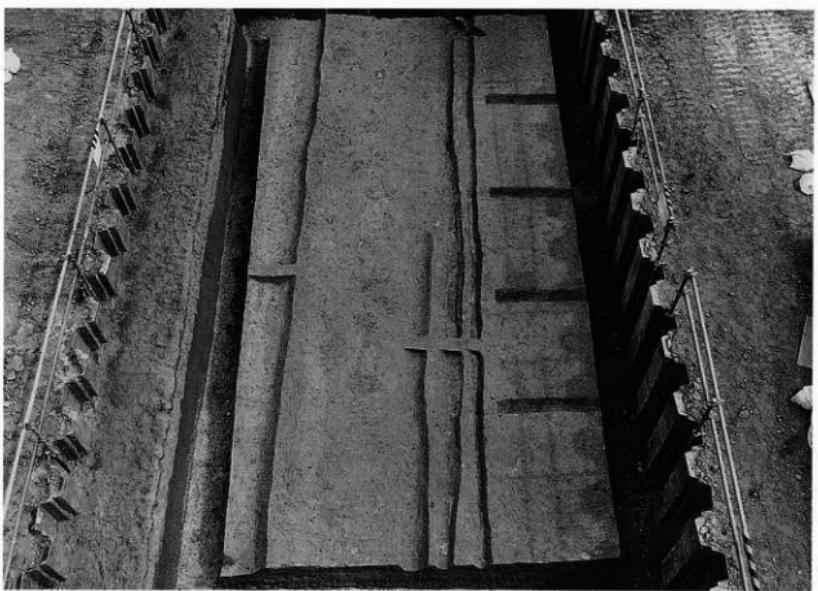


96-1-5 トレンチ1面（東から）

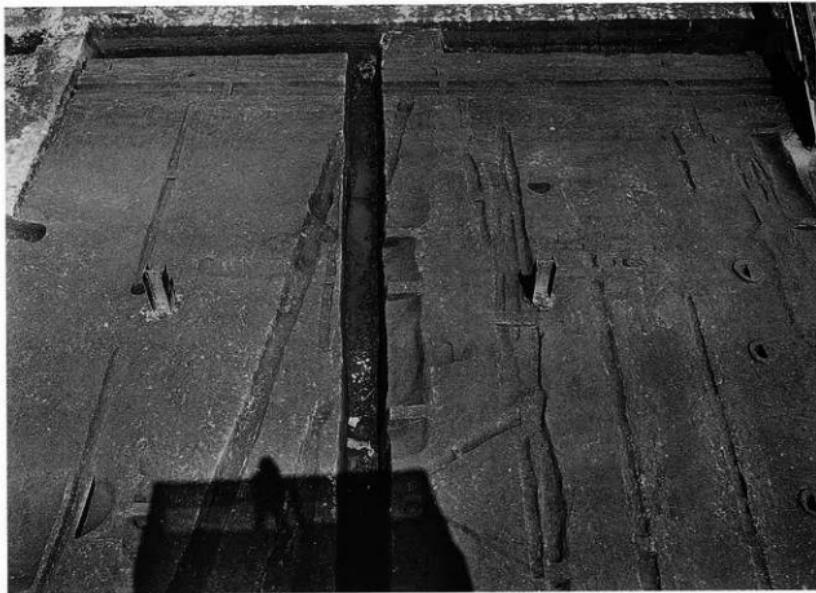
図版2



96-1-5 トレンチ1面 (南から)



96-1-4 トレンチ2面 (西から)



96-1-5 トレンチ2面（南から）



96-1-5 トレンチ3面 造構172瓦積戸枠（西から）

図版4



96-1-5 トレンチ3面 遺構172曲げ物（西から）



96-1-5 トレンチ3面 遺構172曲げ物内（西から）

図版5



96-1-1 トレンチ4面 遺構1東壁（西から）

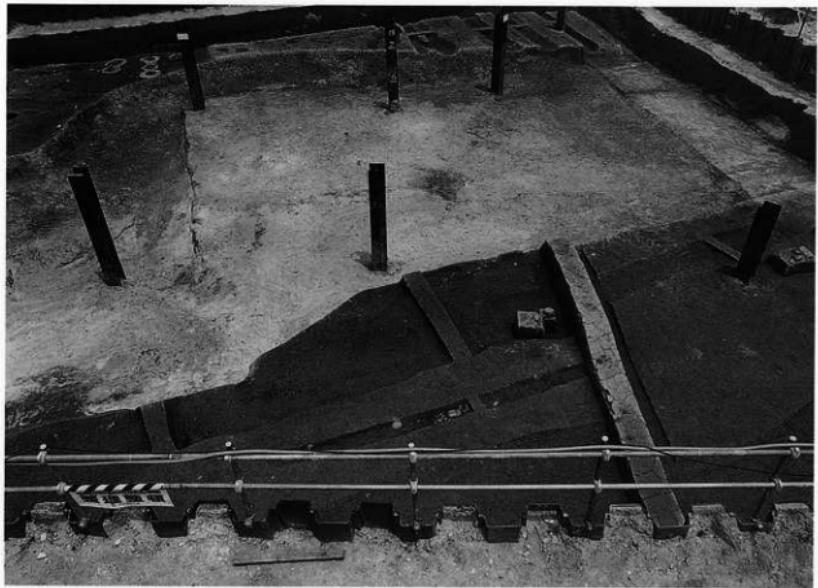


96-1-1 トレンチ4面 遺構5肩部断面（西から）

図版6



96-1-5 トレンチ4面 造橋5(東から)

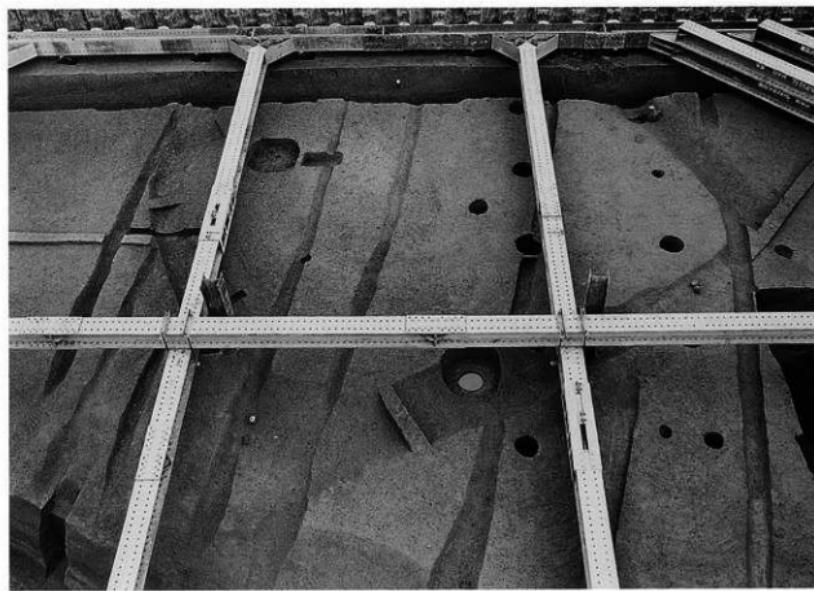


96-1-1 トレンチ4面ベース(南から)

図版 7



96-1-1 トレンチ4面ベース 遺構99（東から）



96-1-5 トレンチ5面（南から）

図版8



96-1-1 トレンチ5面（南から）



96-1-1 トレンチ5面 遺構122（東から）

図版9



96-1-1 トレンチ5面 遺構122(南から)



96-1-1 トレンチ5面 遺構123(南から)

図版 10



96-1-5 トレンチ 5面 遺構185北壁面内（南西から）



96-1-5 トレンチ 5面 遺構185（南西から）

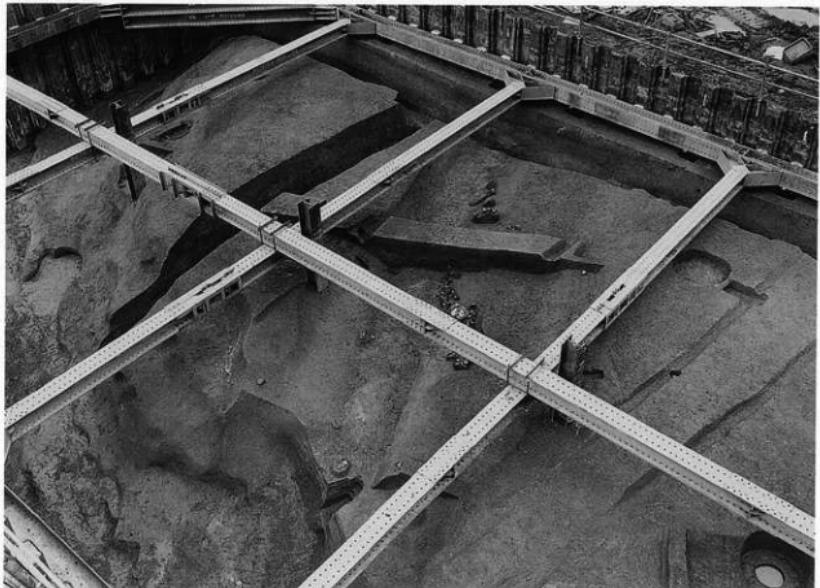


96-1-5 トレンチ5面 遺構185 (南西から)



96-1-5 トレンチ5面 遺構185 (南から)

図版 12



96-1-5 トレンチ5面 造構207 (南東から)



96-1-5 トレンチ5面 造構207断面 (南東から)



96-1-5 トレンチ 6面 (西から)



96-1-5 トレンチ 6面 (南東から)

図版 14



96-1-1 トレンチ 6 面ベース 遺物出土状況（南から）



96-1-1 トレンチ 6 面ベース 遺構141（西から）



96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺構129（北西から）



96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺構126 石器出土状況（東から）

図版 16



96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺物出土状況



96-1-1 トレンチ 6面ベース 土器152 (南から)



96-1-5 トレンチ 6層 土器279 (南から)



96-1-1 トレンチ 7面 (南から)

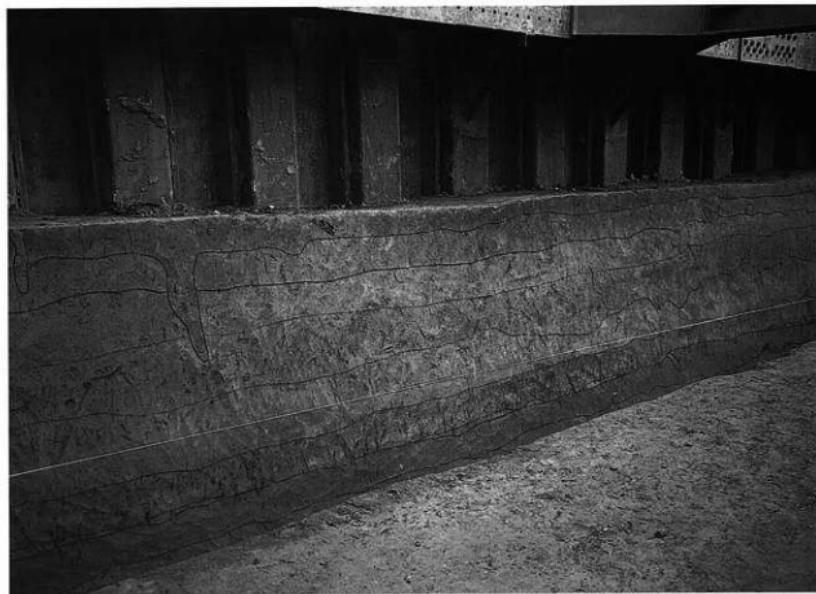
図版 18



96-1-1 トレンチ 8面 (南から)



96-1-1 トレンチ 道橋 1 東壁断面 (南西から)

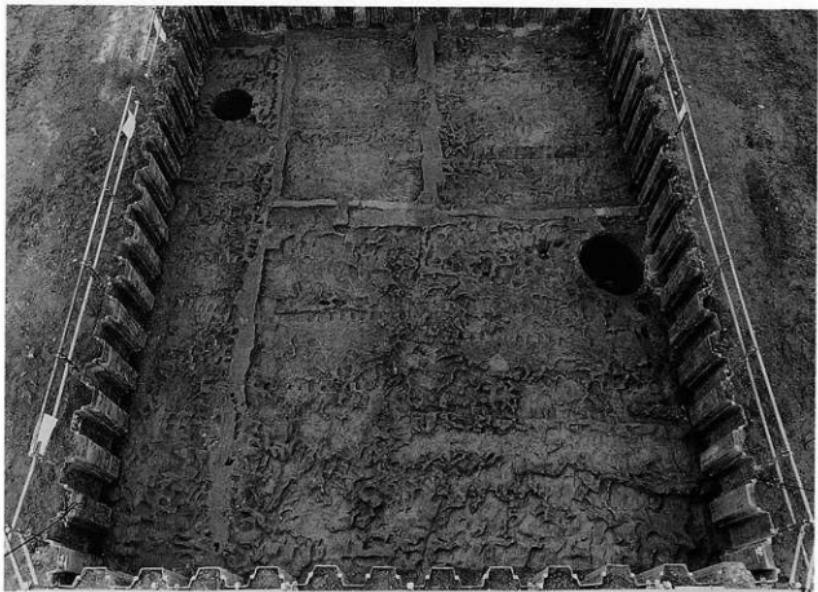


96-1-5 トレンチ 7～9層 北壁（南西から）



96-1-1 トレンチ 8面 8面～下層北壁（南東から）

図版 20



96-2-1 トレンチ1面 (南から)



96-2-3 トレンチ1面 東半 (南東から)



96-2-2 トレンチ 2面 西半（南から）



96-2-3 トレンチ 2面 中央（南から）

図版 22

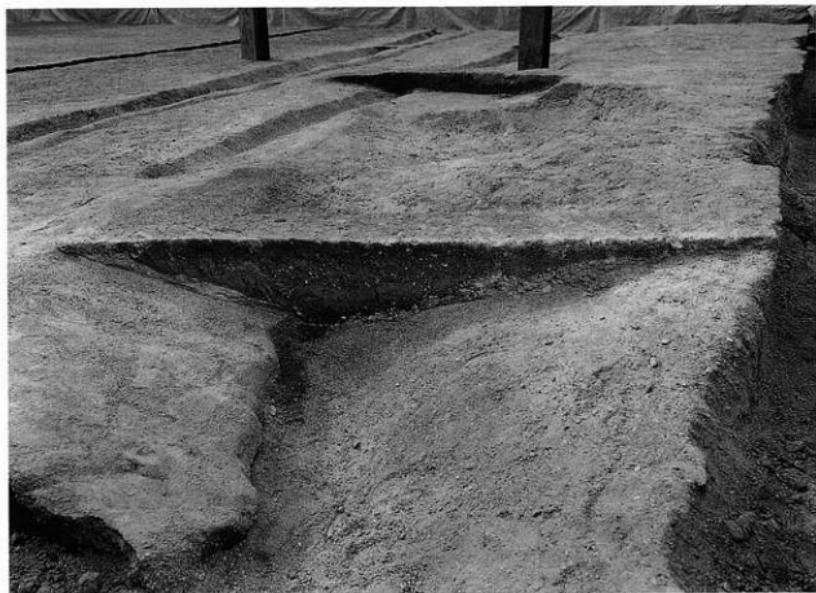


96-2-1 トレンチ 6面 全景（南から）



96-2-2 トレンチ 6面 東半（南から）

図版 23



96-2-2 トレンチ 6面 溝断面

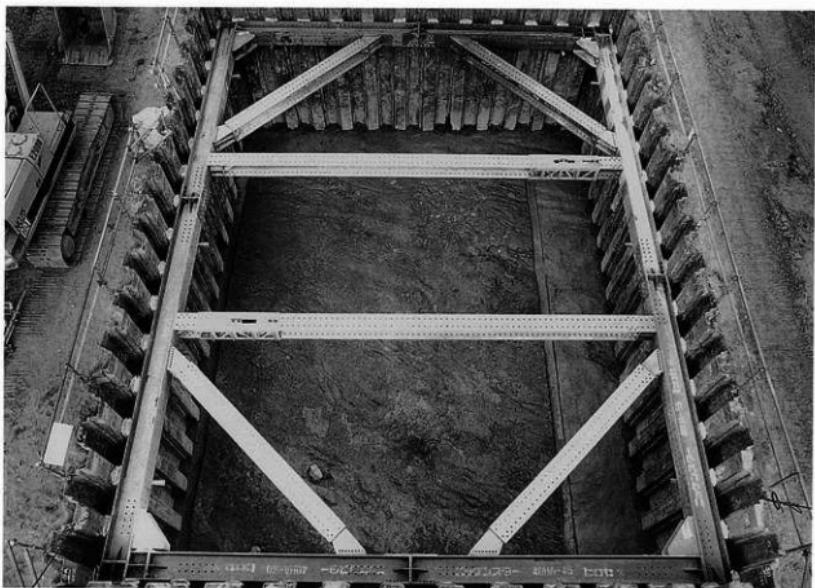


96-2-2 トレンチ 7面 全景（南から）

図版 24



96-2-2 トレンチ7面 溝断面



96-2-1 トレンチ 河床検出状況（南から）



96-2-2 トレンチ 河床 全景（南から）



96-2-1 トレンチ 河床 足跡

図版 26



96-2-3 トレンチ 河床検出状況（南東から）



96-2-3 トレンチ 河床 遺物出土状況

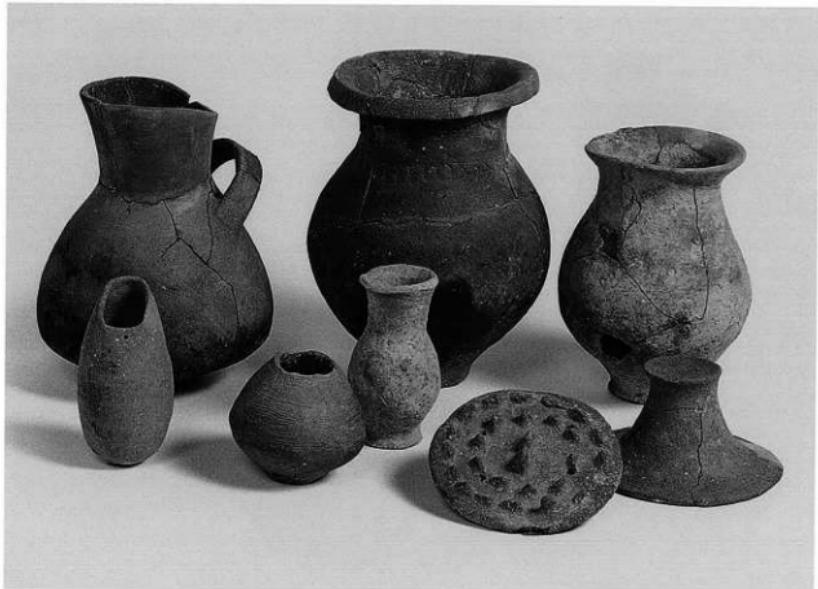


96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺構129出土遺物

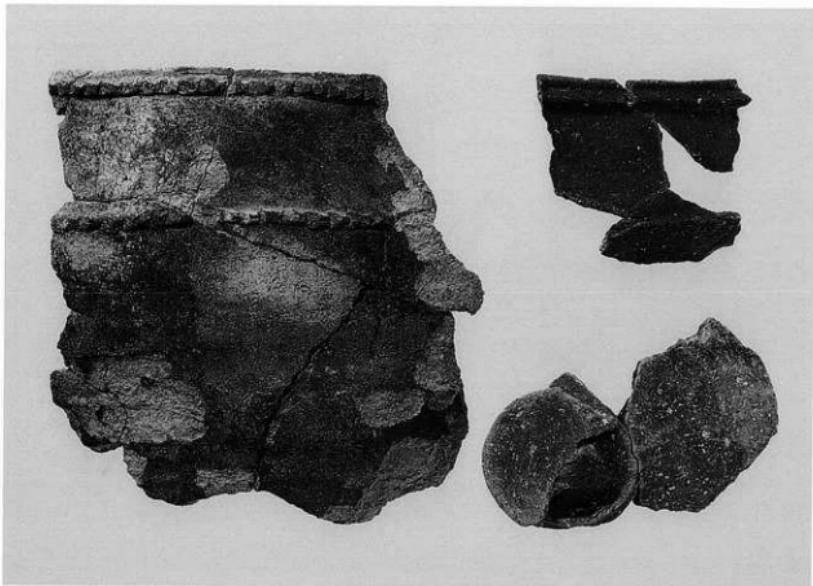


96-1-1 トレンチ 6面ベース 出土遺物

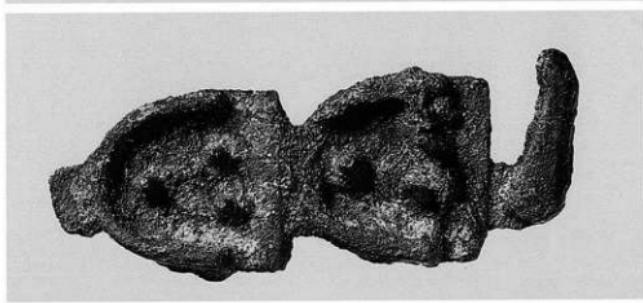
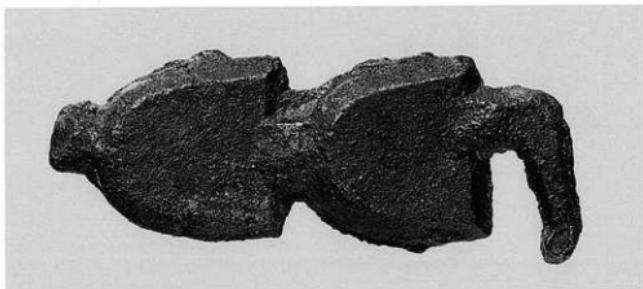
図版 28



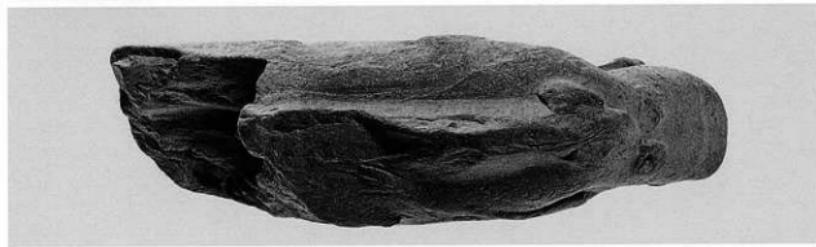
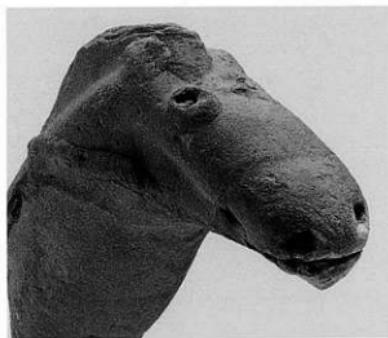
96-1-1 トレンチ 6面ベース 出土遺物



96-1-1 トレンチ 7b層 出土遺物



96-1-1~5 トレンチ遺構 5 出土遺物



96-2-3 トレンチ洪水砂層 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふなはしいせき							
書名	船橋遺跡							
副書名	建設省河川事業進入路建設及び府営美陵住宅代替に伴う調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	寺川史郎・若林邦彦・仲原知之							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒536-0016 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階 TEL 06-6934-6651							
発行年月日	1998年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積/m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふなはしいせき 船橋遺跡	おおさかふじいだらし 大阪府藤井寺市 おおいこちこうの 大井5丁目	27226		34度	135度	96-1調査区	3,434m ²	建設省河 川事業進 入路建設 に伴う事 前調査
				34分	37分	1996年3月		
				36秒	6秒	~		
				X	Y	1997年2月		
				-157.760	-34.880	96-2調査区	1,271m ²	
				~157.840	~35.060	1996年3月		
						~		
						1997年2月		
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項			
船橋遺跡	田畠	近世～現代	土坑・溝・畦畔	陶磁器・土師器				
		中世	溝・井戸	瓦器・土師器・須恵器				
		古代	溝・ピット・流路	土師器・黒色土器				
	古墳時代	古墳時代	土坑・溝・ピット	古式土師器・				
			方形周溝墓？	須恵器				
		弥生時代中期	溝・土坑・方形周溝墓？	弥生土器・打製石器				
		弥生時代前期～中期		弥生土器				
縄文時代晩期	流路	縄文土器						

船 橋 遺 跡

(財) 大阪府文化財調査研究センター

調査報告書 第29集

-建設省河川事業進入路建設及び
府営美陵住宅建替に伴う調査報告書-

編集・発行 1998年2月28日

(財) 大阪府文化財調査研究センター

〒536-0016 大阪市城東区蒲生2丁目11番3号 小森ビル4階

TEL 06-934-6651

印刷・製本 (株) 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2丁目6番8号

TEL 06-976-8761
